

学生と教職員のインターコミュニケーション誌エコノフォーラム21 / 関西学院大学経済学部

No.25  
March  
2019

# ECONO FORUM 21

KWANSEI GAKUIN University School of Economics



## AIと労働

# ECONO FORUM 21

2005年、エコノフォーラムは『エコノフォーラム21』という名前に変わりました。

エコノフォーラムは、もともとゼミを中心とする経済学部の活性化の「広場」でした。しかし、10年を経て、わたしたちは21世紀の世界経済と日本社会をもっと確実な「目」で捉え、経済学部から新鮮な発想で社会に向けて提言できれば、と考えるようになりました。『エコノフォーラム21』は新たな世紀にふさわしく、学生と教員、さらには一般市民をも巻き込んで様々な声が響き合う広場を目指します。

## No.25 March 2019 CONTENTS:

- 1 巻頭言／前田高志
- 2 **特集1 AIの導入とこれからの働き方を考える**  
第3次人工知能ブームのすべて／土方 嘉徳  
AIと雇用／岡田 敏裕  
人工知能技術の発達と銀行／秋吉 史夫  
AIがもたらす影響の非AI的考察／國濱 剛
- 14 **特集2 #Me Too運動の現状**  
#Me Too運動に思うこと／田中 きく代  
「#balancetonporc 豚野郎を密告せよ」：  
フランスの「# Me too 運動」／藤田 友尚  
「Me Too」運動一広げられない日本で考える／高島 千代  
韓国における Me Too 運動／巖 廷美
- 20 **特集3 在外研究レポート**  
在外研究レポート／岡田 敏裕  
ウェリントン留学記／松枝 法道
- 24 **エコノフォーラム座談会**  
「海外インターンシップは面白い」
- 32 **20代、あの頃私は・・・研究と青春**  
会社から離脱！リスクを冒して研究者の道へ／新海 哲哉  
勉強を教わった先生／長谷川 哲子  
衝撃的だったおっちゃんの会話／上村 敏之
- 35 **シリーズチャペル<経済と人間>**  
本郷亮・東田啓作・藤原憲二・田中敦・古澄英男・藤井英次・猪野弘明・  
田畑頭・久保真・桑原秀史・國枝卓真・原田哲史
- 47 **シリーズチャペル<人間を考える>**  
利光強・松枝法道・大高博美・田村翔平・舟木讓・山鹿久木・堀敬一・山田仁・  
長谷川哲子
- 56 **退任教授最終チャペル講話**  
河野正道・神崎高明・林宜嗣・藤井和夫
- 64 **基礎演習：論文一覧**
- 76 **研究演習Ⅱ：ゼミの総括と卒業論文一覧**
- 91 **経済学部懸賞論文**
- 92 **編集後記**

# 関西学院で学ぶということ

経済学部長 前田高志

皆さんはそれぞれご自身のアイデンティティを持っておられます。アイデンティティとは、皆さんの皆さんたる所以、皆さんを皆さん足らしめるもので、それはこれまでの約二十年の人生の中で築かれてきた大切なものです。その皆さんのアイデンティティを形づくるものに、関西学院、関西学院大学が含まれていくことを、私は強く願うものであります。

それでは、関西学院そのもののアイデンティティとは何なのでしょう。

関学の関学たる所以は、キリスト教主義の精神に基づく教育にあります。今から130年前、ランバス博士は神戸に「人間形成の根本を宗教におき、宗教によってこそ真の人間形成ができるのだという信念に基づく教育をなす学校」として関西学院を創設されました。そして、第2代院長の吉岡美国先生は関西学院の精神、スピリットとして「敬神愛人」という言葉を遺されています。敬神愛人、神を敬い(畏れ)、人を愛する、という言葉は、聖書のマタイによる福音書第22章37～39節の「イエスは言われた。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な第一の掟である。」から来ています。「主を畏れる」ことは聖書の中できわめて重要な教えで、たとえば、詩編の第111編10節では「主を畏れることは知恵の初め。これを行う人はすぐれた思慮を得る。」とあります。創造主に対する畏敬は信仰者の基本とされますが、キリスト教信者でなくても、この神を敬い畏れる心というのは重要な意味をもっています。皆さんはいま経済学という社会科学の学問を学ばれています。経済学を学ぶことでこの世界の真理の一部にふれることになるでしょう。しかし、そのことで私たちは驕ってはいけない、私たちはそのことに気づく必要があります。人間の驕りを戒め、人との調和と隣人愛を説く、それが、この「敬神愛人」の精神です。その精神が関学の教育の原点、根幹、礎のひとつなのです。

また、関西学院のスクールモットーのMastery for Serviceは、第4代院長のベーツ先生が1912年4月、新設の高等学部長に就任した直後に提唱されたもので、先生は次のように述べておられます。「人には二つの面があります。一つは個人的で私的な面、もう一つは公的で社会的な面です。……校訓『マスタリー・フォア・サービス』という言葉が意味するのも、人にこの二つの面があるということな

のです。私たちは“弱虫”になることを望みません。私たちは強くあること、

“さまざまなことを自由に支配できる人”(マスター)になることを目指します。……私たちがマスターになるうとする目的は、自分個人を

富ますことではなく、社会に奉仕することにあります。私たちは、広い意味で人類に奉仕する人になることを目指しているのです……。通常、Master(主人)とServant(仕える者)は正反対のイメージとして映りますが、それにもかかわらず、サーヴァントこそ実は本当のマスターであるということをベーツ先生は説かれました。大学で学ぶことは個人の栄達のためではなく、社会への貢献、世に尽くすことであるという精神、関西学院はこの精神のもとにつくられ、130年の間、存続してきたのです。

こうした関学を支える精神、それこそが関西学院のアイデンティティです。皆さんは、関西学院大学を選ばれました。なぜ、関西学院を選ばれたのでしょうか。いろいろな理由があると思いますが、関西学院大学が発する雰囲気、空気にひかれて、という方も多いと思います。実はその皆さんが感じておられる関学の雰囲気は、130年の間、こうした関西学院大学の創設、草創期から引き継ぐ精神によって培われてきたものです。

そして、その精神を引き継ぐものとして、皆さんはここにおられる、そのことを覚えて、学問と自己の研鑽に励んで頂きたいと私は願っております。キリスト教主義の関学の精神にふれながら、自分自身をしっかりと見つめて頂きたいと思えます。そして、経済学という学問、ツールによってこの世界の真実にふれるように努めて下さい。

そうすれば、皆さんのアイデンティティに関西学院大学が加わるということが確かな意味をもち、皆さんがこの大学から世に出て行かれるとき、関西学院大学に学んで本当に良かったと思って頂ける、私はそのように確信いたしております。



# A-1の導入と これからの働き方を考える

2018年、多くの日本人がAIに強い関心を寄せるようになった。オックスフォード大学の研究チームが予測した「AI化によって10年から20年後に残る仕事、なくなる仕事」というレポートが日本に紹介されたからだ。メディアは「全雇用者の半数が仕事を失う」という見出でその衝撃を伝えていた。そしてすでに、SoftBankやUnimanagerなどの企業が学生採用にAIを活用している。

他方で、AIの技術的進歩でわれわれが恩恵を得ているのも事実だ。例えば、医療現場。CTなどによる画像診断では、医師は数百枚の画像を「読み」、すばやく診断をくだすことが求められる。人間の目が見落として

しまうような微小な病変をAIは見つけてくれる。

企業活動にせよ日常生活にせよ、AIの技術と共存することはもはや避けられない。それがわれわれの宿命だ。AIを巡る不安と期待、われわれ市民の思いは複雑だ。

しかし、AIのことをもっとよく知れば、いたずらに不安に陥ることは少なくなるだろう。AIの進歩に詳しい専門家たちは、われわれの不安にどう答えしてくれるのだろうか。特集記事の4編は、AIの進歩と社会の関係を冷静に考えるためのヒントを与えてくれる。

# 「第3次人工知能ブームのすべて」

関西学院大学商学部

土方 嘉徳 准教授 (社会情報学)

近年、社会(特に産業界)において人工知能(AI)が注目を集めている。音声認識機能を備えたスマートフォンや自動運転機能の付いた自動車、人間のクイズ王でもかなわない質問応答マシンなど、最近の製品や技術の進歩には目を見張るばかりである。人工知能により夢のような機械が次から次へと生み出される一方、人工知能により人間の仕事が奪われないかという危惧も出てきている。社会はこれまで見たことがないような機会(チャンス)と危機(リスク)に右往左往しているように見えるが、実は社会で人工知能が注目を集めたのは、これが3度目になる。本稿では、過去の人工知能ブームを振り返った後、今回の人工知能ブームがこれまでと何が異なるのか、人の働き方はどのように変わるのかについて考察する。

「Artificial Intelligence (人工知能)」という言葉が生まれたのは、1956年にアメリカのダートマス大学で行われた知能機械(コン

ピュータ上で実現される知性)に関する研究討論会(後に「ダートマス会議」と呼ばれる)である。ジョン・マッカーシー(John McCarthy)、マービン・ミンスキー(Marvin Minsky)、ナサニエル・ロチェスター(Nathaniel Rochester)、クロード・シャノン(Claude E. Shannon)ら、コンピュータ科学者の精鋭が集まって開かれたこの会議は、世界中の研究者に影響を与えた。この会議の直後に訪れたのが、第1次人工知能ブームである。特に推論と探索という技術を用いて、チェスやチェッカーなどのゲームをコンピュータが解くことについて、多くの研究が行われた。

しかし、推論と探索に基づく知能は、ゲームのように適用範囲とその範囲内における規則が厳密に定められている中で初めて実行できるものである。ところが、現実世界の問題は必ずしもゴールが明確でなく様々な例外があり、推論や探索が行えるように定式化することができな

い問題があった(トイ・プロブレムとも呼ばれる)。このため、人工知能の研究は一旦落ち着くものとなった(「冬の時代」と呼ばれる)。次のブームが訪れたのは、現実世界の知識表現に注目が集まり、「エキスパートシステム」と呼ばれる実用的な問題解決のシステムが開発されたことによる。これが1980年ごろに起きた第2次人工知能ブームである。

エキスパートシステムの具体例としては、患者の症状からその原因である病名を推定するシステムが挙げられる。多くの医師が患者の症状とその症状から自分が判定した病名をルールと呼ばれる決まった形式(「機械可読」と呼ばれる)で記述することにより、新しい患者の症状を入力すれば、コンピュータがその病名を推定してくれるものである。

また、第2次人工知能ブームの終盤には、今の人工知能技術につながるニューラルネットワーク(特に誤差逆伝搬法と呼ばれる学習手法)が開発され、文字認識や音声認識などに応用さ

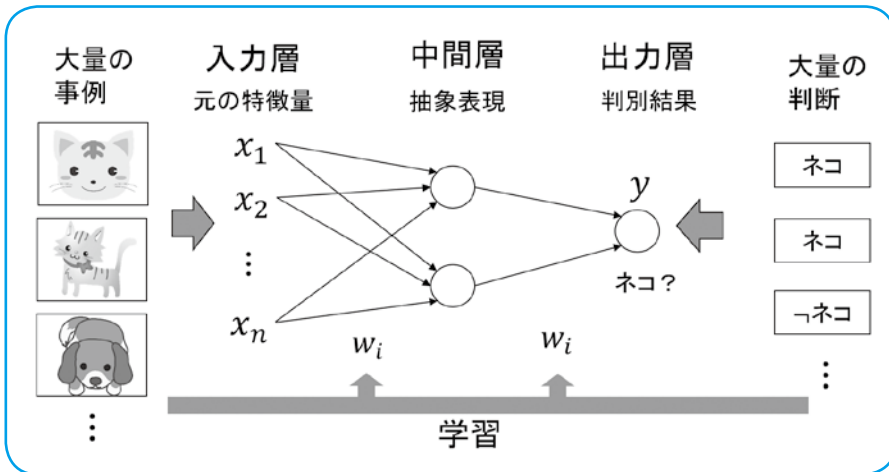


図1 ニューラルネットワークの仕組みと中間層における抽象表現

れた。ニューラルネットワークは、事例とその事例に対する認識の正解ラベルを人手で与えれば、認識モデルを自動で学習することができ、非常に実用的であった。

しかし、人工知能は、また冬の時代を迎えることになる。エキスパートシステムやニューラルネットワークにより実用的な人工知能が開発されたが、一体誰が機械可読な形式で知識をコンピュータに入力するのかや、いったいどうすれば高度な認識を実現するだけの事例を集められるのかについては、未解決だったからである。これは、知識獲得のボトルネックと呼ばれる、高度な人工知能を実現するには、どうしても解決できない問題だったのである。しかし、ここで人工知能、さらにコンピュータ科学全体に及ぶ革命が起きる。それは、World Wide Web（以降、ウェブ）の発明である。

ウェブは、自律分散型のハイパーテキストシステム（文書と文書をリンクでつなぐことができるシステム）であるが、これにより多くのユーザが自由に情報発信を行うようになった。個々のウェブページは人が自然言語で記述したものであったので、直接コンピュータが理解できる形式ではなかったが、人工知能の歴史上初めて、不完全ながらも世の中のとあらゆる知識をコンピュータが持つことができたのである。これ以降、人工知能だけでなくコンピュータ科学の分野全体において、ウェブが研究の中心となった。多数の商用サービスが生まれ、ソーシャルメディアが登場し、一般ユーザの購買履歴や

コミュニケーション履歴までもが、コンピュータに蓄積されるようになった。これがいわゆるビッグデータである。

今我々は、第3次人工知能ブームの中にいる。これはウェブによる革命の興奮の中で生まれてきたものであるが、そのブームの引き金になったものの一つは、まさにビッグデータである。多くの企業においてビッグデータが蓄積されるようになり、高度な意思決定システムや認識システムを実現する下地ができたのである。もう一つの引き金は、ディープラーニング（深層学習）という技術の登場である。ニューラルネットワークのような事例から認識モデルを学習するアルゴリズムは、一般に機械学習と呼ばれる。この機械学習を行うには、認識対象となる物体の特徴をあらかじめ人間が定義して抽出しておく必要があった。

しかし、ニューラルネットワークにおけるニューロンのネットワーク階層においては、その中間層（物体の特徴量が入力層で目的の結果を得るのが出力層に当たり、それらをつなぐのが中間層である）に、より抽象的な特徴が表れることが分かっていた（図1参照）。この中間層を多段にしたもの（深層にしたもの）が、ディープラーニング（深層学習）と呼ばれる技術である。

この技術がもたらした革新は、これまで音声認識や画像認識の研究者やエンジニアが、必死になって考えていた特徴量を、たった一つのアルゴリズムが自動で定義し抽出できるように

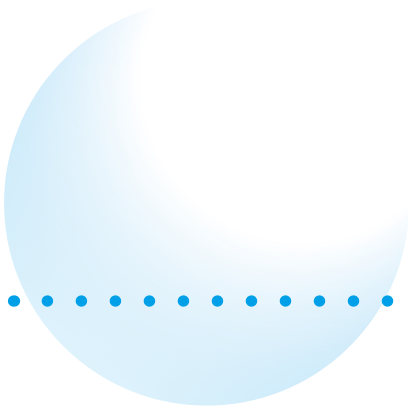
なったことである。これはすなわち、多くの研究者やエンジニアが、一斉に仕事を失ったことを意味する。このことが、人工知能の研究分野だけでなく、社会全体をも震撼させたのである。

現在、新聞や雑誌、その他多くのメディアにおいて、人工知能が人の仕事を奪う恐れがあることを報じ、世間でも話題になっている。その反動から、一部には「今回のブームも一過性であるから心配する必要がない」とする楽観論も聞こえてくる。しかし、筆者は今回の人工知能ブームの可能性を見誤ってはいけないことを警告したい。

第3次人工知能ブーム以前から、ウェブにより多くのビジネスプロセスが自動化されてきた。受発注の自動化であったり、その決済の自動化であったりである。会計や法律など、人が定めた取り決めはコンピュータによる自動化が最も行いやすいところであり、その取り決めに従って行われていた仕事は、確実にコンピュータに置き換わっていった。この流れが逆転することはないとみて良い。しかも、今回のブームは、それまで最先端を走ってきた研究者やエンジニアが一斉に仕事を失ったことに端を発する。

人工知能の応用は、自動運転や音声認識にとどまらず、実世界における広告効果や購買行動の計測、楽曲や小説などの芸術作品の創作、人の性格や心理状態の推定など、これまでコンピュータが苦手であり込めなかった分野にまで及びつつある。ビッグデータとそれを扱うデータブライニングという技術は、産業革命に

匹敵する革新であると考えた方が良い。今後、人がなすべき仕事は、人工知能が苦手とするフレームワーク作りやサービス全体の設計である。自らデータを集め、人工知能を使いこなし、無から有を作り出すような、よりクリエイティブな仕事を行う者のみが、生き残れる社会が来るであろう。



# 「AIと雇用」

関西学院大学経済学部

岡田 敏裕 教授（マクロ経済学）

AI (artificial intelligence:人工知能) の発展は近い将来私たちの生活を大きく変えることになるだろうと近年盛んに議論されている。18世紀に産業革命が生じて以降、様々な形で技術革新は進んできたが、それ以前の技術革新とAIが大きく異なるのは、AIは非常に広範囲な分野で人間にとって代わって生産活動を行うことが可能である点である。言い換えると、生産活動においてAIは人間と完全に代替的(あるいは非常に代替性が高い)ということだ。本稿では限られた観点からではあるが、このAIの代替性が及ぼす影響について、特に雇用に関してマクロ経済学の研究を参照しながら述べていく。

まずAIとは何を指すのかということだが、AIとは広く捉えらると、これまで人間によって行われてきた活動を人間の代わりに行えるようにするコンピュータシステムである。もう少し具体的に言うと、AIは機械学習 (machine learning)、汎用人工知能 (AGI: artificial general intelligence)、自動操作 (automation) に大別できると考えられている (Agrawal, Gans and Goldfarb 2019を参照)。機会学習とは「データから学習し(データを基礎に統計的解析を行

い) パターン予測を行うコンピュータの計算方法のことで、データの種類や量などが増えれば予測精度は少なくともある水準までは改善されていくことになる。汎用人工知能とは、機械学習より大きく進んだ形態のコンピュータシステムで、人間と同等あるいはそれ以上の知能を持つことで特定の分野だけでなく、広範囲な分野で推論や意思決定を行うことができるものである。このレベルの人工知能の実用化にはまだかなり時間がかかると考えられるが、将来的には可能であろうと多くのコンピュータ科学者は考えており、開発されれば現在人間が行っているほとんどのタスクはコンピュータによって代替可能となるだろう。自動操作は、機械学習や汎用人工知能のような高度なシステムではないが、人間の活動を代替できるようなコンピュータシステムで、工業ロボットを使用したオートメーションなどのようなシステムもある意味含まれるといえるかもしれない。本稿では、汎用人工知能よりむしろ、機械学習や自動操作といった形のAI化による経済への影響ということを主に考える。(注1)

AIの進歩による(人間)労働の代替は本格

的に始まりつつある。米国35州に2800店舗を持つスーパーマーケット会社クローガーは商品の無人配達システムをハイテク会社と共同で開発し、既にアリゾナ州で試験的に実施(まだ人間の監視付きだが)している(配達マシン1台につき、一般的な大ききの袋20個分を運べる)。Uberは2030年までにサービスを運転手なしにすることを目指している。マクドナルドは米国においてデジタルデバイスによるセルフオーダーシステムを約14000の店舗で導入することを発表した(すでに米国では採用している店舗がかなり存在し、日本にもいくつかある)。変動価格制を導入したユニバーサル・スタジオ・ジャパン(U・S・J)は、価格設定タスクにAIを使用している。米国のある大手法律事務所は既にAIを利用し、パラリーガル(弁護士の補助的仕事をする者)のタスクの一部を代替している(そこで使用されているAIは、弁護士が言葉で伝えた調査依頼に対して、膨大な法律文書を調べ、推論し、答えを返すのだという)。世界銀行の推計によると米国の現在の仕事の約50%程度はAIにより代替される可能性がある」と報告している。



AIの普及は広くとらえると技術進歩の一種である。通常の経済学の分析では、技術進歩は労働需要の上昇につながるが、AIという技術進歩はその費用対効果から人間にとって代わって経済活動を行うことになり、労働需要を下げることになる。これはマスクミ等でよく見聞きされることである。しかしながら、AIが浸透しても一般的に言われるように、労働需要がかなりの規模で減少し、多くの人が職を見つけれなくなる(持たなくなる)という事態は、過去の米国農業セクターにおける大規模な機械化のケースなどを考えても、少なくとも長期的には起きないだろうと多くの経済学者が考えている。例えばAcemoglu and Restrepo (2018)によると、AIの普及には、一般的に言われているものとは逆の効果を間接的に生み出す、以下に挙げる3つの側面が存在すると議論している。

(1) AIによる労働者の置き換えにより経済全体として生産の効率が高まれば、AIと代替性がない(あるいは非常に低い)仕事における労働需要が高まる。(2) AIの進歩により資本(製品を生産するために必要な機械や工場などの投入物)に対する需要が高まり、通常、労働者は資本を使用して生産活動を行うので、AI代替的でない仕事を行う労働者の生産性が高まり、その結果、労働需要が高まる。(3) AIは既に存在する機械(資本)の生産性を高めることでAI代替的でない労働者の生産性を高め、労働需要を高める。ここで疑問になるのは、人間に優位性がありAIと代替性が低い労働集約的な仕事とは何かということだが、どのようなものがあるだろうか。人対人の個人的な結びつきが非常に重要な仕事、例えば、介護などの医療関連職、幼児教育などの初等教育関連職、ある種の営業職などだろうか。また、パターン化・予測化することが艱難、あるいはそれが

不適切な仕事、例えば、ホテルの部屋の清掃業務や様々な製品の修理業、娯楽・芸術関連の創造的な仕事などだろうか。これらの仕事は当面の間はAIで代替することは難しいと考えられる。

以上のようなAI普及による既存の労働に対する労働需要の間接的な押し上げ効果のほか、Acemoglu and Restrepo (2018)が潜在的に更に重要であると議論しているのは、AIと代替的でない新たなタスク(仕事)のAI普及による創出である。その議論は以下のようなものである。AIによる労働代替により労働分配率(国民所得に占める労働所得の割合)が下がり、更なるAI化による労働代替は利益を生み難くなる。このような状況では、AIと比較して人間に優位性のある生産タスク(有益なタスク)を新たに生み出すことが企業にとって非常に利益となる。これにより、新たなタイプの労働タスクが企業の取り組みによって内生的に創出されることになる。具体的にはどのような仕事が生み出されるのかというのは、AIがまだそれほど普及していない現段階でイメージするのは非常に難しいが、十分に起こり得る話である。また、別の可能性として、AI化の進展はAIを使いこなすタスクの必要性を増加させ、新たな雇用が創出されるという点も指摘されている。そのような新たなタスクとしては、例えば、AIを効率的に管理するタスクや、AIが作り出した結果を基に様々な状況を包括的に考慮し、プロジェクトあるいは企業自体の将来の方向性を決定するタスクなどが考えられる。このようにAIの普及は新たな労働タスクの創出により労働需要を高めることになる可能性が高い。

以上のような労働市場に対する変化は、大きな変革を社会にもたらすだろう。例えば、AI

化によりこれまでのように正確性のみを多く求めるマニュアル的な仕事や知識偏重型の仕事は激減することは避けられない。これは既存の教育システムに大きな変換を促す要因となり、知識以外の能力(例えば、感性や創造的破壊性などか?)を伸ばすような教育が教育機関や企業内で求められていくだろう。また、多くの経済学者が考えるように、AIは生産性を高めるため経済成長を促進するが、AIの労働代替性と労働者間の質の違いなどにより、少なくとも短期的には所得格差を大幅に悪化させる可能性が高い。ここでは、より適切な税制への移行も必要となるだろう(ここでは詳しく考察しないが、ユニバーサル・ベーシックインカムについての議論がAIとの関連で近年盛んに行われている)。(注2)

(注1) 汎用の人工知能の開発により、技術的特異点(Singularity)という興味深い可能性が生まれ、AIはマクロ経済学で言うところの技術水準の一部であるので、そこでは有限期における無限大の総所得となる可能性につながる。Aghion, Jones and Jones (2018)参照。  
(注2) ユニバーサル・ベーシックインカムとは、雇用状態にかかわらず国民に最低限の所得を給付するシステムで、ミルトン・フリードマンが唱えた「負の所得税」システムと基本的には多くの点で共通する特徴を持つ。

#### 参考文献

- Acemoglu, Daron and Pascual Restrepo (2018), "Artificial Intelligence, Automation and Work", NBER Working Paper No.24196.  
Aghion, Philippe, Benjamin F. Jones, and Charles I. Jones (2017), "Artificial Intelligence and Economic Growth", NBER Working Paper No.23923.  
Agrawal, Ajay, Joshua Gans, and Avi Goldfarb (2019), "Introduction," in A. Agrawal, J. Gans, and A. Goldfarb, ed., *The Economics of Artificial Intelligence*, University of Chicago Press, Chicago.

# 「人工知能技術の発達と銀行」

関西学院大学経済学部

秋吉 史夫 准教授（金融論）

近年、人工知能に関連する技術が急速に進歩し、本来人間のみが可能とされてきた認知や分析といった分野についても、機械が担うようになる可能性が出てきました。このため、現在人々が従事している仕事の多くが人工知能を搭載した機械によって代替されるのではないかと議論が広まっています。オックスフォード大学の研究者であるフレイとオズボーンが2013年に発表した論文では、「米国の労働者の47%が従事している仕事は将来的には機械によって代替される可能性が高い」という分析結果が報告され、話題となりました（Frey and Osborne, 2013）。

人工知能は、手順がマニュアル化されたルーティンの仕事に強みを発揮すると言われていきます。また取り扱うデータが数値である、人工知能の技術が導入しやすいとも言われています。金融分野、特に銀行には、そのような仕事が多くあります。例えば、銀行の住宅ローンの審査では、ローン申込者の年収データなどに基

づいて貸出の可否が判断され、その手順はマニュアル化されています。このような仕事は、将来的に人工知能が担当する可能性が高いといえるでしょう。前述したフレイとオズボーンの論文では、機械に代替される可能性の高さによって702の仕事が順位付けされていますが、新規口座担当者（New Accounts Clerks）や貸出担当者（Loan Officers）など銀行関連の仕事のいくつかが上位にランキングされています（表1）。

このように人工知能技術の発達は、銀行の在り方を大きく変える可能性があります。ここでは、人工知能技術の発達が、銀行経営、銀行サービスを利用する人々、銀行で働く人々にどのような影響を与えるかを考えてみたいと思います。まず、銀行経営に与える影響を考えてみましょう。現在、日本の銀行、特に地域銀行は、業績の低迷に苦しんでいます。銀行の重要な収益源である預貸金利息や（貸出金利息と預金金利の差）の低下が、銀行の業績悪化につながっ

ているのです。図1は、全国銀行の預貸金利息やの動きを示したものです。2007年度には0・6%程度あった利ざやが2017年度には0・2%程度にまで落ち込んでいます。このような利ざやの低迷は、少子高齢化などの影響で地域経済が低迷していることが大きな要因です。このまま業績悪化に歯止めをかけることができないければ、破綻する銀行も多く出てくるのではないかとされています。

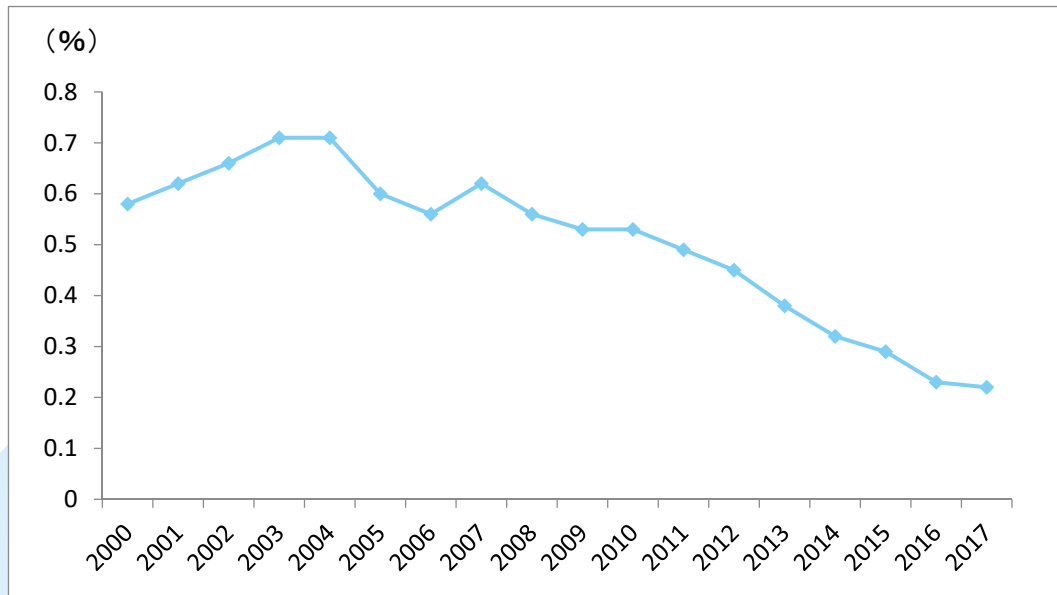
人工知能の活用は、二つの面で低迷する銀行の業績を改善する可能性をもっています。一つは、人工知能の利用によって銀行の店舗運営を効率化し、店舗を維持するコストを削減できる可能性です。かつて地域経済が拡大していた時代には、銀行が地域に張り巡らした店舗ネットワークは、銀行と地域の顧客を結びつける拠点として銀行の強みとなっていました。しかし地域経済が縮小しつつある現在では、過大となった店舗ネットワークを維持するためのコストが銀行にとって重荷になってきています。銀行と

表 1 機械に代替される可能性が高い銀行の仕事

仕事	代替されやすさの順位 (全 702 仕事)	代替される確率
新規口座担当者 (New Accounts Clerks)	10 位	99%
貸出担当者 (Loan Officers)	18 位	98%
銀行窓口担当者 (Tellers)	20 位	98%

(出所) Frey and Osborne (2013) Appendix より作成。

図 1 全国銀行の預貸金利ざやの推移



(出所) 全国銀行協会「全国銀行決算発表」より作成。

.....

としては顧客が少なく収益が低迷している店舗を廃止したいのが本音ですが、銀行サービスを受けられなくなることを危惧する地域住民や自治体の反発を考えると、思い切った店舗廃止ができないのが現状です。しかし、人口知能を銀行店舗の業務にうまく活用することができれば、店舗には必要最小限の人員だけを配置すればよくなり、店舗の維持コストを大きく節約することができそうです。その結果、地域の店舗ネットワークの維持とコスト削減の両立が可能になるかもしれません。地域銀行の経営に詳しい大庫直樹氏は、「フィンテックや人口知能の活用によって銀行業務の合理化を進めれば、究極的には2名体制での支店運営が可能になる」と論じています(大庫、2017)。

銀行の収益を改善するもう一つの方法は貸出量を増やすことです。地域経済が低迷している現状では、企業の借入需要も盛り上がりず、銀行が貸出を増やすことは困難となっています。しかし人工知能の活用によって、借入需要の掘り起こしが可能になるかもしれません。業績が低迷している企業の中には、優れた商品やサービスを持っているが、情報やノウハウがないために自社の強みを活かしていきにくいところが多くあります。こうした企業に銀行が持つ情報やノウハウを提供すれば、業績が改善して銀行借入も増えるかもしれません。銀行もこのようなコンサルティング業務の重要性は認識しているのですが、人材不足からなかなか実現できていないのが実情です(家森、2018)。しかし人工知能の導入によって銀行店舗の運営を

効率化することで、店舗に配置する人員を少なくすることが出来ます。こうして余裕が生じるマンパワーを活用してコンサルタント業務を強化すれば、企業の業績が改善し、銀行の貸出も増えるかもしれません。このように人工知能の導入は、銀行の収益改善の大きな助けになる可能性を持っているといえるでしょう。

銀行が人工知能技術の活用によって店舗ネットワークを維持することが可能になれば、地域の人々は銀行サービスを引き続き利用することが出来ます。また銀行のコンサルティング能力の向上は、取引先企業の業績を改善し地域経済の活性化につながるかもしれません。したがって、銀行業務に人工知能が導入されれば、銀行サービスを利用する人々にも利益をもたらすと考えられます。

最後に、人工知能技術の活用が銀行で働く人々に与える影響を考えてみたいと思います。前述したように、住宅ローン業務など銀行の一部の仕事は機械に代替されるかもしれませんが。しかし、銀行には企業へのコンサルタント業務のように人間の能力を必要とする仕事もあり、このような仕事は人材不足となっています。このため銀行での人工知能技術の活用が進めば、機械で代替できる業務から代替できない業務への人材の配置転換が行われていくと考えられます。銀行で働く人々にとって、取引先の抱える問題を共に考え解決していく能力・スキルが今後ますます重要になってくるのではないのでしょうか。

〈参考文献〉

Frey, C.B. and Osborne, M.A. (2013) "The future of employment: How susceptible are jobs to computerisation?"

大庫直樹 (2017) 「新しい時代に求められるチャネルと融資のあり方…フィンテックやAIを活用した抜本的な構造改革に向けて」『週刊金融財政事情』2017年12月4日号, p.20-24.

家森信善編 (2018) 『地方創生のための地域金融機関の役割—金融仲介機能の質向上を目指して—』中央経済社。

# 「AIがもたらす影響の非AI的考察」

関西学院大学経済学部

國濱 剛 専任講師 (ベイズ統計学、計量経済学)

近年続くAIブームは衰えを知らず、新聞を開いても書店に並ぶ本を眺めてもAI関連のものがないことの方が珍しい気がする。辞書によると人工知能とは「推論・判断などの知的な機能を人工的に実現するための研究。また、これらの機能を備えたコンピュータ」とあるが、人間の知的機能自体が高度に複雑多機能なため、ひと口にAIと言っても関連のある分野はかなり広い。一昔前は鉄腕アトムのような人間の知的機能を総合的に網羅する人間型ロボットをイメージすることが多かったが、その技術開発は

予想以上に困難であり(作中では2003年すでにアトム誕生)近年では知的機能の一部に特化した研究開発が中心となっている。特に最近ではコンピュータの高性能化とインターネットの普及に伴い登場したビッグデータの分析に注目が集まっている。新しい分析技術は様々な分野における業務の自動化や効率化に応用され、複雑な画像認識により状況把握を行う自動車の自動運転や、キーワードやウェブサイ

ト滞在時間を分析しながら関連性の高いコンテンツを表示するGoogleなどの検索エンジンが例として挙げられる。さらに将棋やチェスなどのボードゲームでもAIがトップクラスのプレイヤーを破るまでに進歩している。大学教育においてもその影響は大きく、滋賀大学や横浜国立大学にデータサイエンス学部が新設され、本校でも日本IBMとの共同プロジェクト「AI活用人材育成プログラム」が2019年4月より開講される。

私の専門分野のベイズ統計学は、コンピュータの高性能化に伴い急速に発展し、近年のビッグデータ分析への応用で注目を集めている。ここで少し話が逸れるが、AI関連の研究が実際の社会問題に活用される例として私の取り組む研究課題の一つを紹介したい。死因や出生率などの人口学的情報は、各国の公衆衛生政策の根幹を成すものであるが、多くの発展途上国では戸籍制度や人口動態統計が完備されておら

ず、国民の健康状態を把握した上で適切な保健戦略や支援策を適用することが極めて困難な状況にある。死因に関しては世界全体で3分の2以上の死はその原因が特定されていないと言われ、特に貧困に苦しむ発展途上国では保健システムが不完全であるため死因情報が乏しい。そこで大規模調査を行うことで各地域における死因情報を集める必要があるが、死因を特定するために医学知識が求められるため遺族に死因を直接尋ねることはできない。また、医師を調査員として多数雇うのは費用面から非常に厳しい。そこで現実的手法として、家族やコミュニティ構成員に死者の死亡状況、症状、病歴などの聞き取り調査を行い、その情報から死因を予測する口頭剖検が広く用いられている。ここで重要となるのは、聞き取り調査データの情報を踏まえて、各人の死因をどのように特定するかである。一つのアプローチは医師が調査データを精査し、彼らの経験と照らし合わせることで死因を決定する方法だが、標本数が数千、質問

項目が百以上から成る調査データもあることから時間的な負担が非常に大きくなる。また、本来ならば患者の診察に使えた医師の時間を奪うことにもなる。解決策として、統計手法を用いて聞き取り調査データから死因を予測する方法が近年急速に広がっており、様々な研究グループが死因特定のための統計アルゴリズムの開発に取り組んでいる。このように、高い専門性を持つ人的資本の不足を補う道具としてAI技術を活用することで、現状の課題解決につながる可能性がある。

現在進行形で社会に大きな影響を与えているAIだが、今後のさらなる技術進歩が引き起こす社会変化に関する議論は活発で、多くの識者が様々な予測を行っている。この流れに乗り遅れまいと特定のストーリーに飛びつく前に注意すべき点は、AIがもたらす変化の予想にAI手法はあまり役立たないことである。AIによるデータ分析では、分析者が選んだアルゴリズムを用いて過去・現在のデータから重要な情報を取り出し予測を行うが、基本的にデータが発生した構造と同じ状況が今後も続くことを想定している。つまり、現状で把握できないような構造変化が起こりうる場合にはうまく予測分析ができない。よって、巷に溢れるAIがもたらす将来の予想は非AI的、つまり各々の分析者の主観に大きく基づくものであり（この文章も含む）尤もらしいストーリーでも不確実性は非常に高いと言える。AIの予測として有名なものに映画「2001年宇宙の旅」のHAL9000

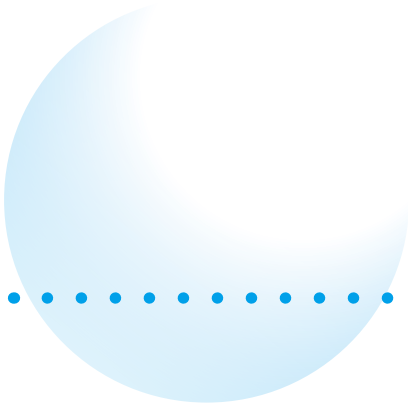
（木星探査の宇宙船に搭載されたコンピュータで異常をきたして人間の乗組員を殺害する）や「ターミネーター」のスカイネット（自我に目覚めたコンピュータで人類の殲滅を目的に核戦争を引き起こす）があるが、さすがにこれらは古いSFの話であり、最近のものだと現在の職業の約半数がAIに取って代わられるという報告もある。一方でポジティブな考えでは、技術進歩により現存しない職業が新たに生まれ、全体として職業の種類・数はむしろ増えるという予想される。加えて、AIは局所的には人間の機能を凌駕するものの、主体性を持たない道具であることには変わりはないため、上手く活用することで労働の効率性を高めることができ、その結果として、フリーランスの個人でも規模の大きな仕事に取り組みたり、労働時間が短縮されて創造的な活動により多くの時間を使うことができるようになるという意見もある。

AIと労働に関してはさらに、AIが人間の仕事を奪うので失業率が高くなるのか、逆にAIが代わりに働いてくれるため自由時間が増えて各々の余暇が充実するとか、AIが新たにもたらす富によりベーシックインカム（すべての個人に対して生活に最低限必要な所得を政府が無条件に給付するという社会政策）の導入が実現可能となり労働行為自体が選択可能になるなど多岐にわたる意見が存在する。ここではどの説が正しいかということ議論しないが、個人的にはAIの進歩に伴い社会全体として効率化が進み、各々がより便利な生活を送ることがで

きると楽天的に考えている。しかし、全く問題がないわけではなく、特に新たに生まれる富の再分配を十分に行えるかが今後の安定的な社会発展における重要な鍵となるであろう。AI技術を持つ者やAIでの代替困難な専門性を持つ特定の職種に就く者にはこれまで以上に富が集まる一方で、専門性が低い労働集約型産業の労働者には恩恵が少なく、現在の厚い中間層もいずれかに引つ張られると予想される。大きく歪んだ分布を修正するためには政治を通じた富の再分配が必要不可欠であるが、富を持つ層は少数派であってもその豊富な資金力に基づく強力なロビー活動を行うことが可能であろうし、希少価値の高い人材は国際的に奪い合いとなるため、引き留めるためには彼らを多少なりとも優遇するような政策を取らざるを得ないと考えられる。簡単な解決法はないが、昨今の国際情勢における社会階層の分断がその社会の安定性に与えるインパクトの大きさを鑑みると、各々が積極的に社会全体及びその変化に注意を向け、多種多様な考えを政治に反映させることが必要でないかと思う。無機質なAIの進歩について考えていて、最終的に権力、お金、義理といった人間臭いイメージの強い政治の重要性に行き着いたことは興味深い結果であった。

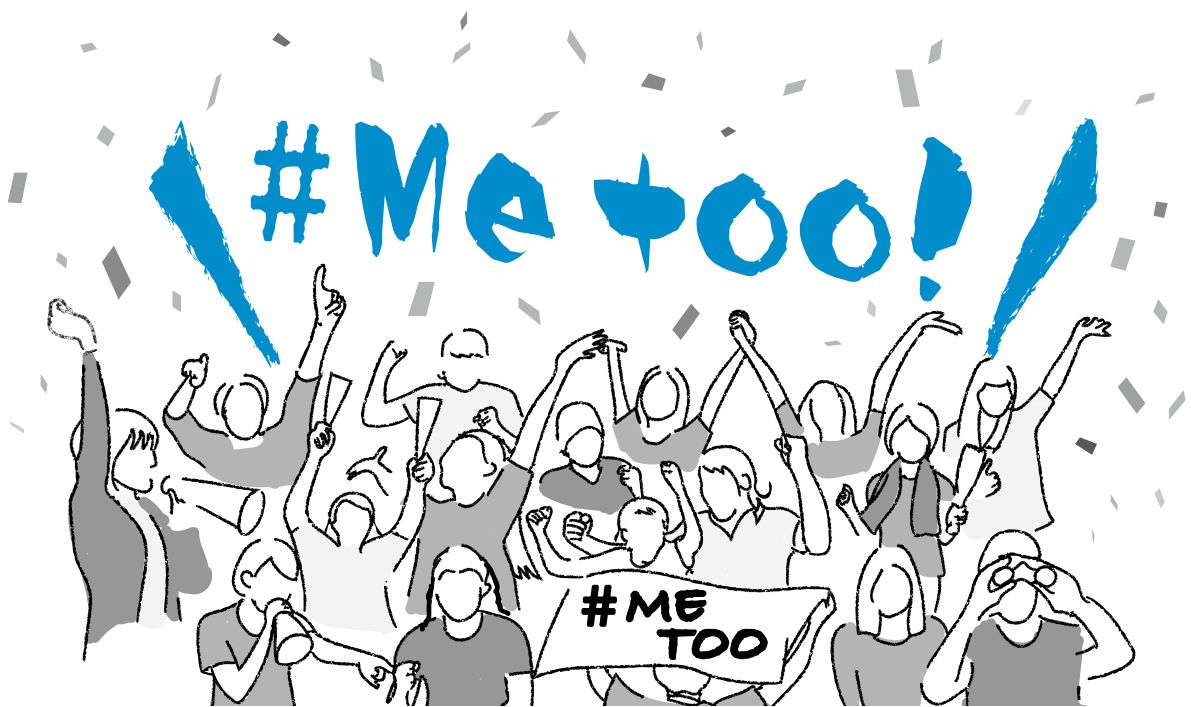
これからは専門知識を身につける場としてはもちろん、AIの発展に伴う急激な社会変化に柔軟に対応するための知性を鍛える場としても大学の重要度は増していくと考えられる。最後に学生の読者に対して、どの職種が将来生き残

るまたは消え去るなど現時点で不確実性が高い  
ことであれこれ悩まず（そもそもAIブームも  
いつまで続くかわからない）どのような変化が  
起ころうとも自分の頭脳で乗り切れると自信が  
持てるように大学での学びの時間を大切に過ご  
してほしい。



## 特集2

# Me too 運動の現状



アメリカの大物プロデューサーのセクハラ事件がきっかけとなり、アリッサ・ミラノが呼びかけた「#Me too 運動」は、当初、ショービジネスの世界だけに留まっているかに見えた。しかし、SNS という手段によって運動はまたたくまに世界中に拡散した。

性的嫌がらせを被っている女性たちが、世界のあちこちから自分たちの受けた被害を告発するようになり、メディアがセンセーショナルに採り上げた。それが一段落した今、「#Me too 運動」が女性や男性の意識変革や政治を突き動かす力となるか、考えてみる機会があってもいい。

第2特集では、アメリカ、フランス、日本、韓国から「#Me too 運動」の各国での反応を専門家が紹介する。そこからは各国の歴史文化的背景や国民性などが見えてくる。



## #Me Too運動に思うこと

田中 きく代 名誉教授 (文学部)

「Me Too (私も)」は、二〇〇七年に市民運動家タラナ・バークが黒人少女を性虐待から救うために提唱したもので、この運動がアメリカ合衆国で#Me Too運動として全国的なものになり世界に及ぶようになったのは、映画プロデューサーのH・ワインスタインの長年の性的虐待を、二〇一七年一〇月に「ニューヨーク・タイムズ」が糾弾したことに始まる。被害者の女優アシュレイ・ジャックらの実名告発も大きかったが、ワインスタイン効果と称されるように、映画・テレビ界のみならず、政治、教育、宗教など様々な分野に波及した。夥しい数の女性たちがあらゆる分野で、次々に「私も」と自らの被害を公表したのである。

アメリカのフェミニズムには、一八四八年のセネカ・フォールズに集約される第一波、B・フリーダンの『新しい女の創造』などに牽引された第二派、ERAの憲法修正否決以降の第三波、そして現在の第四波がある。第一波では女性参政権、第二派では機会の均等・賃金の均等、第三派ではセクシャリティにおける個人の自由や、ジェンダー、人種・エスニシティの多様性に関心が向けられた。第四波ではさらに個人的な問題に関心が及び、それを他の人々がフォローし社会問題化する傾向にある。

#Me Too運動は、まさにこの第四波に属するもので、その急進展には二〇一〇年代のSNSなどのソーシャルメディアの影響が大きい。女優アリッサ・ミラノが「#Me Tooと声を上げるよう」被害者たちにツイートすると、著名人のみならず一般人びとが呼応し、世界的なセクハラ告発運動が展開されることになった。最初の二四時間で二〇万以上の反応があったとされるが、報復を恐れ告発できず

にいた女性たちが仲間を得て声を上げたのである。

国際的な影響力については、ヨーロッパのみならずアジアにも及び、日本でもフリージャーナリストの伊藤詩織ら多くの女性がセクハラを告発している。セクハラが表に出にくい日本の現状が考慮され、より多くの女性が参加しやすさ、「We Too (私たちも)」運動も提唱されている。国政レベルでは、二〇一八年四月、財務事務次官のセクハラ疑惑に抗議するため、野党の女性議員が黒服で、#Me Tooのプラカードを掲げたのも記憶に新しい。#Me Too運動には批判もある。一部の女性運動家の性的暴行、女優たちの売名行為といった批判は除いても、依然として男性社会の固定観念に基づくものも多い。だが、様々な批判はこの運動の弱点をついてもいる。①白人の女性の運動になっている、②弁明すらさせない断罪が多い、③自警団的でリンチに繋がりがかねないなどである。

女性性は移民集団などとは違って集団として名目的である。属性によって価値観も異なるので女性からの批判も多い。「男も女もいる社会」が実現するには弱点は克服されなければならないが、まずは多くの女性たちが声を上げる時代の到来を率直に評価すべきである。セクハラを中心としながらも、「隠されていた」声が出し始めたことを重視し、#Me Tooと男も女も声を上げることで、人種・エスニシティのみならず、ジェンダーバランスのある社会への起爆剤になることが期待される。

参考

[https://www.ted.com/talks/tarana\\_burke\\_me-too\\_is\\_a\\_movement\\_not\\_a\\_moment](https://www.ted.com/talks/tarana_burke_me-too_is_a_movement_not_a_moment)

# 「#balancetonporc 豚野郎を密告せよ」： フランスの「#Me too運動」

藤田 友尚 教授 (経済学部)

フランスでは、アリッサ・ミラノから2日遅れてジャーナリストのサンドラ・ミュレルが、「#Me too」のフランス語版ともいべきアカウント「#balancetonporc (豚野郎を密告せよ)」を立ち上げた。過激なハッシュタグが話題となり、反響は大きく、立ち上げ早々に33万件以上のメッセージが飛び交ったという。

しかし、SNSによるこのようなセクハラ被害者の告発は、フランスではいささか他国とは異なる反応を引き起こした。2018年1月9日の「ル・モンド*Le Monde*」紙に、様々な分野の100名の共同署名とこう形式で、「#Me too運動」への行き過ぎを疑問視する文が掲載されたのだ。書き出しから、「レイプは罪である。しかし、ギャラントリー<sup>1)</sup>は男尊女卑による攻撃ではないし、執拗だったり、不器用だったりする口説きは犯罪ではない」と言い放つ。「豚野郎(セクハラ加害者)」を刑務所に送りこむことに熱をあげたところで女性の解放には至らない、この運動の「厳格主義」一辺倒には賛成できない、それが共同署名した人たちの主張だった。

私はこの共同署名の文に、まずフランスの伝統的な恋愛観に基づく男女関係を見る。事実、この共同署名の起草者は芸術的創造に自由が必要であるのと同様に、性的解放にも「言い寄る自由」が不可欠であると言う。セクハラ問題が文化創造とアナロジックな関係で捉えられている。そのためにバルテュスやシーレ、ポランスキーなどの文化人を引き合いに出しながら論陣を張る。

さらに、SNSという手段の危うさも問題視する。真偽の疑わしい情報がSNSによって拡散し、それによって誘導される大衆運動は本物の社会改革につながるのか、という懸念である。起草者の一人カトリーヌ・ミレは、「ロプス*L'Obs*」誌の対談の中で、フランス革命期の1789年と1793年という象徴的な年を持ち出しながら、革命の当初の理想は、大衆が過激になることで本来の意味が見失われ取捨がつかなくなっていた<sup>2)</sup>、と歴史的経験に基づいて注意をよびかける<sup>3)</sup>。SNSで加害者を名指しにし、反論の余地も与えず情報のみが拡散していく<sup>4)</sup>、そのようなコントロール不能な大衆の暴走が今後起きないとも限らないからだ。

確かに、共同署名文の起草者たちが言うように「#Me too運動」には意見の多様性が大切であろう。しかし、歴史的経験からの反省や文化的背景の根深さへの言及は、フランス社会におけるセクハラ問題の現状からすると的外れな議論だ。

2018年2月、Ipsosが職場におけるセクハラの実態調査の結果を公表した。それによると、18歳から64歳までの女性就労者の3人に1人(32%)が、法的に定義された意味でセクハラ行為の被害を被ったことがあると答えている。しかしこの同じ調査で、セクハラ状況に直面したと「感じたこと」があるかどうかという間に對しては、そういう状況を「感じたこと」があると答えた女性は22%にすぎない。つまり、主観的な印象という点では、かなり多くの女性がセクハラを意識していない現状が浮き彫りにさ

れている。Hopの主任分析官が指摘するように、フランス人女性のセクハラへの認識は低い。フランス語版「#Me too運動」の背景には、こうしたセクハラ問題への関心の低さに苛立ちを感じている人が多くいることを物語っている。

フランスは世界に先駆けて「人権宣言」を採択し、それを近代国家樹立のための基本精神に据えた。また、オランブ・ド・グージュ<sup>6</sup>を生んだ国でもある。グージュは、女性も男性も政治・社会参加への覚悟がなければ変革は難しいと考えていた。フランスの「#Me too運動」が個人の密告というレベルを超え、社会変革にまで及ぶ成熟した国民的運動となるか、今後の展開が注目される。

[1] キャラントリイ (galanterie: 女性名詞) : 歴史的・文化的な含みをもった語で、女性に不快な思いをさせることなく男性が言い寄る態度を言う。宮廷の伝統的作法が背景にあり、女と男の恋愛ゲーム的な側面がある。単に女性を口説くという意味とは違う。

[2] バルテュス (Balthus, 本名Balthasar Michel Klossowski de Rola, 1908-2001) : フランスの画家。シーレ (Egon Schiele, 1890-1918) : オーストリアの画家。ポランスキー (Roman Polanski, 1933-) : ポーランド出身の映画監督。  
[3] カトリーヌ・ミレ (Catherine Millet) : 作家で美術評論家。

[4] *L'Obs*, « Débats: Catherine Millet face à Ovide », No.2777, 2018年1月25日 ~ 31日。

[5] <https://www.ifop.com/publication/les-francaises-face-au-harcèlement-sexuel-au-travail-entre-meconnaissance-et-resignation>。今回のHopの調査では、法的な指標に照らし合わせてセクハラと認定できるケースを調査している。これまでの調査では主観的なセクハラとの区別が明確ではなかったが、今回、それが是正されている。

[6] オランブ・ド・グージュ (Olympe de Gouges, 1748-1793) : フランス革命期、女性の権利が男性と同等でないことを糾弾し、「女性および女性市民の権利宣言」を発表。第10条にある「女性は処刑台に上る権利を有している。それゆえに、女性は同様に演壇に登る権利も有しているはずである」という文言は有名。1793年にギロチンで処刑。

# 「Me Too」運動 — 広がらない日本で考える

高島 千代 教授 (法学部)

セクシユアル・ハラスメント(以下、セクハラ)や性暴力の被害者が、職場・学校など身近な人間関係への影響を恐れて、また体験のつらさ、自己帰責の気持ちなどから、なかなか被害を申し立てることができないことは、いまや常識中の常識だ。昨年四月、福田事務次官のセクハラ疑惑に際し、財務省が被害に遭った女性記者に名乗り出るよう求めたと聞いて、思わず「アホか」と叫んでしまったのは私だけだろうか。

二〇一七年、アメリカを震源地として広がった「Me Too」運動は、こうした被害者同士が、「私も」セクハラ・性暴力の被害者であること、これは被害者が責められる問題ではなく、むしろ社会的な問題なのだと確認しあうことにはじまり、これを通じて被害の現状を発信し、解決へと結びつける力をお互いにつけていく、エンパワメントの運動である。「Me Too」のハッシュタグをつけてSNSで拡散する手軽さもこの運動の特徴であり、日本でも二〇一七年、フリージャーナリスト・伊藤詩織さんによる被害告発を一契機として投稿が広がった。先の財務次官セクハラ疑惑に対しては、記者・新聞・放送関係者が抗議声明を出しただけでなく、女性の議員・ジャーナリストなどによる抗議集会が国会内で開かれ、それは「メディアで働く女性ネットワーク」の設立(二〇一八年五月一日)へもつながった。

ただし、アメリカやフランスの「Me Too」が、一〇〇万人規模のデモや、告発のための訴訟費用の支援、被害を容認した企業を罰する法律の制定へと動き、政府による意識改革政策をも引き出しているのに対して、日本の運動は、いまだ具体的な政策形成や立法を目指すものとはなっていない。政治を巻き込んだ運動は、お隣の韓国でもみられるが、日本では、なぜ、こう

した動きが広がらないのだろうか。

そもそも「Me Too」に類する主張は、今に始まったものではない。明治期の男女同権論、岸田俊子の「同胞姉妹に告ぐ」は、「私も」「同胞姉妹」も、男尊女卑に直面している点では同じという点に立っており、一九七〇年代ウーマン・リブのバイオニア・田中美津の「生き難い女、この指とまれ」もまた、「私も」「生き難い」一人だと主張していたのだ。「私も」「あなたも」差別に直面していると確認しあうことは、マイノリティの運動の出発点だろう。しかし、日本ではそれが政策形成へと結びつかないのである。

二〇一八年五月には、「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」が施行され、国会・地方議会選挙候補の男女比率を「均等」(同数)にすることが目標として設定された(ただし努力義務)、セクハラ禁止規定はいまだに法律化していない(事業主の防止義務のみ)。世界経済フォーラムの調査によれば、日本のジェンダー・ギャップ指数は、二〇一七年で一四四ヶ国中一一四位と低く、特に政治領域での女性参加が進んでいない。ジェンダー格差への対策が政策化しない背景には、「SPA」にもみられた女性を性的な対象・モノとしてしかみない意識とともに、意思決定の場に当事者がいないことがある。

他方、日本社会は、自分で社会を変えられると信じられない、信じさせない・考えさせない社会でもある。日本では、社会を変える行動、政治運動が、決して奨励されないのがある。日本で「Me Too」運動が政策形成につながる原因は、そんなところにもあるように思う。やはり、テレビに向かって「アホか」と怒鳴っているだけではだめなのだ。

# 韓国におけるMe Too運動

嚴 廷美 准教授 (経済学部)

Me Too運動は2017年アメリカで始まった性暴力(レイプ)や性醜行(セクハラ)を告発するハッシュタグ運動である。韓国では2018年1月29日、検察庁の現職の検事がJTBCという民営TVニュースの生放送に出演し、法務部の上司による性醜行を暴露したソ・ジヒョン事件がMe Too運動の導火線となった。ソ・ジヒョン事件の後、Me Too運動は各界各分野に広がりを見せるような形で、政界や演劇、映画、文壇などの芸術界、最近ではスポーツ界に至るまでMe Tooの告発は続いている。ソ・ジヒョン検事の事件に対して、ちょうど先日(このエッセーの作成日は2019年度1月)、加害者に実刑2年と法廷拘束という裁判所の1審の結果が出ている。

2018年2月、ムン・ジエイン大統領領はMe Too運動を重く受け止め、被害事実を暴露した被害者たちの勇気に敬意を示すとともに、積極的に支持する<sup>1)</sup>と声明を発表し、被害者の救済に積極的に対処するよう関係機関に注文するなど、国内の性暴力への認識は高ぶり、単なる一時的なムーブメントではなく、一層現実味を帯びる性的暴力事件として裁かれている。

Me Too1号とも言えるソ・ジヒョン検事の告発からほぼ1ヶ月後、政治界を揺るがす大型告発が行われた。次期与党の大統領候補とも言われた道知事(日本の県知事にあたる)に対する女性遂行秘書による暴露である。この事件は、男女の恋愛のもつれであるという意見と威力による性暴力であるとの意見の間で世論が二つに分かれ、様々な政治的憶測がなされたが、道知事自身は知事職の辞任はもろんのこと、刑事告訴されることによって、政治界から身を引かざるを得ない状況に追い込まれた。近々、裁判所による2審の結果が発表されることになる。1審に続き、無罪を勝ち取ったとしても、加害

者として刑事告訴された時点で政治生命は絶たれてしまい、政治家としての彼の力量を惜しむ声も少なくない。

次に、芸術界におけるMe Tooである。韓国を代表する詩人で、ノーベル文学賞の候補としても名の挙がった大物詩人に対する女性同僚詩人による性醜行の告発である。韓国文壇を代表する国民的な詩人による性醜行の告発は人々に大変な精神的衝撃と疲労感を与えることになる。しかし、この事件の興味深いところは、告発が行われた数ヶ月後、加害者として訴えられた詩人が被害者の女性詩人を名誉棄損で損害賠償訴訟を起こしたことである。逆に被害者の女性が訴えられたのである。今現在も裁判は続いており、その結果が待たれている。

これらの事件が落ち着きを見せるが否や2018年12月、冬季オリンピックショートトラックの国家代表選手からのコーチによる身体暴力及び性暴力が告発された。去年のピョンチャンオリンピックのメダリストでもあるスター選手への性暴力は韓国国民に大変なショックを与え、性暴力根絶のための国家的システムの構築が叫ばれている。先日、教育部、文化体育部、女性家族部の政府の3機関が共同で根本的な対策とあらゆる暴力行為を根絶するためのシステムづくりのため、共同で「To」が作られるようになった。数日前(1月27日)、大統領夫人から被害選手へ送られた激励の手紙とプレゼントは韓国国民の被害者の選手に対する声援の気持ちで代弁するかのようなものとして心温かく受け止められている。

このように、韓国のMe Too運動は現実社会の中で歴々とした形を持った事件としてそれは非が審判される現在進行形の重要な社会問題として位置づけられており、弱者(主に女性)がMe Too言いやすい環境が整えられつつある。

# 在外研究レポート

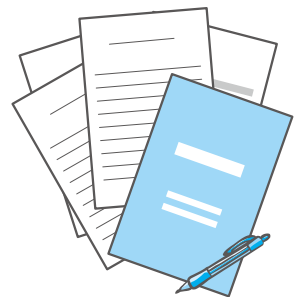
2017年9月より1年間、米国カリフォルニア州にあるカリフォルニア大学サンタクルーズ校にて専門であるマクロ経済学に関して在外研究を行ったが、ここでは私が滞在中に気付いた点を幾つか述べていきたい。

私は学生時代を英国で過ごしたが、多くの皆さんが知っている通り、2つの国(米国と英国)の英語には相違点が多くあり、戸惑うことが少なからずあった。通常の会話で一番気になったことの1つに、トイレの言い方がある。英国では「トイレに行く」と言う場合に、*toilet*という単語も頻繁に使われるが、米国ではほとんど使われないようだった。*toilet*という単語は、米国人にとってはトイレではなく、便器というように感じられてしまうようだからである。あと、英語の発音や聞き取りに関しての話だが、Rの発音はかなり米国では強いので(巻き舌で発音するので)、慣れるのに少し時間を要した。米国の映画・ドラマ等を頻繁に見ていたので慣れていると思っていたが、実際に米国人と会話

してみると困惑することも多くあった。これは私の英語のレベルが不十分であることにもよると思う。最後にもう1つトイレがらみの話だが、幼児英語で「トイレに行く」と言うのに、*oo doo*という言い方があるが、娘の幼稚園で最初にそれを聞いた時には*go party*にしか聞こえずに意味が分からなかった。

社会システムの上で強く印象に残っている点は、初等教育での教育資金の補充を目的とするファンドレイジングの多さだ。娘は現地の公立学校に通っていた。費用は無料であったが、アートやミュージックなどの授業はなく、これを補うために*gap*(注)などの方法でファンドレイジングが行われていた。どのくらいの金額を提供するかは個々の家庭の選択によるので(もちろん全く提供しないのも自由)、貧しい家庭への援助という側面も強くなっている。また、補助教員として教員を支援するというボランティア活動で、教育資金への間接的なサポートも行われていた。例えば、妻はボランティアで週に

## 岡田 敏裕 教授



1回、補助教員として算数を教えていた。資格等はもちろん問われず、自分ができると思う分野で補助教員として多くの父母が自発的(?)に活動していた。もちろんこのような活動は、州、学校、そして子供の年齢によると思うが、日本と比較し非常に盛んであると思われる。以上は教育上のシステムの話だが、全般的に多くの社会システムが人々の寛容性(私には優しさとも時に感じられた)の上に成立していると思われる。ただし、州によって大きな違いがあると思う。

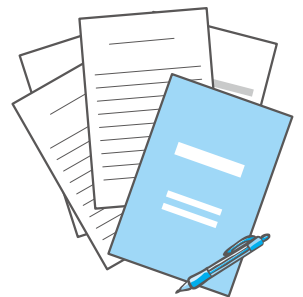
最後に大学での研究を通じて印象に残ったことを記したい。大学では学生に戻った気分で行く大学の授業・セミナーに参加した。現在の主な研究分野である金融マクロ経済学(*monetary economics*)以外の授業にも多く参加した。また、自分の研究に関する討論や質問などを通じて、受け入れ教員から詳細なアドバイスをコメントなどを得ることもできた。このような大学での研究活動を通じて驚いたこと

の1つが、中国からの留学生の多さだ。8割以上が中国からの留学生だった授業もあった。大学への通勤・通学のバスの中では中国語が英語以上に飛び交っていたこともしばしばだった。米国大学における中国からの留学生の増加の話は聞いていたが、これほどとは思わなかった(現在の中国人留学生の数は、それでもピークを過ぎていくという話も聞いた)。これに比べて日本からの留学生は以前と比較して大幅に減少していると思われる。他大学からセミナー報告に来た若い教員のなかにも中国出身と思われる教員が多く見受けられ、どの方も非常に優秀であった。経済学の研究の分野では、既に大きな影響を中国人研究者は持っているが、今後増々その影響は高まって来るだろう。

(注) 資金集めを目的としたくじで、くじを事前に購入しその半券を提出し、その半券をもとに抽選で当選者を決めるもの。当選者は品物を受け取る。



# ウエリントン留学記



松枝 法道 教授

滞在中の主な研究テーマは、環境政策がどのように決定され、異なる政治的環境が政策決定の結果、ひいては社会全体にどのような影響を与えるかについて経済理論の観点から考えると、  
 いうものでした。経済学のベンチマークとして、政策決定者は常に世の中全体を見渡して「最大の多数の最大幸福」を追求するべきだという考え方があります。具体的な政策によって、時には得をすることも、時には損をすることもあるで

今回、半年間の学院留学の機会を得て、ニュージーランドの首都であるウエリントンにて妻と息子二人と共に生活しました。もう10年以上も前になる新婚旅行を含め、学会の機会や個人的な旅行を通じて、これまで幾度もニュージーランドのすばらしい自然やバラエティーに富んだ飲食物を楽しんできましたが、この国のペースに浸ってゆっくりと過ごした時間はまた格別なものと感じました。

ウエリントンの人口は周囲の町を含めても50万人ほどと比較的少なく、金融街や政府関係の建物が立ち並ぶ通りでさえも、どこかのんびりとした雰囲気漂っています。ウォーターフロントも非常にきれいに整備され、博物館、公園、カフェ・バーが連なった湾沿いの地区では、夕刻になると、みんなビールジョッキやワイングラスを片手に何かを熱心に語っています。旅行ガイドブックであるLonely Planet誌の2017年の調査ではウイーンやメルボルンなどを抑えて「世界で最も生活の質が高い街」に選ば



ニュージーランドの国会議事堂の一部  
 (通称『ハチの巣 (ビー・ハイブ)』)



しようが、個々の政策が常にそのような姿勢から決定されていけば、長い目で見れば一人一人にとってなかなか良い結果が生まれるはずだというのがその中心的論拠です。

しかし、実際の政策決定のプロセスはどうでしょう。「ポリティカル・エコノミックス」という分野では、政策決定者といえども次の選挙での結果や個人的な利害など自分自身の立場に多かれ少なかれ関心があって、必ずしも「慈悲的な独裁者」として行動するわけではないと考えます。現在、さまざまな状況において政策がどのように決まっているかについての分析フレームワークが整理されてきています。そのうちのひとつに企業や特定利害団体による「口



研究室のあったピピテア・キャンパスの建物

ビー活動」の影響を考察するものがあります。ウエリントンの街では、高層ビルの側面に大型旅客機や時には軍用機の巨大な宣伝広告が掲げられることがあります。これらは全て政治家や官僚に向けたもので、目の届かないところでも様々な「工作活動」が行われていることは想像にかたくありません。人口比では世界一多いと言われるレストランがウエリントンの政治・ビジネス街にひしめきあっているのはこのような背景もあるのではないかと思います。

留学先のピクトリア大学はウエリントン市内に三つの主要なキャンパスを持っており、私が研究室を借りていたのは国会議事堂と鉄道駅にはさまれた高層の建物で、ピピテア・キャンパ

スの一部でした。一番驚いたのはIT関連の設備で、どんな小さい教室にも必ず一台は最新の電子黒板がありました。図書館の電子書籍サービスも充実しており、設備の面では欧米の大学にもまったく引けをとらないと感じました。

留学期間も残りわずかとなった2018年2月に、関学経済学部から東田教授、猪野准教授にお越しただいて、ピクトリア大学の研究者との二大学間のジョイント・ワークショップを初めて開催しました。丸一日頭をフル回転させて、その後はみんなで楽しく飲んで食べました。私の新しい夢に、このジョイント・ワークショップの第二回目を関学のキャンパスで行うことが加わりました。



近所のカフェにて

## エコノフォーラム座談会

## 海外インターンシップは面白い

日時…2018年11月7日(水) 17時~18時

場所…経済学部棟2階会議室

出席者(五十音順)...

学生 阿部 優志さん

岩崎 桃子さん

屋 真由子さん

妻鳥 幹大さん

司会 藤田 友尚教授



インターンシップとは、就職する前に企業などで就業体験をすることです。日本では、1日から5日程度、現場で働いている社員の人たちに混ざって仕事を体験します。大学生の関心は高く、学生の70%以上が参加していると言われています。

インターンシップは国内だけではなく、海外でも就業体験をする海外インターンシップが展開されています。海外ということで敷居が高いと思われるがちですが、ヨーロッパ諸国ではごく普通に行われています。学生は積極的に海外に出て経験の幅を広げます。

この座談会では海外インターンシップを経験した経済学部の4名の学生さんに集ってもらい、彼らの体験談をうかがいました。

藤田 海外でのインターンシップを経験していること、それがみなさんの共通点です。現在、インターンシップってすごい人気なんです。政府も国内でのインターンシップを応援していますし、大学生の関心も高い。ただし、海外でのインターンシップはそれほど一般的ではありません。ですから今日は、みなさんに海外でのインターンシップに参加されたときの経験や、それを通じて考えたことなどを聞かせてほしいと思っています。

まず阿部君からいきましょうか。どうしてインターンシップに参加したか動機から教えてください。

藤田 そうですね。

阿部 ゼミに入った時点からインターンシップでインドネシアに行くということは決まっていました。

藤田 なるほど。ということは、岩崎さんも同じですか。

岩崎 そうですね。

藤田 妻鳥君はどうですか。ベトナムですが。

妻鳥 僕は、将来、自分が働く姿を想像したときに、海外で働くかどうか大きな基準になると思うんです。海外で働くことが自分にとって楽しいと思えるかどうか、自分の体でそれを確かめたくて行くかと思いました。

藤田 ベトナムというのはどうして。

妻鳥 ベトナムはアジアの市場でも盛り上がりを見せている国です。僕は別に語学学習を目的として行ったわけじゃなくて、海外で働くということだったので、それで関心があったのです。

屋 私は何か直感で、インターンシップのチラシを見たときに、これに行くべきかなというふうに思ったので参加しました。見たのはアメリカのロサンゼルスでのインターンシップのチラシでした。私はもともとすごく慎重な性格で、

何事もかなり熟考してやるんですけど、今回は直感に従ってみようと思つて参加しました。私が行つたとき、同じ年の子が数人しかいなくて、ほとんどが1学年上とかの人だったので、やっぱり就職活動を意識しての参加かなと思ひました。私は就職活動というよりはどちらかという海外で働くということに興味があったので、それに自分は向いてるのかどうかを検証するために参加しました。

**藤田** バリに行つたお二人は、バリに行くのは自動的に決まっていたんですね。

**岩崎** そうです。観光調査も兼ねたゼミの活動の一環でした。インターンをしなから、その就業後に調査をさせてもらつたりしました。

**藤田** フィールドワークもついてくるということですね。

**阿部** ええ。しかも、自分たちでつくつた質問項目があつて、その調査の結果をもとに論文を書いていきます。

**岩崎** 日本人のバリにおける観光調査をやりました。土日はやっぱり日本人も来ますから。

**阿部** 問題意識というのは、中国人が増えてきていて、今までは日本語だったのが中国語に変わってきています。そういうところの問題意識を持つて調査したという感じです。

**藤田** 屋さんのほうは、インターンシップに行つてからあとはどういう感じでした。何か勉強につながる事ができたとか、そんなことはありませんか。

**屋** 1カ月間ホテルで生活していたんですけど、そのホテルで働いているおばちゃんたちが



藤田 友尚 経済学部教授

スペイン語を話していたのがすごく印象的でした。移民が多くて、スペイン語を話す人が4割ぐらいいると聞きました。私はそのとき1年生だったんですが、外国語としてスペイン語を選択していて、ちょっと聞き取れたときはすごくうれしくて、2年生になったとき語彙力は上がったかなとは思いました。その点で言ったら勉強にはつながつたかなと。

**妻鳥** 勉強という面ですが、大学の学課的な勉強じゃなくて実生活でのコミュニケーションという点ではすごく勉強になったことがあります。仕事が終わつて、日本人がやっているお店があつて、そこで日本人の駐在員の方としゃべりました。そんなときに、仕事はどんなことをされているんですかとか聞いたり、いろんな人と出会つて、こういう仕事はこういう状況とか、

こういう仕事をベトナムでやるならこうとか、そういう話を聞いたりしました。社会人としてどんなスキルが必要か、などのことも教わりました。コミュニケーション力、あるいは対人スキルというのでしょうか、そういうものはすごく身についたと思います。

### さまざまな仕事に従事

**藤田** 岩崎さんは日系の観光出版社でのインターンシップですね。具体的にどんな仕事をしていたんですか。

**岩崎** 観光出版社というか、観光系のフリーマガジンを制作している会社で、バリに在住して日本人が編集者としてバリの魅力を伝えるフリーマガジンなんです。日本人の視点でバリを紹介するんですけど、住んでるからディーブな場所とか、一般的じゃないようなことも紹介できます。基本的にはオフィスワークだったんですけど、取材にも行つたりしました。滞在の最後のほうに、ちょっといろいろアクティビティを体験して、あとは同じ会社と同じゼミから4人行つていて、4人で特集記事を組むんと言われたので、学生旅行でいいところみたいなのを紹介する記事を考えたりしました。

**屋** 私は教育系の事業を扱うところと、あとはロサンゼルスに住んでる日本人向けに雑誌を発行してる部署がある会社に行きました。マーケティング型ビジネス体感プログラムというプログラムがあつて、その一環としてインターンシップに参加しました。ロサンゼルスの日系企



阿部 優志 (あべ ゆうし) 経済学部3年。栗田ゼミでゼミ長を務める。2018年夏、インドネシアのバリ島の日系企業で約1ヶ月半のインターンシップに参加。

業が抱える課題を消費者へのアンケートや競合調査など実践的なマーケティング調査から解決し、現役のビジネスパーソンに対し事業提案を行うということをやりました。ふだん昼間は普通に仕事をし、その後にマーケティングを行って、自分たちで新規事業を計画して、その会社の方に提案するという流れでした。

妻鳥 僕の業務内容は、IT企業で、ベトナム人ばかりなので、そういう人たちに日本語教育をするのがメインでした。日本語をできるだけしゃべれるようにするのが、自由に教育していいよという感じで任せられました。あとは若者視点からマーケティングとか、新規事業の新しい案を出すというのが仕事でした。

藤田 新しい案って、例えばどんなものでした。

妻鳥 IT系なのでアプリ開発とかがあって、カップラーメンの麺の「硬さ」を調整できるみたいな……。僕はラーメンを「硬麺」で食べたタイプなんです。それで、いろんな人が何分をやったら硬かったとか、そういう情報をまとめて、このカップラーメンなら何分で「硬麺」になるみたいな、そういうのができていいんじゃないかなと……。

藤田 それでどうでした。受けた。

妻鳥 受け悪かったです(笑)。実現したかもわからないです。

### 海外での仕事体験を通して考えたこと

藤田 阿部君、何かそういう自分のやってるところでなにか案が出せたことはあるんですか。

阿部 僕はサーフィンの会社で働いていて、ずっと店にいました。接客でしたが、最初は接客業務のマニュアルを渡されて、これだけやってみて、といった感じでした。あとは、もし何かやりたかったら自分たちで考えて進めていって、という具合で。自分たちはやる気なんです。周りのインストラクターからしたら、急に何しに来たんだこいつ、って感じで、彼らの理解を得ながら鼓舞していくのが難しかったです。

最終的にできたこととしては、お客さんがサーフィンを終わった後に座れるリラククスできる場所がないことがわかって、お客さんがもっと安らげる空間をつくらうという話になりました。最終的に壁のペイントを絵師の人を呼

んで描いてもらったり、サーフボードで椅子をつくったりして、お客さんが少しでもリラックスできる空間をつくることに専念していました。

藤田 おもしろそうですね、アイデアとしては。例えば、仕事を通じて何か学んだことはあるかしら。

阿部 仕事をする上で、それまでの自分の考えだと、話すこと、伝えることがすごく大事なかなと思っていました。けれど、それよりも、むしろ聞くことのほうが大事だということを仕事をしていてすごく思いました。相手が何を考えているか、何をして欲しいか、何がしたいか、そういう相手の状況を聞き出すということが誰かと共に仕事をする上で大事なのかなって思いました。

屋 私は、日本にいるとき、仕事に対してしんどいとかつらい、おもしろくないといったイメージがすごくあったんです。しかし、社員の方とかを見ていたら、仕事は一生懸命遊ぶときは遊ぶ、そんなメリハリがすごく、ランチタイムのときとかはすごく楽しそうにしていたりとか、きょうは何々を食べに行こうみたいなことがあって、楽しむこともしていいんだみたいな感じで。真面目に取り組むのも大事だけど、コミュニケーションもすごく大事なんだなと思うようになりました。

岩崎 日本にいたとき、特に東南アジアとかでは労働の質が低い、仕事の時間も守らない、約束も守らない、頼んでも期待したものが返ってこない、だから余り期待したらダメ、みたいな



岩崎 桃子 (いわさき とうこ) 経済学部3年。栗田ゼミ所属。2018年夏、インドネシアのバリ島の日系観光出版社で約1ヶ月半のインターンシップに参加。

ふうに言われていました。日本人のレベルに引き上げないと、現地の人をそこまでもっていかないさや、と思ってたんですけど、インターンに行かせてもらった先の社長さんから、世界から見たら日本人が特殊でちゃんとし過ぎていて、だからそのレベルにもっていかうとしても無理と言われました。それで自分たちのほうがマイナーなんだから、そこをちゃんと理解しないとうまくやっっていけないよ、と。確かにそうだな、と思ったことがあります。

**屋** 実際できないんですか、本当に。

**岩崎** 多分できるんですけど、現地の人があるまで求めているというか……。

**屋** このぐらいでいいよという基準が現地的にあるということ……。

**岩崎** 会社も、現地の人たちの考え方や習慣が

あるので、日本的発想だけでやっていたら、やっぱりうまくいかない。

**妻鳥** 普通、日本的には遅刻する場合には、絶対遅延証明とかいるじゃないですか。でもベトナムの社員って、会社に電話入れるわけでもないですよ。その班のチームのグループLINEで、「妻鳥、遅れるから」みたいな。寝坊しただけから遅れる、きのう飲んでたから遅れる、エーッ！、という感じですよ。しかし、社員のひととはみんなベトナム人なんですけど、フレンドリーで、飲みに行こうとか遊びに行こうとか。3週目ぐらいに旅行に行こうって誘われて、行きたかったんですけど、自分に予定が入って行けなかったんです。

**阿部** 会社ではインドネシア人が周りにいて、常にインドネシア人に囲まれながら過ごしていました。でも僕の会社は結構きつちりしたところで、遅刻する人は全然いなかったです。経営者が日本人で、結構厳しいから。というところもあるんですけど、ほぼ遅刻はゼロ。一回僕が遅刻してしまつたら、ものすごく険悪な雰囲気になって……。社長さんは、インドネシアで起業してやっついていこうと思つたら、一人ぐらい怖い役割を担う人がいないとだめで、その役を自分がやっているとおっしゃっていました。

**妻鳥** 社員は何人規模なんですか。

**阿部** 社員はサーフィンのほうは大体10人程度ぐらいで、もう一つ働かせてもらっていたバスの会社は中心となるオフィスは20人ぐらいでしたが、全体としては130人ぐらいのスタッフがいます。

**妻鳥** 僕のところは大きな企業で200人ぐらいいて、びつくりしました。

**岩崎** そこはベトナム人だけなんですか。  
**妻鳥** 日系の企業で、日本人の方は3人ぐらいいました。現地の人を雇ってるわけですよ。

**岩崎** 私のところは日本人とバリ人が半々ぐらいだったんです。規模もそれほど大きくないで、日本語が飛び交っていました。現地の人で雇われているのはデザイナーとか、写真とかエディットしたりする人、あとは営業の人。バリ人に売り込みに行くので日本人だとしてもわからなところがあるので。企画とかは在任の日本人なので、私たちが話しているのは基本的には日本人の社員さん。バリ人のエディターの人は隣の席だったので、ちょっと疲れたときにバリのお菓子食べる、みたいなことはありました。

### 言葉や文化の差は

**藤田** 英語の語学力はどう思いますか。

**岩崎** インターンで英語力が上がったとは思いません。そんなに変わらない感じですよ。生活面ではホテルの人としゃべったりするのは英語なんですけど、会社は日本語でやっついていて、バリの人としゃべるときにちょっと英語を使うくらいでした。でも、ちょっとだけバリの言葉を教えてもらったりとかはしてました。

**屋** 私の方は、1カ月もいたら、スペイン語を話すその人とも仲よくなったりしたんですが、英語を織りまぜてやっついていたので、詳しい話と

かはできなかったです。英語を使うのは、私も日常生活ぐらいです。あとは、マーケティングの一環として、大学に行って現地の大学生に聞く機会がすごくたくさんあって、そのときは英語だったので必死に聞いたり言ったりとかはしていました。聞くことに関しては、答えがあらかじめ用意されてるわけじゃないので、必死に聞かないといけないんですけど、語学力はそんなに変わらないかなという感じですね。

**妻鳥** 僕は語学力があがったと思います。自分が何かしゃべろうと思えばいくらでもその機会をつくれたので、自分から英語で話しかけたら、みんな英語で答えが返ってくる。最初に着いたとき、英語は得意ではなかったんですが、普通に結構しゃべれるようになって帰ってきました。ベトナムに行ったのは英語目的じゃなかったんですけど。

**阿部** 社員さんとは基本英語で話していて、プレゼンの機会とかいただいたときはちょっと難しい英語が必要になってきて、この辺ちゃんとやってあげばよかったと思うことがあります。ただ、日常生活はけっこういけるかなという感じですが。サーフィンのほうは日本人が多いので日本語でいけるんですけど、たまに外国人のツアー客が来たりして、母語が英語の人と英語でしゃべるときはやっぱりちょっと緊張しました。インドネシア人との英語はあまり緊張しなかったですが。

**藤田** 文化の差という面で何か気がついたことがありますか。特にインドネシアのバリなんか、少し違うと思います。

**阿部** ビーチには売り子がたくさんいるんですけど、2週間ぐらいいたときには、顔見知りになったこともあって、これまで周りにいた売り子の人が声をかけてこなくなっていたんです。彼らは自分たちでつくったミサンガだったり、安い偽物のレイバンのサンングラスだったり、ござとかを観光客に声をかけて売るのが仕事です。ある日すごく暇で、ビーチで座って過ごした日があったんです。海を眺めて、そろそろ波いいかな、みたいな感じで。そんな時、売り子がいつも毎日同じ人で、同じものを売っている事に、急に、でも強烈に感じました。目の前の海で自分はサーフィンしてるのに、ビーチには貧困があって、そういうのがバリにはあって、1ヶ月滞在したからこそ気づけた点かなと思います。

**藤田** バリは観光の町で、リゾート地として有名ですが、貧富の格差はひどいところなんだと聞いたことがあります。それで事件とかも時々あったりして、貧困が原因だったりしますけどね。

**屋** 私は、みんな異質なものの、自分と違うものを受け入れて生きてるって感じがありました。すごく繁華なところからちょっと入っただけで、チャイナタウンだったりリトル・トーキョーだったり、あるいはスラム街だったりとかが近くにあって、貧富の差とか文化の違いというのすごく身近に感じられたと思います。

**妻鳥** みんなけっこう「テキスト」なんですけど、でも人情はすごくあって、本当にすぐ輪の中に入れてくれるというのが特徴としてあ

ります。今でも「三田妻鳥のグループがあって、この前、大阪で地震が起きたときに「地震起きましたね、大丈夫ですか」みたいなメールを送ってきてくれました。国民性としては「テキスト」な部分もあるんですけど、そのかわりすごく人に対して温かいというか、興味津々で来てくれるので、そこはすごくありがたいなと思いました。

**岩崎** バリの人はめちゃくちゃ日本人好きで、すごい親日家なんです。優しいなという雰囲気を出してやっているのかもしれないな。

**阿部** 一度、歩いて20分ぐらいのところまでお客さんを迎えに行く日があったんです。早朝6時にそのホテルに行つてと言われて。でもその前日に足を怪我して、足を引をきずりながら歩



**屋 真由子**（おく まゆこ）経済学部3年。2017年冬、アメリカのロサンゼルスで1ヶ月間のインターンシップに参加。平日はしっかり働き土日は遊ぶというメリハリのある生活で、多くを学び、考え方に大きな変化があった。

いていたんです。そしたらバイクのおっちゃん  
が、早朝ですよ、いきなり「どこまで行くの」っ  
て尋ねてきたんです。パリのバイクはフリーで  
タクシーもやっていて、歩いていたらバイクに  
どうと声をかけられます。バイクに乗りたけれ  
ば、その人に目的地を言えはいんですけれど、  
かなり高くて普通なら1,000円、2,000  
0円ぐらいって言われます。だから「要りませ  
ん」と言ったのですが、「1ドルでもいいから、  
どこ行くの」って言われて。それでも時間に  
余裕があったので「歩くからいいよ」って言っ  
たんですが、「乗っていけ」って言われました。  
しかも、タダで。そういう人情的な面での優し  
さがあった、パリの親日性を感じますね。

## 海外インターンシップで自分の《殻》を 打ち破る

**藤田** 海外のインターンシップの場合、何かメ  
リットとかデメリットみたいながありますか。  
メリットのほうが多いですか。

**妻鳥** メリットしかなかったなと思います。  
だって、行ったら絶対学ぶことがあるし……。  
**屋** デメリットがあるとしたら、この企業に  
行きたいという希望は出せないんです。例えば  
ミスマッチが起きたとしたらデメリットかなと  
思います。例えばホームステイ先によっては、  
食に関していうとすごい差があります。豆ばっ  
かり出てきたとか、毎日カレーばかりだった  
とか。家族の交流を大事にしている、夜御飯ま  
でに帰らなきゃみたいなのがあったりとか、そ  
ういうことがあったらデメリットかなとは思



**妻鳥 幹大** (めんどり みきひろ) 経済学部3年。2018  
年春、ベトナムで1ヶ月間のインターンシップに参加。  
関西学院中学部野球部の公認学生コーチをしている。

ます。

**岩崎** 私は、インターンって何をするかがちや  
んと決められているものだと思ってたんです。日  
本のインターンでも、マーケティングだったら  
マーケティングというのを自分たちで考えて  
やっていく、という具合に。でも、私のところ  
は、インターン用にわざわざ仕事などは用意さ  
れていなくて、ふだんの通常業務の中でどう自  
分たちが入っていくかだったので、本当に実際  
に働いてるみたいでした。

**藤田** 海外のインターンシップに参加するとい  
うと、どんな人が向いていると思いますか。例え  
ば今後、みなさんの後輩なんかには、インター  
ンシップに行きたいんですけど、と相談された  
としたら、どんなアドバイスとかしてあげられ  
るでしょうか。

**妻鳥** もう、迷ってる時点で行ってもいいと思  
います。だって、迷ってるという時点で行きたい  
という気持ちはどこかにはあるはずなんで、そ  
う思ってる時点で行かないとわからないし、も  
う迷った時点で行けよ、と思います。

**屋** 私は1年生の終わりに行っただけで、  
1年生の期間をすごく無駄にしたなと思いま  
した。1年生のときに、自分が目標を持って何か  
をするとか、そういうことをあまりしてこな  
かったなと気付いて、それってすごくもった  
ないなと思いました。残り3年あるんだしたら、  
何か自分が変わるようなことをしたいと思っ  
たので、ふだんだったら海外で生活するなんて自  
分にはできないし、とかって思って行かなか  
たかもしれないけれど、そこで勇気を出して  
やってみようと思ったことがよかった。その後、  
何事もやってみたほうがいいということを学ん  
で、いろいろなことに挑戦したので、それらの  
経験を通して大学生活が充実したと思います。  
もし自分に向いてないかと思ったとしても、向  
くように工夫していけると思うので、行っただ  
うがいいかなと思いますよ。

**岩崎** 向いてるといふか、早目にやってほしい。  
もし昔の自分に向かって言えるなら……。

1年生とかに行っただけですが、これからその後  
の大学生活にもっとつながれたかなと。私の  
場合、3年生で行ったので、もう残りは就職活  
動やゼミの論文とかで、あと1年ちょっとしか  
なくて、もっと前に行っていたら少し違ったか  
な。

**阿部** 僕は3年生で行くことに賛成かな。ゼミ

で1年かけて30冊ちよつとぐらいの本を先生から指定され、それを読みました。例えば、文化に対する受け取り方を勉強する本だったり、働き方に関する本だったり。そういうのを読んで行ったということがあったので、僕は逆に3年生でよかったなと。

**藤田** なるほど。つまり阿部君が言ったみたいに、いろいろの働き方だとかインドネシアの風土や国民性についての知識を得ておいて、それを实地に検証してみるといって考えも有りだし、他の3人のように、自分で動いてみて自分がどのように変わっていくのか、自己変革という思いで参加するのも有りということですね。それは個人それぞれの持ち味ですね。参考になるかもしれません。

### 大学生だからできる海外での仕事体験

**藤田** 海外インターンシップは高校生にとつて、きつと新しいことだと思っんですよ。ぱつと大学に入ってきて、留学以外にこういう制度があると思う。高校生のときに、みなさんはインターンシップなんて考えたことがありませんか。

**妻鳥** ないです。留学はあったけど、インターンシップまでは……。

**屋** インターンシップはない……。留学は知ってるけど、インターンシップというものがあることは知らなかったです。

**岩崎** 私は、オーストラリアでワンセメスターの期間、留学したんですが、留学期間はもちろん

ん大学で勉強する。友達と交流して文化を知ったりとかしたんですけど、インターンシップは語学学習じゃないし、語学力を高めたという目的で行くものでもないもので、より現地感、よりその生活の中に入り込むみたいないところがあります。留学のときはよそ様という感じの雰囲気、もちろんあなた留学生だからという建前があったんですけど、インターンシップに行ったら、そんなこと言ってる人は要らない。邪魔なだけですから。

**藤田** みんな3年生で、これから就活が本格的に始まりますね。この経験を何かこれから活かすことができそうですか。

**阿部** 僕はサーフィンの会社で何かしたいなら自分たちで考えて、と言われたときに、会社の中で新しい企画を始めようとなりました。その際、どうやってほかの人をキャッチアップしていくか、引き連れていくかというところで悩みました。

一方でバスの会社では、何人か企画者がいて、企画がもう考えられている途中から入って、何かそれに対して意見を出してと言われました。内容を見て、こことか甘いんじゃないですかとか、そんなことしか言えなくて、企画者の方たちほどアツくなれなかった自分もいます。

つまり二つの立場を経験しました。一つは自分が企画者になる側、もう一つは自分が引っぱられる側になるという立場です。どちらの立場も全然違って、かなり悩みました。どちらか一方の立場に立った時に、もう一方の立場も考え

ないとだめだなということは、今後、社会人としての活動に活かせるのではないかと思えます。

**妻鳥** 僕のいたところは、企業の規模が大きいので、まずインターンに来てるといふことを知ってる人が少ないんです。ですから、まず、日本語教育をする人たちに自分たちのことを知らせるといふことから始めました。朝早く出社して、玄関にいて、みんなに挨拶して自己PRをするといふことをしました。それでみんなに知ってもらって、こういうことをやってるといふのを話して、それで参加してもらったんです。とりあえず自分から積極的にいろいろしていかないと何も起らない、まず行動を起こさなければ何も起らないと思いました。

**屋** 私の場合、1年生の終わりに行ったので、インターンシップの経験を就活で活かそうと思ってはいなかったです。それで、今後の自分の考え方だったりとか生き方という点で何か得るところはあったということなんです。

**岩崎** 人気の企業とか有名などころとかに行きたいって思う人は多いですね。私も1年生からずつとそう思っついて、でも、今回のバリのインターンシップではバリの中小企業で働いたので、そのよさみたいなことがわかりました。いわゆる一般大学生の就活の王道、つまり、いっぱいセミナーに行っつて、いろんな企業を知っつて業界分析をして、みたいなんじゃないかと、日本の中小企業にちよつと目を向けてみたいとか、ベンチャーとか楽しそうだなとか、そんな方向に今は意識が向かうようになりました。



藤田 みなさんの話を聞いていると、インターンシップが一人ひとりの生き方や考え方にとっても豊かな経験をもたらしたことがわかります。インターンシップでの経験はみなさんの自信につながっているのは確実で、その経験は就活でも力となりそうですね。これから就活が本格化しますが、みなさんの健闘と幸運をお祈りしています。

今日は、長時間ありがとうございました。



20代、あの頃私は……研究と青春

# 「会社から離脱！リスクを冒して

# 研究者の道へ 研究と青春」

新海哲哉



祖父や二人の叔父兄弟が、地方で「開業医」をして、勤め人ではなく「職人」として他人にあまり依存せず生きていたのを見て、高校時代はまったく勉強せずにいたにもかかわらず、「私も、できは悪いが「風邪と腹痛でも」診て飯を食いながら、地方で「小説や随筆」でも書いて自由気ままに暮らしてやるう。」などと甘く考え、無謀にも「医学部」に入り、ヤブ医者になろうと不徳な決意をしていた。しかし、高校入学以来、奨学金で映画を、洋邦画を問わず年に100本鑑賞、ロックバンドのボーカルに現を抜かすなど怠けに怠けていた高3の私にあったのは、「医学部に入れる学力をつける努力の才能や学力」ではなく、「無謀な決意と根拠のない自信と自己肯定感」と色気と彼女で、家は母子家庭

でカネもなく、現役は高校近くの公立大学の医学部を「記念受験」して、落ちるべくして落ち、賢明な彼女には18歳の誕生日を最後に、フラれるべくしてフラれた。

当然、浪人しても、高校の多くの同級生が入塾した大手予備校のK塾にも、カネがないので入らずに、Z会の通信添削と受験参考書類の私の勉強だけの宅浪で1年を費やした。受験のノウハウや効率的な時間配分もない我流ではできず、けっきょく1期校は、地元の名門で叔父が卒業した国立N大の医学部を受験して桜散り、滑り止めで受けておいた私立N大学の経済学部に入學したが、在学しつつ「仮面浪人」して、1期は再度国立N大の医学部を受験して敗退、2期校も青森県の国立H大学の医学部もちゃんと落ち、N大

の単位もとれず、留年決定し24歳で「1浪1留」してN大を卒業。名古屋市の公務員試験の筆記は合格したもの、癖の強さからか面接で落ち、地元の中小企業に営業社員として入社し勤務。その後、「俺はサラリーマンで生きるのは、とても無理だ。」と判断して、私立N大時代に「大学院進学しては？」とのお誘いを自ら蹴ったくせに、その誘ってくださった恩師を訪ね、大学院の修士課程に27歳で進学。さすがに「退路」を自ら断ったので、「死に物狂い」で勉強（土日祝日、夏季休暇、春期休暇以外は、塾講師のバイトとマンツーマンの大学院の授業準備で睡眠時間5時間）。

その後カネもないので博士後期は公立N市立大の大学院に編入し、D1で投稿した論文が日本のある学会誌に単著で掲載されODなしの公募で、縁あって立命館大学経営学部助教教授で採用されたのが32歳だった。ちなみにそのとき経営学部で同僚となったのが、現在でも同僚である次期経済学部長の豊原法彦教授である。また、同大学で学部は異なるが同僚であった、その後さまざま形態で刺激と学恩を受けているのが、大阪大学経済学部の阿部顕三教授、二神孝一教授、堂目卓生教授である。おそらくこれらの先生方にとつて私は、困った「腐れ縁？」だと思っておられると思うが……。

これが18歳から32歳まで波乱万丈でリスクに満ちていたが、果敢に過ぎた激動の青年期の中で、27歳から32歳までが「私の遅まきの青春と研究の日々」であり、学者として気ままに生きる「獣（けもの）道」を生きる現在の私の礎となった。

20代、あの頃私は……研究と青春

# 「勉強を教わった先生」



長谷川哲子

研究に没頭していた20代、それと今の自分とのつながりを、というお題をいただいたものの、自分の過ごした20代は研究とはどのようなことか分からなかったし、いまま本当は分かっているし、大学生生活の中で覚えていることを……と独り決めしてみた。際立っていまま残る記憶を書くことでお許しいただければと思う。

学部生として教えを受けた先生のうち、忘れ得ない先生のことである。いままお新刊本コーナーでお名前を拝見する先生でもあり、多少のフィクションを交える。

まずは授業には遅れていらっしやる（授業開始時間から28分後、妙なタイミング）。仕事場は某駅前の喫茶店、家には帰れないから、というような話を枕に、おすすめの本の

話が始まる。毎回3冊。古今東西を問わず縦横無尽に語ること数十分のうち、おもむろにテキストを1〜2ページほど解説し、もう時間やな、と教室を去る。豊かに紹介された数十冊のうち、ごくわずかしか手にとらず興味を持つともしなかったことが今でも悔やまれる。

しかし、言いたいのはそのことではない。当時は、専攻科目を一つでも落とすと1回生でも即留年、1年生を何回でもどうぞ、という学料だった（そこで「1年3回生」というような用語法とその実在を知り、心底おびえることになる）。夏休み前の最後の授業で、夏休み明けにテストをするとして、課題が出された。夏休みに勉強用のノートを作り、9月の初回授業に乗り込んだ。いつもどおり、授業には遅れていらっ

しゃった（授業開始時間から28分後、絶妙なタイミング）。（以下同じ）。そしてテストはなかった。教室を後にする先生のもとへ、これだけがんばったのにとノートをひらいて見せんばかりに詰め寄った。いまま思えば愚かである。そして肩すかしを食らった。いまま思えばおっしやる

通りなのである。「ええやないか」。本、ちゃんと読んだんやろ？そんなけ勉強したんやろ？おお、よかったやないか〜！この言葉を咀嚼できたのは、先生と同じく大学教員の職に就いてからである。どうしても合格したい奨学金の応募書類がそろわず廊下でうろたえていたところ、ほかの授業よりもきみの将来のほうがよく、よっぽど大事やからな、とウィンクが聞こえそうな笑顔で、授業に出ず事務室に行けと言ってくれた。その

恩もさることながら、いまま少し書いておきたい。先生の授業は、立ち見が出るほどだった。ほくの話なんか聞いているより、図書館で本90分読んでいるほうがずっと勉強になんのになあ……とくり返しぼやかれても教室を出ていかなない学生に苦笑しつつ、学生の知らない、そして知るべき世界への扉を目前にひらいてくださっていた。いまだ報いることのできない学恩である。

大学教員としての自分について考えさせられるときには、この先生のことをおもう。

20代、あの頃私は……研究と青春

# 「衝撃的だったおっちゃんの話」

上村敏之



20代の頃、私の青春時代は将来不安と戦う日々だった。研究とは、不安を忘れる手段だったのかもしれない。博士課程の大学院生だった私は、企業の財務データをを用いて法人税を分析していた。その論文は査読雑誌に掲載され、私が大学教員になるきっかけを作ってくれた研究の1つである。

この手の研究には、財務諸表を正しく読めることが必要である。税理士試験の会計2科目に合格していた私は、会計の知識を研究に生かすことができた。「人生に無駄はない」と何度も思った。私は、当初から研究者を目指していたわけではない。関学経済学部への進学が決まった18歳のとき、自立した税理士になりたいと思ひ、アルバイトで稼いだお金で専門学校に通った。

税理士試験の勉強は辛かった。ある日、梅田の専門学校の自習室で30代のおっちゃんAとBの会話が聞こえてきた。A「次の試験で落ちたら、もう諦めます」B「なんで？」A「妻が働き、娘の面倒もみてもらって、私は勉強一筋。もう限界ですわ」。気楽で安易に考えていた学生の私には、人生を賭けるおっちゃんの話が衝撃的だった。失礼がないように勉強し、大学3年生で簿記論、4年生で財務諸表論に合格した。

税理士試験は全部で5科目ある。当時の税理士法では、財政学の修士論文を国税庁に提出して承諾を得れば、税法3科目が免除だった。大学4年生のときは、大学院の受験勉強と税理士試験の勉強、就職活動もやった。就職活動は貴重な経験だった。内々定をいただいたが、結局は

大学院に進学する。

修士論文が書ける見通しがつき、大学教員という新たな目標が頭をよぎった。両親の離婚で金銭問題は大きかったが、一人暮らしでも勉強を続ける程度の奨学金は得た。「大学教員になれなくても、税理士で食える」と考えて博士課程に進学。26歳で日本学術振興会特別研究員となって生活の安定を得た。同年、東洋大学経済学部から内定をもらい、将来不安から解放された。内定の電話をもらったときの感動は一生忘れられない。

税理士になる目標を持ち、おっちゃんの話に衝撃を受けて勉強したことが、その後の研究の役に立ち、大学教員の内定につながった。いま考えれば一本の糸でつながっているが、計画性はない。まさに計画

された偶発性（ブランド・ハッペン・スタンス）。だからこそ、常に目標をもつことが大切なのだ。それが実現しなくても、偶発的に成果につながってゆくものだから。

注 関西学院大学大学院経済学研究科博士課程1年生だった24歳の私。神戸の北野にて。



2018年  
5月29日  
火曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

# 直木賞作品のススメ

どちらも1935年に始まった「芥川賞」と「直木賞」は、日本の代表的な文学賞として広く知られており、前者は芸術重視の短編の純文学を、後者は娯楽重視の中・長編の大衆文学を、それぞれ対象としている。かつて私のゼミでは「芥川賞作品」に表れた政治・経済・社会思想1935～2000」という壮大な

テーマを掲げ、ゼミ生全員で当該期間の全作品を手分けして読み、（経済学部や社会学部など）社会科学系の学生の興味を惹きそうな作品を洗い出したことがある。

とりわけ歴史的アプローチの研究では、そのテーマに関わる古典的「小説」を読めば、教科書や専門論文等では得られないその時代状況のいきいきとしたイメージを、感性を通じて得ることができる。例えば英国19世紀の救貧法行政を学ぶさいは、救貧院に収容された孤児の生涯を描く、

文豪ディケインズの『オリヴァー・トゥイスト』（1838年）を一読することは有益だ、と考える研究者も多いだろう。

さて話を戻すと、芥川賞作品は「純文学」なので、直木賞に比べると、経済などの思想や世相を反映しにくいのだが、それは百も承知の上で、私のゼミでは芥川賞作品を研究対象に選んだのである。なぜなら芥川賞作品はどれも「短編」なので、数時間で読破可能だが、直木賞作品は文庫本にして300～400ページのサイズが普通なので、読むのに数日かかる。つまり、前述のような問題意識の場合、研究対象としては直木賞作品の方が適しているのは一見して明らかなのだが、それでは読書量が膨大になってしまうため、やむなく芥川賞作品を対象としたわけである。

しかし、直木賞作品で同様の調査をやりたいという思いを、私は今も

失っていない。だからそれらをコツコツ読み進めている。お薦めのものを幾つか挙げれば、前述のような問題意識からは、①ちよっと古いが、城山三郎『総会屋錦城』（1958年下半期受賞）。②同じ会社に勤める5人の女性のそれぞれ異なる生き方を描く、篠田節子『私たちのジハード』（1997年上半期）。③ある在日朝鮮人の少年の生活・心理を描く、金城一紀『GO』（2000年上半期）。④中小企業の意地を描く、池井戸潤『下町ロケット』（2011年上半期）。⑤就活生たちの心理を描く、朝井リョウ『何者』（2012年下半期）。

また、純粋に娯乐的・個人的観点から面白かったのは、⑥戦国時代の瀬戸内海の村上水軍を描く、白石一郎『海狼伝』（1987年上半期）、

⑦江戸の遊郭・吉原のガイドブック、松井今朝子『吉原手引草』

（2007年上半期）。⑧千利休の茶の美意識を探る、山本兼一『利休にたずねよ』（2008年下半期）。⑨大正～昭和初期の秋田のマタギ（鉄砲猟師）の半生を描く、熊谷達也『邂逅の森』（2004年上半期）。

とりわけ⑨は抜群にカッコよく、私が見たい（むろん各種免許等が必要）を始めるきっかけになった。

直木賞作品は基本的にどれもベストセラーなので、面白くて当たり前。映画化されていることも多いので、映画を見ることが多いのもある。私は小説を読みながら、電子辞書やグーグル・マップで色々調べたりと気になった事柄を調べたりするのが、とても好きだ。直木賞作品に限った話ではないが、私のこれまでの人生で、文学から得たものはずいぶん多い。

2018年  
5月30日  
水曜日

東田 啓作 教授（環境経済学・国際経済学）

# 経験と選好

経済学部生が経済学の基礎の授業で最初に学ぶものの一つに需要があります。需要曲線の高さは買手の支払許容額を表しています。支払許容額や多くの種類の財の中からの財をいくつ買うかといった意思決定は、買手の選好（好み）を反映しています。基礎的なミクロ経済学では、通常この選好は所与とされません。選好の変化によって需要曲線がシフトすることは学習しますが、選好がどのような要因に影響を受けてどの程度変化するかといったトピックは登場しません。

ところが、人の好みは時とともに変化します。経済学には経験と人の選好の関係を研究する分野があります。経済実験と呼ばれる手法を用いて人々の選好を抽出し、経験がその選好を変化させたかどうかを分析するのです。

経済学者が注目する選好には、リスク選好、時間選好、利他性、競争選好などがあります。私が研究を続けてきている環境・資源経済学の分野でもこれらの選好は重要です。例えば時間選好は、将来の利得に比べて現在の利得を重要視する程度です。森林、さかなといった再生可能資源の利用を考えてみると分かりやすいです。今日伐採する（漁獲する）木（さかな）を少し我慢すれば、次世代の木（さかな）が育ち、長期にわたって利用し続けることができます。

基礎的なミクロ経済学では自己の利得を最大にするための選択をする経済主体を想定しますが、時に人は自分の損失を覚悟のうえで他者の利得を増やすような意思決定をします。このような行動は利他的な行動と言われます。途上国の貧しい村落

では、森林や水などのその地域の資源への依存度がとても高いです。集落の他の人々のことを考えて過剰な資源の利用を抑制しているケースがしばしばみられます。

世界中の様々な国・地域で経済実験が行われてきていますが、その一部は経験が人の選好や行動に与える影響を分析しています。Voors et al. (2012, *Violent conflict and behavior: A field experiment in Burundi, American Economic Review* 102, 941-964) は、ブルンジの内戦前後の変化に着目し、暴力（襲撃・虐殺）を経験していない人々に比べて経験した人々は、リスク選好が強く近視眼的である一方、近隣住民への利他性が強いことを明らかにしています。Pediger et al. (2014, *Resource scarcity and antisocial behavior, Journal of Public*

*Economics* 119, 19) は、ナミビアの牧畜家を対象とした実験によって、資源量が少ない状態を経験すればするほど人は協力的ではなくなることで、厳密には他者の利得を減らすような行動をすることを明らかにしています。

このような選好の変化は多様です。災害や資源枯渇などの経験をした人々の選好の変化を明らかにすることで、制度をどのように作り変えていけばよいかを考えることができます。資源利用の例でいえば、資源の持続的な利用を実現するための方策が見えてくるのです。

2018年  
6月4日  
月曜日

藤原 憲二 教授 (国際経済学)

# 国際政治のトリレンマ

保護主義が再び台頭している。その根拠としてしばしば引用されるのがダニ・ロドリックの国際政治のトリレンマである。その主張とはグローバルゼーション、国家主権、民主主義の3つは両立できず、どれか2つを選べばもう1つは必ず諦めなければならないというものである。彼の主張には頷ける点もあるが、以下の点で疑問があるので本稿で問題提起する。

1. トリレンマは叙述的に述べられるにとどまり理論的にも実証的にも証明されていない。彼は自由な国際資本移動、独立な金融政策、固定相場制の3つは両立しないという国際金融のトリレンマからの類推で国際政治のトリレンマが成立するといえるがそれは大きな飛躍である。国際金融のトリレンマの自由な国際資本移動と独立な金融政策が彼のトリレ

ンマのグローバルゼーションと国家主権に一応対応すると考えられ、これらの類似は分からなくもない。だがそうすると国際金融のトリレンマの固定相場制が彼のトリレンマの民主主義に対応するが、固定相場制と民主主義がどういう点で類似するのか。為替相場制度と民主主義には何の関係もない。また国際金融のトリレンマは「国際金融」に関するものであり、それを貿易や直接投資を含むグローバルゼーション全般に拡大解釈していいのか。以上より現時点では仮説の域を出ておらず、理論的・実証的に立証されないうちは砂上の楼閣との批判は免れない。

2. 関税によって財貿易を規制したところで直接投資という代替的な方法で海外進出されるのではないか。

3. 消費者の受ける貿易利益への言及がなく、圧倒的に不利益が強調されている。貿易自由化の最大の利益は全ての国民が以前よりも安く商品を買えることである。また消費者の選択肢が増える、企業がより安い価格で売る、より生産性の高い企業の割合が増えるといった近年の研究成果が無視されている。

4. 保護貿易や資本規制が必要だというのが、一国がそのような近隣弱体化政策を行えば他国も報復措置をとり全ての国が不幸になるという凶人のジレンマになるのではないか。

5. 貿易自由化や資本移動が今よりもはるかに緩かったブレトン・ウッズ体制の時代は高成長だったというが、経済活動が制限されていたことが高成長の原因だったかについて成長会計や厳密な実証分析による検証がない。

6. 貿易自由化で所得の減る人が

いるとき、最も小さなコストでそれを解消するのは所得再分配政策であり保護貿易ではない。ロドリックはこれに対して「Fine in principle (原則はそうだが)と認めながらも「適切な補償でこれらの人も貿易自由化の利益を受けられるのだ」というのは weird way of selling free trade (自由貿易を売り込む奇妙な方法)だ」というがその根拠が分からない。以上思いつくままにグローバルゼーション・パラドックスへの疑問を並べた。経済学を学ぶ皆さんに一度考えてほしい。

■  
1 ロドリックは国際経済学での優れた研究業績を持つ経済学者であり、経済学の理解のない単なる評論家ではないことは明記しておく。

2018年  
6月6日  
水曜日

田中 敦 教授（金融論）

石のコインから  
ビットコインまで

ビットコインなどの仮想通貨が、世間を騒がせています。物々交換から主な商品が貨幣となり、金銀に集約され、やがて商品価値のない紙幣が主流になりました。つぎは「仮想通貨」だなんて、革新的な感じがします。

重さのない仮想通貨とは逆に、重い巨大貨幣として有名なのがヤップ島の石貨です。大きいものは、直径4メートルほどの石の塊です。貨幣ですが、実は儀式など限られた場面です。しか使われておりません。日頃の売買は、貸し借りを台帳に記録することで行われています。石貨は、台帳の代わりに儀式などで使われる代用貨幣なのです。

人類学的发展で分かってきたことですが、人類史上、物々交換が中心だった経済はないそうです。売買で昔から良く使われてきたのは、貸し借りを記録する台帳の制度でした。

BC3000年、人類最初の文明の一つであるメソポタミア文明のシュメール人たちはコインを使っていましたが、それは主に貸し借りを記録する台帳のためでした。つまり、物々交換から商品貨幣が生まれたのではなく、そもそも貨幣とは台帳であり、コインなどはその代用品として使われてきたのが、人類の歴史なのです。

現代では、貨幣は現金と預金です。預金とは、銀行の台帳です。振込みをすると、銀行は支払人の預金台帳にマイナスの金額を書き込み、受取側の銀行は受取人の預金台帳にプラスの金額を書き込むだけです。

もちろん、支払側の銀行は受取側の銀行におカネを渡さなければいけません。これは現金ではなく、銀行が日本銀行にもっている預金で処理されます。つまり日本銀行は、支払

側の銀行の預金台帳にマイナスの金額を記録し、受取側の銀行の預金台帳にプラスの金額を記録するので

す。

現代では現金よりも預金の方が圧倒的に多く使われていて、その預金は台帳です。その台帳ではできない細かい支払いに、現金が代用品として使われているとみることができ

ます。

今話題の「仮想通貨」をみてみましょう。これにはブロックチェーンという分散型台帳技術が使われています。最新ITを駆使しています。要するに台帳なのです。結局、記録する技術は目覚ましく発展しましたが、貨幣が台帳であることはシュメール人たちと何ら変わりありません。

では仮想通貨に革新性がないかというところ、あります。それは「分散型」

で、中央銀行のような全体を管理する中央組織がない点で、これは人類史上前例がないと思われま

す。

長年、貨幣とは目の前に見える商品、金銀、紙だと理解されてきました。しかしそれだけを見ては、貨幣の本質も仮想通貨の革新性も見えてきません。今日のチャペルの聖句にあるように、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ（コリントの信徒への手紙二 第4章18節）ことが、物事の本質を理解するために大切です。

1 マーティン、フェリックス著、遠藤真美訳『21世紀の貨幣論』、東洋経済新報社、2014年、20-21頁。  
2 同書、16-17頁。

3 Orrell, D. and R. Chhapaty. *The Evolution of Money*. Columbia University Press, 2016, pp. 15-17.



2018年  
6月11日  
月曜日

# 『エンゲル係数の動き』

古澄 英男 教授（計量経済学）

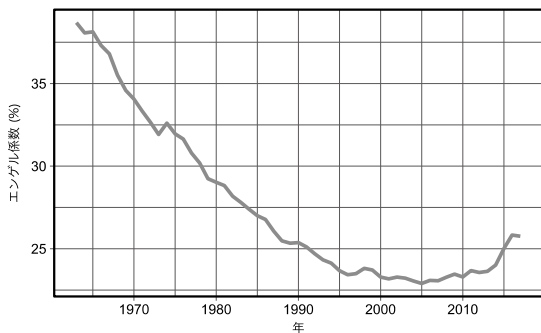
経済学部の学生であれば、「エンゲル係数」という言葉を聞いたことがあるであろう。念のために説明しておく、エンゲル係数とは家計の消費支出に占める飲食費の割合のことであり、エンゲル係数＝ $100 \times$  飲食費／消費支出と定義される。

日常生活をする上で食料や水は必要不可欠であるため、所得水準が低くても食品に対しては一定水準以上の支出をしなければならない。そのため、所得が低い家計では食費が生活費において大きな割合を占めることになり、エンゲル係数が高くなってしまう。一方、所得水準が高い場合には、食費も増加するが、生活にゆとりが出てくるので、嗜好品、耐久消費財、教養・娯楽などへの支出も増え、結果として飲食費の割合が相対的に減少しエンゲル係数は低くなる。以上のことから、エンゲル係

数が高い家計ほど生活が苦しく、逆にエンゲル係数が低い家計ほど生活にゆとりがあると考えられ、エンゲル係数は経済的豊かさや生活水準を表す指標として利用されることがある。

では、日本のエンゲル係数の水準はどれくらいであろうか。エンゲル係数の意味を知っていても、実際の値を知っている人は少ないのではないだろうか。図には、1963年から2017年までの我が国におけるエンゲル係数の推移が示されている（ここでは「家計調査」（総務省統計局）のデータを使って、農林漁家世帯を除く二人以上の世帯のエンゲル係数を計算した）。

図を見ると、1963年にはエンゲル係数は38.7%であったが、年々減少し1979年には30%を下回るまで低下していることがわかる。



図：二人以上の世帯のエンゲル係数の推移（1963年～2017年）

1980年代も引き続きエンゲル係数は減少し、1992年に25%を切り、2005年には22.9%まで低下している。先に説明したように、エンゲル係数は経済的豊かさや生活水準を表しているの、2005年

まで日本は経済的に豊かになってきたと考えることができる。おそらくこの点については、実感と一致していると感じる人は多いであろう。

しかし、2005年を過ぎるとエンゲル係数が上昇傾向に転じており、2015年は25.0%、2016年は25.8%、2017年は25.8%となっている。直近の25.8%というエンゲル係数の水準は、1987年の26.1%とほぼ同じであり、現在の日本の生活水準は30年前に戻ってしまったことになる。一体なぜエンゲル係数は最近になって上昇したのであるか。このエンゲル係数の上昇については様々な要因が考えられる。機会があれば、講義のときにでもエンゲル係数が上昇した理由を紹介できたらと考えている。

2018年  
6月13日  
水曜日

経済学は常により賢明な資源配分は出来ないかと問う学問だが、当然ながら正確な答には精緻な分析を要する。経済学者が様々な社会的課題を数学的に表現し、厳密に解こうとするのはこのためである。勿論、日常生活の様々な判断の場で我々はその都度厳密に数学的問題を解いているわけではない。とは言え、誰しも限られた収入や時間の配分という問題を抱え、より良い答えを求めている。

全能の神とは違い、人はしばしば誤った判断を下す。しかし、もしその誤りに規則性があるなら、それを活かす事は可能だ。同じ間違いを繰り返す人がその事を自覚して行動すれば、それ以上無駄に同じ間違いを繰り返す事は避けられよう。大きな文脈では、人間が戦争や殺戮を繰り返してきた歴史から学び、同じ悲劇を回避するよう意思決定に活かすこ

藤井 英次 教授（国際金融論）

# バイアス（偏り）…人間の判断が抱える厄介なもの

とには大きな意義がある。

心理学の要素を取り入れた行動経済学の発展が近年目覚ましいが、その成果に「人間の意思決定には様々なバイアスが伴う」という知見がある。バイアスとは偏りであり、ランダムな誤りとは違い規則性を持つ。例えば、自分の能力を過信しては失敗を繰り返す人は単に見誤るのではなく、いつも過大評価をしているわけだ。

話は変わるが、ヘンリー・マーシウ著「脳外科医マーシウの告白」に感銘を受けた。英国を代表する脳神経外科医が自らの失敗も含めた医療現場の真実を曝け出し、医師の抱える苦悩や葛藤を真摯に綴った。優れた手術実績を誇る外科医をマスコミはよく「神の手」と言うような言葉で飾り立てる。しかしマーシウ氏は「本当に手術をすべきか、するならいつ

どこまですべきか、どれ程のリスクは許容されるか」という、手術に至る前の判断にこそ真の難しさがあると語る。そして心理学や行動経済学の知見に学び、人間の判断にはバイアスが付き纏うことを重く見る。（因みにマーシウ氏はオックスフォード大学で経済学と哲学を学んだ後に医学の道を志した。）

例えば「手術をしてこそ」という外科医の矜持が、手術をすべきでない患者にまで危険な手術を施す方向に判断を歪ませることの代償について自身の苦い体験を赤裸々に語っている。僅かな判断ミスが途轍もない悲劇を招く、そんな重圧の下で長年黙々と人と命に向き合ってきた医師の告白は静謐で深い示唆に富み、静かな感動を呼ぶ。

歪んだ判断は避けたいが、厄介な事に人は「後知恵バイアス」を持つ。

物事が起こってから辻褃の合うように適当にストーリーを作って正当化してしまう傾向だ。試合や選挙の結果、市場の動きなど、起こった事を観察した後に人間の脳は過去の出来事を組立て直し、それが当たり前だったかのような筋書きを勝手に作り出す。同じ失敗を繰り返しても、その都度正当化する筋書や理由付けをしていたのでは進歩は望めまい。

人間は誰しも不完全で、愚かなものでもある。だが諦めることはない。次に何かの衝動に駆られた際は一度立ち止まり、「ちょっと待てよ、前もこれで同じ失敗をしなかったか」と問うてみよう。人間は完全に合理的ではないし、間違っただけではない。しかし、もし誤った判断に規則性があるなら、それを活かすことで自分の可能性を広げることができるかもしれない。

2018年  
6月19日  
火曜日

# 人間関係をゲーム理論的に考える

猪野 弘明 准教授（産業組織論）

米朝会談後6月12日に、米大統領のドナルド・トランプ氏は「戦争は誰でもできるが、最も勇気ある者だけが平和をもたらすことができる」と述べました。この言葉には「勇気をもって核を放棄せよ、さもなければ戦争するぞ」というビジネスの世界に生きてきたトランプ大統領らしい戦略的なメッセージが込められていたとも解釈できます。このように、強く出て相手の譲歩を誘う行動は、投資戦略では「Top Dog戦略」として知られています。人間関係で考えるなら、勝ち誇った怖い犬のような人を思い浮かべてください。このような戦略は、相手にとってタフなキャラクターとして定着しているならうまく働くかもしれませんが、それだけで常に大丈夫でしょうか。

Top Dogのネーミングは投資戦略をゲーム理論的に分類したジャン・

ティロールとドリュール・フューデンバーグの論文（前者は2014年ノーベル賞受賞）に由来しています。実は、この論文では、各種状況下でどのような戦略が最適かを分析し、「Top Dogを含め4つの戦略の類型があることを数学的に示しています」。

その分析によると、「Top Dog戦略がうまくいくのは、過剰にタフになり競争優位に立つことで得をする構造にあるからです。そして、そのような行動が優位をもたらすのは、攻撃的になれば譲る（逆に受容的になればつけあがる）相手だからです。このように相手が逆の反応をする戦略環境のことを、ゲーム理論では「戦略的代替」と呼びます。つまり「Top Dog戦略がうまくいくには二つの要素が裏にあることが分かります。第一に行動の種類がタフであること、

第二に環境が戦略的代替であることです」。

このため、これら二つの要素の組み合わせで2×2＝4種類に状況を分類でき、各々に最適な戦略が発生するのです。例えば、「Top Dogの真逆の状況として、行動の種類がソフトかつ環境が戦略的補完である場合には、最適戦略は「Puppy Dog戦略」となります。太って満ち足りた猫のような人を思い浮かべてください。「戦略的補完」とは、代替とは逆に、相手と同じ反応をする戦略環境のことです。このような場合は受容には受容で応えてくれる（逆に攻撃には攻撃を返してくる）相手なので、過剰にソフトになって競争を緩和することを得になるといってわけです。

同様に考えると、同じ反応をする相手（戦略的補完）にはタフな行動は過少にするのが得で、「Puppy Dog

戦略といえます。かわいくてあざとい犬のようなキャラクターです。また、逆の反応をする相手（戦略的代替）にはソフトな行動は過少にするのが得で、「Lean & Hungry戦略」といいます。これは、痩せて危険そうな狼をイメージすると理解しやすいでしょう。

ゲーム理論的に人間関係を解釈しても、「Top Dog一辺倒ではなく、可能ならば状況によって使い分けるほうが賢いようです」。

Fudenberg, D. and Tirole, J. "The fat-cat effect, the puppy-dog ploy, and the lean and hungry look" *American Economic Review*, 74(2), pp.361-366, 1984.

2018年  
6月25日  
月曜日

# 幼児教育無償化を考える

田畑 顕 教授（経済成長論・公共経済学）

政府は2019年10月からの幼児教育・保育の無償化の全面実施を目指す。①3～5歳児については、原則全世帯の幼稚園、認可保育所等に要する費用を無償化すること、②0～2歳児も当面、住民税非課税世帯を対象に無償化すること、の2つを決定している。3～5歳で幼稚園や保育園に通う約250万人のうち、低所得世帯向けにはすでに平均保育料を出す方式で無償化を実施している。よって新たに無償化の対象になる子どもは、中高所得世帯を中心に200万人規模となる。教育を受けることで生涯賃金が高くなるという私的な便益だけでなく、教育を受けた本人以外にもたらされる社会的な便益（投票率の上昇、犯罪率の低下など）が存在する。教育投資によって子供が将来的に得る収入がどれだけ高くなるかを表す収益率を

教育段階別に計測すると、就学前教育の収益率は、高等教育のそれを上回る。また、小学校低学年の時点ですでに親の社会的地位による子供の学習意欲、学習時間、学力水準に格差が生じており、親の社会的地位による格差が生じており、親の社会的地位による格差が生じる前に、質の高い就学前教育によって、すべての子供に「意欲」や「努力」することができる力の種を与えることが、教育格差や貧困の「世代間連鎖」を防ぐ上で重要だという認識が専門家の間で高まっている。こうした理由により国がもつと就学前教育に投資をしていく必要があるという点に異論はない。しかし世帯所得に関わらず一律に無償化する形で就学前教育の「需要側」に働きかける政策を行うことには賛成できない。なぜなら一律に無償化を行えば、経済的に余裕のある家庭は、無償化によって実

質的に得られた追加的な収入を、塾や習い事などの子供の教育にそのまま回すが、そうでない家庭は、その一部を生活費や将来の貯蓄に回さざるを得ず、親の社会的地位による教育格差をますます広げてしまう結果になりかねないからである。今回の無償化政策により新たに恩恵を受けるのは中高所得世帯のみであるので、子供の教育格差の拡大はなおさら避けられないだろう。むしろ格差は正の観点からは一律に無償化するのではなく、各家庭の所得や資産に応じて保育料・授業料を設定するような応能負担の制度を強化する方が望ましい。また「待機児童問題」が示すように、就学前教育の供給側は質・量ともに投資が十分とは言えない状況にある。海外の研究では保育の「質」が高い保育園で養育された子どもは、就学後の学力が高く、

学歴や就業にもプラスの影響があることが明らかになっている。無償化による需要増は、待機児童問題や保育士の労働環境の悪化を通じ、保育の質を低下させ、子どもたちの長期的な発育への悪影響も懸念される。これらのことを考慮すると、保育の「質」を保ちつつ「量」を増やすためには何をすべきなのかという点について議論を深め、就学前教育の「供給側」の充実を測るような政策に取り組んでいくことがより重要である。

1 以下の議論は中室 牧子（2017）「教育無償化は格差を広げる愚策だ」（『文藝春秋』2017年8月号所収）を参照した。

2018年  
6月26日  
火曜日

以前、担当する「経済の歴史と思想」の授業でこんな話をしました。産業革命期のイギリスでは、政府が効率的に税金を徴収するシステムを構築し、低い金利で国債を買ってもらうことができたのに対して、フランスでは、革命政府が王政時代の債務の不履行を宣言したため、その後高金利を負担しないとフランス政府は国債を買ってもらえず、軍事の天才と謳われたナポレオンの敗走の遠因となった、という話です。ここでのポイントは、信用格付けの高い国は低金利で資金調達できるが、格付けの低い国は高い金利を払ってはじめて資金調達できる、ということ。授業では、「皆さんもそうです。ちゃんと返してくれそうなら相手なら安い金利でいいだろうけど、ひよっとしたら返せなさそうだという相手には、そのリスクを相殺する程度の高い金利を要求するで

久保 真 教授（経済学史）

# 市場の論理と相対の倫理

あいたい

しょ」と言ったのです。が、授業後に回収したコメントペーパーの中には、こんなコメントがありました。

「返せないこともあるくらい相手が困っているのなら、むしろ金利を安くしてあげるのではないか」というのです。はっとさせられました。というのも、私が、「市場の論理」とでもいえるような行動原理を暗黙のうちに前提としていたことに気がかされたからです。

「市場の論理」というのはこういうことです。国債を販売している市場（例えば、ネット証券のサイト）を訪れたとしましょう。そこでは、財政状況のよい国と悪い国、二つの国の国債（同じ通貨建て）が売られていて、どちらかを選べます。もし金利が同じなら、当然あなたは財政状況がよい国の国債を選んで買おうでしょう。別の言い方をすると、財政状況の悪い方の国は、もっと高い金

利を提示しないと選んでもらえないということ。これが、先の「市場の論理」です。

他方、コメントが想定する状況はどのようなものでしょうか。困窮している親友から金を貸してくれと言われたとしたら、「利子なんていいから、とりあえずこれでおいしいもの食べて、元気出せよ」と言ってお金を貸すかも知れません。逆に、「君は財政状況が極めて悪化しているから、債務不履行を行う可能性が高い。従って、そのリスクを相殺するくらいの高い金利を約束してくれないと、君にはお金を貸せないね」とは言わないでしょう。それは相手が親友だからです。これを「相対の倫理」と呼んでおきます。

さて、我々が暮らしている社会は別名市場経済とも呼ばれるように、人々は多くの場面で「市場の論理」でもって行動します。経済学は、こ

うした行動を活写して、その結果効率的な結果が往々にしてもたらされることを主張します。他方で、「相対の倫理」は随所で重要な役割を演じていることも事実ですが、経済学にはあまり出てきません。とすれば、経済学は「相対の倫理」を不要だと主張しているのでしょうか。そうではないと私は考えます。「相対の倫理」に依拠して同様の結果を再現しようとしたら、あまりにも大きな期待を「相対の倫理」にかけてしまうことになるだろう、ということ、別言すれば、「相対の倫理」というものがとても稀少な資源だ、ということだと思ふのです。こうした点を改めて考えさせてくれた上記の学生さんは、経済学を学ぶ上で大きな資質を持っていると、改めて感じ入った次第です。

2018年  
6月27日  
水曜日

桑原 秀史 教授（産業組織論・公共経済学）

# 近世の流通システムと 産業組織について

歴史は継続し、変化は積み重ねられる。近世の思想について、司馬遼太郎の『この国のかたち』のなかに、興味ふかいくだりがある。そのエッセンスの部分を示すと、「幕末攘夷思想は、革命の実践面ではナショナリズムという可燃性の高い土俗感情に火をつけてまわることである。（中略）ナショナリズムは、本来、しずかに眠らせておくべきものなのである。わざわざこれに火をつけまわるというのは、よほど高度の政治的意図から出る操作というべきで、歴史は、何度もこの手でゆさぶられ、一国一民族は潰滅してしまうという多くの例を遺している」。

ところで、尊王攘夷というのでもまた、13、4世紀ごろの輸入思想であることを思わねばならない。阿部正弘や岩瀬忠震、小栗上野介のようなリーダーはもとより、ほんとうに幕

政を動かし、近代をつくりあげていくのは、大岡忠相、柳沢吉保、間部詮房といった、町・勘定奉行や幕臣たちの能力の聡明さとその堅実さではなかるうか。

機会に、近世の流通システムや産業組織について、「ひとと経済」というテーマで、一考したい。近世の本体は江戸幕府の治世にある。幕府は徳川氏の全国統治の覇府であり、実質は大領主が土地と人民を支配する大名領知制に基づいているといつてよからう。武士は家臣団となり、土地と人民は検地と兵農分離により、領主の権力のもとで支配され、武家経済を負担する。諸大名の領地は恩賜とし、その代わりに軍役その他の忠誠を尽くさせるものである。おそらくこれらの支配体制が確立したのは、慶長から元和をへて寛永にわたる期間であると思われる。幕府

では、吟味筋については奉行代官が、出入筋は物的担保等の訴人を支配し、訴を受理奉行が裁判権をもち、やがて上級の評定所管轄となり公儀体系のなかに収斂する。近代における市場メカニズムの運用の姿勢が、日本の商慣行と道徳、司法の側面に表れている。

年貢の徴収方法は江戸期を通じて変化する。大名は所領が与えられることで安堵が保障され、そのかわりに軍役や普請役が課されるが、原則として年貢は賦課されない。しかし享保7年の上米制は大名からの米や貨幣の上納を恒常化し、さらに同5年に始められた関東・畿内主要河川普請に対する国役制は私領農村から賦課金を幕府勘定所へ徴収する途を開くことになる。制度や法のなかに、たくみなインセンティブ・メカニズムを内包している。一方、知行

所、給知についてみれば、江戸中期以降、御家人の大部分は蔵米をうけている。幕府の貢租制度は、検見法から定免法へ、そして検見法でも畝引検見から有毛検見へと転換する。展開形ゲームのバックワード・インダクションでもある。

古文書等の史料によりながら、流通や産業組織の研究成果から、制度の生成と発展や行動メカニズムについて、新しい分析の光をあてることは、今後の日本経済の実理においても有益である。宿駅と酒造の経済的機能や、商取引契約の履行メカニズムなどについて、経済と政治および文化の創造的な特性を浮かび上げることができよう。

2018年  
7月3日  
火曜日

國枝 卓真 准教授（マクロ経済学）

# 遺伝子の多様性と経済発展

Thomas Lubikという経済学者がいる。この人が私の大学時代の友人に瓜二つで、顔から、話ぶり、身ごなし、まさにそっくりなのである。西洋人と東洋人が何故これほど似ているのか。

自然人類学にアフリカ単一起源説という学説がある。それによれば、現生人類は約20万年前に東アフリカで誕生し、そこから約6万年後、アフリカを飛び出した人類は、現在のイスラエルあたりから西のヨーロッパに向かうものとユーラシア大陸の東に向かうものとに分かれ、ユーラシア大陸の東に向かったものは、アリューシヤン列島から北米大陸に渡り、南米大陸まで子孫から子孫へと何万年という旅をして世界に拡散していったと考えられている。Thomas Lubikと私の友人は何故瓜二つなのか。もしかしたら、アフリ

カを出たある集団がイスラエル辺りまで来て、そこで双子が生まれて成長し、兄は東へ弟は西へと別れていったのかもしれない。

さて、アフリカ単一起源説を応用して現代の国家間の所得格差を説明しようとした研究に、Quantril AshrafとOded Galorのものがあ。世界には、一人当たりの年間所得が一千万円を超える国もあれば、十万円以下の国々もある。最近、研究者たちは、大昔に起きたことが現代の所得格差に大きな衝撃を与えているのではないかと考えるようになってきた。その文脈の中で、AshrafとGalorは人類の起源まで遡ってその格差を説明しようとした。

現生人類が誕生してアフリカで暮らしていた頃は、集団として保有する遺伝子は多様であったが、集団の中からある集団が他の地域に飛び出

す時に、元の集団が保有する遺伝子の種類より少ない種類の遺伝子が持ち出される。すると、アフリカからの距離が近いほうが集団の保有する遺伝子が多様で、アフリカから離れると集団の保有する遺伝子は同質的になる。実際に、遺伝子の多様性とアフリカからの距離には負の相関があることが確かめられている。

AshrafとGalorは、人類がアフリカから歩いた距離を遺伝子の同質性の代理変数として、遺伝子の多様性と一人当たりの年間所得の関係を分析した。彼らは、遺伝子の多様性が高すぎるか低すぎる場合には一人当たりの所得は低くなる一方で、遺伝子の多様性が中程度の場合は高くなるという結果を得た。遺伝子の多様性が高い地域は人類の故郷、アフリカ。この地域では、現在でも低所得や紛争に苦しんでいる。遺伝子が同

質的な地域は中南米で、ヨーロッパからの入植者の影響を考慮に入れたとしても、高所得にはなりにくいという結果を得ている。また、遺伝子の多様性が中程度の西ヨーロッパや日本、ヨーロッパから多くの入植者が定住して社会を形成した北アメリカなどは高所得になるとのことだ。

AshrafとGalorの研究は、一部の自然人類学者からは大変批判され、物議を醸し出した。物議を醸し出した理由は、歴史上の問題も大きく関わっていると思う。興味があれば、自然人類学者の批判とそれに対する彼らの返答を調べてみると勉強になる。

参考文献：

Ashraf, Q., Galor, O. (2013) The Out of Africa Hypothesis, Human Genetic Diversity, and Comparative Economic Development. *American Economic Review* 103(1), pp. 1-46.

2018年  
7月4日  
水曜日

原田 哲史 教授（文化と社会の経済学・経済哲学）

## いまアダム・スミスの『道徳感情論』（一七五九年）が面白い！

つもより熱が入った。

二〇一八年五月の末（5/21）学会でドイツに行っていたその間、あの日大の選手による悪質タックルの問題が大きく報道され、それへの非難の声が急速に全国に広まっていき、関学側からの抗議と真相究明の要求が正当なものとして支持されていった。日本を発つ前はその発端であったが、ドイツ滞在中にもインターネット上でのタックルの動画を見ることができ、あれよあれよという間に、こうしたフェアプレーを汚す行為が広範な人々に観察されて、非難の世論が形成されていったのである。帰国したときには、世論はほぼ確定していた。

さて、帰国後の初日の講義が「経済の歴史と思想」「社会思想史」で、いずれも経済学の本格的な確立者アダム・スミス（一七二三〜九〇年）を扱う日だった。いつものようにスミスの思想を彼の最初の著作『道徳感情論』について引用とともに説明するところから始めるのだが、その日は、次の箇所の話をするとき、い

つもより熱が入った。「富と名譽と出世をめざす競争において、彼はすべての競争者を追い抜くために、できる限り力走してもいいし、あらゆる神経、あらゆる筋肉を緊張させていい。しかし、彼がもし競争相手のうちの誰かを押しのかたり投げ倒したりするならば、観察者たち *spectators* の寛容は完全に終了する。それはフェアプレーの侵犯 *violation of fair play* であって、観察者たちが許しえないことなのである。このやられた相手も——観察者たちからすれば——あらゆる点で彼と同じ程度に善良なのであり、だから観察者たちは、これほど極端に自分を優先する彼の自愛心 *self-love* に共感できないのである。」（水田訳・岩波文庫（上）、二一七〜二一八頁）

これは、まさに悪質タックル問題をめぐる社会的追及プロセスそのものではないか！ スミスは二五〇年以上前に、そのことを指摘している!! スミスが生涯出した本は『道徳感情論』（一七五九年）と『国富論』（一七七六年）のふたつだけであり、前者はいわば社会心理学の書であって、『国富論』の人間学的な基礎をなす。近代社会になって人間が自己愛・利己心から出発して行動することは否定できない事実であるどころか、むしろその進歩的な側面に目を向けていくべきであるが、同時に、人間の利己心が過度になるのを相互の社会関係のなかで抑制・緩和できるメカニズムを認識していかなければならない、というのがスミスの一貫したテーマであった。自由主義者スミスはつねに、その抑制メカニズムを強権的な圧力にはなく、普通の人間同士のやり取りのなかに見出そうとした。



2018年  
11月12日  
月曜日

利光 強 教授 (国際経済学)

# ホモ・エコノミカスとホモ・レシプロカンス

最初に、実験経済学や行動経済学で示された二つの事例をお話しします。一つ目は、ある託児所では子供の迎えに遅刻する保護者達に少額の罰金を課したところ、結果的に遅刻する保護者達が増えてしまいました。もう一つは、ビニール製のレジ袋に少額の課税をしたところ、大幅にビニール製のレジ袋の利用者が減少しました。ともに、対象者にとっては罰金や課税という金銭的な負担増になるにもかかわらず、一つ目の事例で期待とは反対の結果をもたらすことになったのはなぜでしょうか。いわゆる、新古典派(主流派)経済学におけるホモ・エコノミカス(合理的な経済人)であれば、遅刻者が減少するはずですが、ここには遅刻者にとって、罰金が託児所への超過料金として理解されてしまったのではないのでしょうか。つまり、金銭的なインセンティブがモラルや認識を変えてしまったのです。アダム・スミスを持ち出すまでも

なく、市場メカニズムが有効に働けば、強欲(利己的行動)が公益をもたらすことがあります。したがって、人々の認識や嗜好がホモ・エコノミカスのように社会のルールやモラルとは独立に内在しているならば、経済的な仕組みとしてインセンティブが取り入れられると、有効な選択を行い、社会全体が効率的になるはずですが、しかしながら、先ほどの事例では、罰金と言うインセンティブが人々の認識や嗜好に影響を与えてしまったこととなります。専門的に言えば、嗜好や嗜好は状況依存的であり、内生的と言えます。したがって、社会的な状況から影響を受けることとなります。さらに言えば、インセンティブとモラル(あるいは、社会的嗜好)は分離可能ではなく、相互に作用しあい、相乗効果を持つのではないのでしょうか。

さて、もう一方の事例では、期待通り、課税によってビニール製のレジ袋が減少しました。これは環境に

対する配慮がしっかりと人々の認識や嗜好を形成していたと言えるかもしれませぬ。そのことは環境問題に関する公共の宣伝や教育、等の効果もあるかも知れませぬ。さらに言えば、そうした公共心が培われた社会においては、人々の行為が利己的な利益に影響をもたらす金銭的なインセンティブや市場メカニズムだけでなく、一定の互恵性や条件付きの協調性にも影響を与えていると考えることは不自然ではないと思います。それを「ホモ・レシプロカンス」と名付けるとすれば、主流派経済学ではこうした人間のあり方を捨象し、方法的にはあれ、ホモ・エコノミカスを基礎に理論体系を構築してきたことは、自己都合的なものでしかなく、理論的な作業における怠慢と言えるでしょう。

これから我々は、ホモ・エコノミカスを前提とした「狭義の経済学」ではなく、さまざまな社会科学の考え方を取り込んだ「幅の広い経済学」、すなわちインセンティブと社会的嗜好をともに包含するような「広義の人間(ホモ・レシプロカンス)を出発点とした経済学」を構築していく必要があると考えます。まさに、「経済学」とは「人間学」であり、したがって、「経済学を考える」ことは、今回のシリーズ・チャペルのテーマである「人間を考える」ことであると思います。

なお、今回の講話に関して左記の文献を参考にしました。皆さんもぜひ、一読して下さい。

## 【参考文献】

サミュエル・ポウルズ著(植村、他訳)『モラル・エコノミー インセンティブか善き市民か』(N-T出版、2017年)

ジャン・ティロー著(村井訳)『良き社会のための経済学』(日本経済新聞社、2018年)

小島寛之著『宇沢弘文の数学』(青土社、2018年)

2018年  
11月13日  
火曜日

## 松枝 法道 教授（環境経済学）

# 旧共産圏の横断歩道

今年度は、新しく二つの国を訪れる機会を得た。ベトナムとポーランドという、ともに共産主義に強い関わりを持った国だ。いずれも経済体制は大きく変革してはいるが、いわゆる旧共産圏と言われる国を訪れたのは、10年ほど前に北京を短期訪問して以来のことになる。新しい土地を訪れた時に、街を歩いていて私の関心を引くのは、信号のない横断歩道で車や歩行者がどのように振舞うかということである。私が14、5年前にニュージーランドを訪問した際の苦い体験がその背後にあるのだが、それについては2014年度のエコノフォーラムを見ていただきたい。

周知のとおり、日本ではほとんどのドライバーが横断歩道で一時停止をしない。昨年度卒業したゼミ生たちの調査によれば、都会かそうでないかにかかわらず、ほぼ100%のドライバーが「横断しようとしている、あるいは横断中の歩行者や自転車がいるときは必ず一時停止をす」という道路交通法に違反し続け

ているのが現状だ。

では、ベトナムはどうであろうか？ベトナムの都市を訪れたことがある人ならきつと驚いたに違いないのが、現地の交通事情のカオス的なことだ。車、とくに、バイクの数がおびただしく信号が赤でも交差点にバイクが侵入する光景は当たり前だ。渋滞もひどいので、バイクが平気で歩道を走行する。当然、信号機のない横断歩道などで止まる車はない。これは北京を訪れた際に、青信号になつて皆が通行している横断歩道にも車が突入してくる光景を見て、ここでは交通ルールなんてほとんど意味がないと思つたのと同じ感覚だ。

次に、ポーランドはどうか？ドライバーの運転は非常に荒い。タクシーやバスに乗ると、車の多い街中でも時速100kmものスピードで頻繁に車線変更をしながら走るの冷や汗が出た。ところが、こういうたドライバーが、信号機のない横断歩道では、歩行者がいるとみると急ブレーキをかけてでも一時停止をす

るのだ。日本から来た私は恐る恐る横断歩道を通行するのだが、現地の歩行者は実に堂々と横断歩道を闊歩している。なんとも羨ましい1シーンだった。

このように、場所が変わると、横断歩道に関して両極端な光景が存在しうるのはゲーム理論におけるナッシュ均衡の概念を用いることで説明が可能である。横断歩道については、「歩行者が進む、車が止まる」と「歩行者が止まる、車が進む」という二つの状況がいずれも、相手の行動が変わらない限り誰も自ら行動を変える動機をもたないというナッシュ均衡として社会に定着しうる。

問題は、二つのうちのどちらが実現するかということだが、これについては、相手の行動に対する予想が大きな役割を果たす。日本では歩行者は車が止まらないものという予想を抱き、ポーランドでは車は必ず止まるといふ予想を持っている。逆にドライバーは日本では歩行者が止ま

り、ポーランドでは歩行者が進むという予想を持っている。異なる予想が形成される背景には、歴史的、および、政策的な要因などが考えられるが、いずれにせよ、一度定着した状況を変えるには人々の予想を大幅に変えなければならぬので大変だ。日本の状況をポーランドのようにするには、ドライバーが十分な数の歩行者が法律通り横断歩道を優先通行すると予想する必要があるが、現状において歩行者に車の侵入を恐れず進めと要求するのは酷であろう。何とかして十分な数のドライバーが法律を順守するように仕向けることによって、歩行者が予想を変えるように誘導する方がより現実的ではないだろうか。

新しい土地を訪れると、普段当たり前のものと捉えている社会制度を少し遠目に見直す機会を与えてくれる。旧共産圏の二国を訪れて、久しぶりに「そぞろ神」に取りつかれたように感じている。

2018年  
11月20日  
火曜日

# 大高 博美 教授(言語学)

## 他人の視点にも立ちつゝみる 必要性

本日の講話では、人に良かれと思つて実践する企画・発案の難しさについて話します。結論を先に言うと、「人間」としての思慮を欠いた企画は結果的に大不評を買つてしまふこともあるので、そうならないように私たちは常日頃から自身の人間性に磨きをかけなくてはならないということとです。つまり、ここで必要なことは、他人の視点にも立つて眺め直すという習慣です。

北九州市にあるテーマパーク『スペースワールド』は、2017年度をもつて営業を停止しましたが、その1年前に奇抜な企画を実践しました。「氷の水族館」と銘打ち、スケートリンクでサンマや鯛、キビナゴ、アジ、エビなど25種類の魚5,000匹を氷漬けにしました。足下に氷漬けされた魚を見ながらスケートを楽しむという企画でした。これは、冬

の催し物を決める先の会議で出た「スケートリンクを海のようにして、その上を滑って楽しんでもらう」というアイデアに基づくものでした。

企画の奇抜さは、例年よりも利用者を増やしました。スケートはせず氷漬けされた魚を見るためだけに来園した利用客もいたほどで、特に子供たちには大好評でした。魚を指差して大喜びして、ご満悦だったそうです。そんなわけで、当初は、特に批判的な反応はありませんでした。

しかし間もなくして様相が変わります。山口県の民放ローカル番組で「氷の水族館」が紹介されると、ネットやSNSで批判が殺到したのです。「残酷だ」「命を粗末にするものではない」「食べ物で遊ぶな」などです。中には「日本の恥」といったものまでありました。この突如の「炎

上」に、営業の総支配人はその夜のうちに企画の中止を決めました。

この企画の何が問題だったかを的確に理論的に説明できる人はいるでしょうか。残酷だからというなら、昆虫採集の標本はどうでしょう？ 私たちは動物をペットと称し監禁するし、オシャレのために毛皮を纏ったり、生活のためとして革で靴やカバンを作ります。何よりも、毎日膨大な量の動物性食品を無駄にしているではありませんか。このような状況で、誰がスペースワールドに「魚がかわいそうじゃないか」と言えるのでしょうか？

では、なぜ多くの人がこの一件から不快を感じ取ったのでしょうか？ 鹿児島大学総合研究博物館長の本村浩之教授(魚類分類学)は、「死んだ魚の上を滑るといふ冒瀆的な行為に多くの人が違和感を感じたのだろ

う」と分析しています。私も同感で、理解への鍵となるのは「冒瀆」です。たとえ魚の死骸でも、さらにその上に氷が張られていたとしても、私たちの倫理観では、死骸を跨いだり死骸を踏みつけることは許し難いのです。

この一件は、日本史における踏み絵を思い出させてくれます。私たちは、キリスト教徒にイエス・キリストや聖母マリアの絵を踏ませるといふ行為がどれほど非道であったかを知っています。だから魚を氷漬けにしたスケートリンクから多くの人が嫌悪感を抱いたのかもしれない。人を楽しませよう、喜ばせようとする意図に基づく企画は、勿論、価値のある賞賛されるべき行為です。しかし重要なことは、それは人間としての思慮を欠いたものであってはいけないということです。■

2018年  
11月21日  
水曜日

# 自炊の価値

田村 翔平 専任講師（メカニズムデザイン理論）

様々なものの利便性が高い今日の社会において、私たちは必ずしも食事のために自炊、すなわち自分で食材を調達し調理を行うことをしなく

てよい。実際、私たちの周りには多くの飲食店がありそこで気軽に食事をするのができ、またスーパーマーケットやコンビニエンスストアではすぐに食べるのできる弁当や惣菜が日常的に販売されている。

さらに近年はUber Eats等の新形態の宅配サービスの登場により一歩も外出せずに食事をするこの利便性も飛躍的に増している。自炊と代替関係にあるこれらの便利なサービスは忙しい現代人にとってもはや必要不可欠な存在だ。一方、自炊は現在も人間の生活の営みに存在し続けているものの、極論を言えば今日の利便性の高い社会では自炊を一切せずに生命を維持することも可能であ

る。現代社会において自炊にはどのような価値があるだろうか。

自炊の価値を経済学的に考える一つの方法は、自炊により生じる便益と費用を天秤にかける費用便益分析を適用することである。便益には例えば、食費の節約が期待できると、使用する食材や調味料等を自由に選べること、塩分や油分の量を調整しやすいこと等が挙げられる。一方、費用にあたるものは自炊の機会費用である。ここでの機会費用とは、自炊に費やす時間や体力を仮に仕事や余暇等の他の活動に充てた場合に得られる所得や満足度等のことである。これらは自炊と同時に得ることができないため、自炊を選択すると得られる機会が失われるということだ。なお他の活動には無論外食も含まれる。調理が得意でない人にとっては自炊よりも外食のほうが満

足度の高い食事が取れると考えられることから、そのような人にとってのは外食と自炊の満足度の差も自炊の機会費用に計上される。費用便益分析は以上のような議論を踏まえたうえで、自炊に際して便益が費用を上回る場合は自炊を、費用が便益を上回る場合は外食を選択することが望ましいと結論付ける。

上記の費用便益分析からは一つの疑問が浮かぶ。それは自炊という行為自体に何らかの価値はあるだろうか、ということである。ここではそのような議論の例として、自炊が心地良い日常を過ごすための生活リズムを形成し得るといふ議論を紹介したい。料理研究家の土井善晴氏は著書『一汁一菜でよいという提案』において、一汁一菜でもよいので料理を毎日続けて習慣にすることで、暮らしにおいて大切な自分自身の心の

置き場、心地よい場所に帰ってくる生活のリズムを作ることができる。日々変化の多い現代社会に生きていくからこそ、自炊という日常の変わらない作業に安心を覚えることができるということである。確かに筆者自身も、出張先や旅行先から自宅に戻り自炊を再開する際に日常へ戻ることの安心を実感することがある。以上のような価値を先述の費用便益分析において考慮することは決して無駄ではないだろう。しかし重要なことは、このような価値も時代や社会とともに変化し得るといふことである。その時々において適切な価値とは何かを考えることが重要だ。

2018年  
11月26日  
月曜日

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

舟木 讓 教授 (キリスト教・宗教哲学)

# 本当に「敵」を愛するのはできるのか

様性に満ちた国際化が進められる条件が整ってきたと言えよう。

人々、自らにとって不利益をもたらしたり、負担を強いったり、あるいは性格や好み合わない人が必ず存在している。そうした身近な関係をとつても自らに対して、様々な形で「不利益」な状態をもたらす人を「愛する」ことは不可能であり、あるいは「愛敵」とは、自らの思いに正直でない「偽善」であると考えても不思議ではない。

か。国家・民族・宗教という大きな枠組みも、それを組織し、営んでいるのは人間である。そしてその人間の本質は何かというと、「不完全」な存在であることに改めて気づくはずである。常に完全無欠な行動と判断を行う人は、当たり前であるが存在はせず、常により良い社会のあり方、人間のあり方を様々な性格や個性、能力をもった人々が時に共感し、時に反発を覚えながらも共に協力し、歩んでいるのが人間や社会の端的な現実である。

「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

冷静にそうした私たちの身の回りの現実や経験に立ち返る時、全く不可能な教えをイエスが語ったのか、あるいは現実には実行不可能な高邁な「理想」を単に掲げたにすぎないのかという疑問が湧いてくる。

そして、私たちは相手の存在を「敵」とみなして断罪する資格を本来有していないことを繰り返し謙虚に思い続けることが人間の最低限のたしなみである、ということを伝えるのが「愛敵」の教えであり、現在最も重要な視点ではないだろうか。

インターネットの普及、SNS等により時間や場所を問わずに情報を発信することが可能となり、また自動翻訳機の急速な進歩に伴い言葉の壁も取り除かれようとしている現在、ますます多様な人々・価値観と密接に関係することとなっている。私たちがこれまで様々な形で隔ててきた多くの壁が取り除かれ、より多

く、日常の歩みの中で出会う多くの人々との関係をとつても、苦手な

か。国家・民族・宗教という大きな枠組みも、それを組織し、営んでいるのは人間である。そしてその人間の本質は何かというと、「不完全」な存在であることに改めて気づくはずである。常に完全無欠な行動と判断を行う人は、当たり前であるが存在はせず、常により良い社会のあり方、人間のあり方を様々な性格や個性、能力をもった人々が時に共感し、時に反発を覚えながらも共に協力し、歩んでいるのが人間や社会の端的な現実である。

2018年  
11月28日  
水曜日

# 人間とAIを考える

山鹿 久木 教授 (都市経済学)

交差点で信号待ちをしていると、角にたばこ屋があり、中からジャージ姿のおじさん(店主)が出てきて、ガラガラつとシャッターを開けてどこかへ行きました。店じまいにはまだ早い時間帯、店を閉めてどこかへ遊びに行くのかなあ、最近はたばこもコンビニで売れるから暇なんかなあ、なんてことを考えて見ていました。

関西学院大学では、日本IBMと共同開発した「AI活用人材育成プログラム」という一連の科目が2019年度より開講されます。先日、これに関連して、IBMの開発者の方の大変興味深いお話を聞く機会がありました。たばこ屋をみながらそれをふと思いつきました。

AIは私たちの生活のいろいろなところに入ってきています。たとえば、製品やサービスのWebからの問い合わせにチャットで答えてくれ

るシステム、回答者はAIです。関西学院大学のキャリアセンターにも、質問に答えてくれるAI、「チャットボット」がいます。いつでもどこからでも質問ができ、答えがすぐに返ってきます。もちろん、少し複雑な質問になると、人間が相手をする部署へ回されますが、以前の時差を利用して日本が夜になったら他国へ受付を移していた時代からすれば大幅なコスト削減になっているでしょう。

大きくAIには3つの学習タイプがあります。「教師あり」型、「教師なし」型、「強化」型です。「教師あり」とは、教師(人間)が情報と答えをAIに学習させることが必要で、犬の写真100枚、猫の写真100枚を人が見せて覚えさせると、AIは新しい1枚の写真を犬か猫か確率で判断します。「教師なし」とは、膨大なデータ

をAIが答えを教えるもらうことなく学習します。犬か猫かの例でいえば、膨大なインターネット上のさまざまな動物の画像データから、猫っぽいもの、犬っぽいものなど、特徴を自ら判断して分類していきます。あらゆる情報が電子化されている今、AIは情報収集に困ることはなく、簡単に自ら学習することができ

ます。最後が「強化」型です。報酬が与えられると、それをより多く得るためにはどうすればよいのかをAIが試行錯誤します。ロボットの歩行を考える場合、「できるだけ長い距離を歩く」ことを報酬として与えると、ロボットは自分でその報酬を得るために、いろいろな動作を試行錯誤して状況に応じてより長く歩かために進み始めます。手足の出し方をいちいち命令(プログラム)する必要がないのです。この場合、もはや

人間はロボットがどうやって長距離を歩いたのかがわかりません。有名なAIとしては、囲碁などに応用されて、勝つことを報酬とするだけで、強敵を打ち負かしています。先人があみだしてきた戦術を、報酬を得るためにAIロボットがその場で瞬時に発見し使います。もはや人はAIの思考をなぞることができないのです。

さて、タバコ屋のおじさんは自販機の導入で自由な時間が増えました。より多くのたばこを売る、ということを報酬にするとAI自販機はどうするのでしょうか。人類にとってはAIをうまく使いこなしてより豊かに暮らしていくに越したことはない、あるいはそれしか道はないですすね。

参考 総務省 ICTスキル総合習得プログラム [http://www.sounu.go.jp/ict\\_skill/](http://www.sounu.go.jp/ict_skill/)

2018年  
12月3日  
月曜日

堀 敬一 教授（金融経済学・マクロ経済学）

# ライブエイドが遺したものの

イギリスのロックバンド、クイーンとそのシンガーであるフレディ・マーキュリーの伝記映画「ボヘミアン・ラプソディ」が大ヒットした。

この映画のクワイマックスはライブエイドにおけるクイーンのパフォーマンスだが、ライブエイドとはボブ・ゲルドフが主催したアフリカの難民を救済することを目的としたチャリティコンサートである。このコンサートは1985年7月13日、ロンドンのウエンブリー・スタジアムとフィラデルフィアのJFKスタジアムの2ヶ所で延べ12時間開催され、150ヶ国に衛星中継された。

当時、私は高校生でテレビの生中継をずっと観ていたのだが、クイーンが登場する頃はおかなりの深夜になっていた。当時の私ですらクイーンは「昔のバンド」であり、あまり興味を持ってなかったの寝ても良かったのだが、何となく情性で見続

けていた。しかしそこで繰り返し広げられた約20分間のパフォーマンスは、映画やDVD等をご覧になった方ならご存じのはずだが、ロックの歴史に残るほどの凄まじさで、文字通り眠気も吹っ飛んだのだった。今なら現在進行中のイベントに対して他の人がどう思っているか、SNSを見ればわかるが、当時はインターネットすらない時代。その時のクイーンの素晴らしさは自分の記憶の中に留めておくしかなかったのだが、ライブエイドのDVDが発売される頃には多くの人が同じ印象を持っていたのがわかって、改めて当時の興奮を思い出すこととなった。

とはいえ、実は私は特にクイーンファンというわけでもなく、当初、映画の「ボヘミアン・ラプソディ」に大して関心を持ってこなかった。しかし昨年の映画公開の直前になってライブエイドがクワイ

マックスであると知り興味を持つようになった。ライブエイドはクイーンにとって記念碑的な瞬間だったことをバンド自身が認めたわけで、しかもあの興奮が多くの人に共有されるとなれば注目せざるを得ない。そして映画は私の予想を遥かに超えて多くの人に受け入れられたのだが、それにしてもクイーンはなぜあそこで完璧な演奏をすることができたのだろうか。

後のインタビューによると、フレディ自身はライブエイドがチャリティであると同時にプロモーションの場になることを自覚していたと告白している。クイーンはバンドとして当時低迷状態にあり、ライブエイドは起死回生のラストチャンスだったようだ。このチャンスに賭けたバンドは渾身のパフォーマンスを披露し、その結果、バンドのイメージを一新することに成功した。事実、ラ

ライブエイドの直後からクイーンのアльバムは売れて、ヨーロッパ諸国の全26公演では80万人以上の観客を動員した。

本来の目的であったチャリティ活動としては賛否が分かれるライブエイドではあるが、その後の音楽ビジネスのあり方にも大きな影響を与えたと考えられている。当時はMTVによって音楽市場のグローバル化は既に始まっていたのは事実だが（当時はテレビの衛星中継なのだが）世界同時にコンテンツを発信することにより多くのリスナーを獲得できることをクイーンはライブエイドの場で証明したことになる。そしてそれが、インターネットを通じて楽曲を世界中に発信する現在の音楽ビジネスの出発点になっていることは言うまでもないだろう。

2018年  
12月4日  
火曜日

2018年のFIFAワールドカップで世界を驚かせた事件は、2014年大会の優勝国であったドイツが一次リーグで敗退したことであろう。前回優勝したとき、ドイツ代表は移民への寛容と多文化主義の勝利として称揚された。優勝にはトルコ系やアフリカ系移民の子孫が貢献したのである。今大会一次リーグで敗退したドイツは、怒りの矛先を前回の功労者に向ける。最大の犠牲者はメスト・エジル選手である。彼はトルコ系移民三世のイスラム教徒である。大会前の些事が批判の伏線にある。彼は同じトルコ系のイルカイ・ギュンドアン選手とともに、トルコのエルドアン大統領と意味深長な集合写真に収まった。この写真をめぐって彼は右派からドイツへの帰属意識を疑われ、左派からは人権抑圧的で強権的な指導者との親睦を批判されたのである。今大会の敗退をうけて彼への批判は沸点に達し、エジルはドイツ代表を引退した（本人は人種差別を受けたと主張する）。

山田 仁 准教授（イギリス文学）

# 共同体の悲鳴 「これは今も私の国が」

優勝すれば国民は寛容の衣を纏う。しかしさまざまな敗北は国民に本性を露呈させる。寛容のメッキが剥がれた。

ドイツは第二次世界大戦を経て、南欧やトルコからの移民を労働者として積極的に受け入れた。移民はドイツに家族を呼び寄せ定住し、ドイツで生まれ育った二世や三世（移民の背景を持つドイツ人）は急増した。2016年現在、ドイツに居住する外国人（難民を含む）は約896万人で、全人口8243万人の約11%を占める。日本に在留する外国人は2016年現在で全人口の1.88%であるから、ドイツは日本の約6倍の外国人率を示す。この在留外国人率にエジルのような移民の背景を持つドイツ人を加えると、その比率は全人口の約23%に達する。移民の背景を持つドイツ人や難民の出生率は本国人に比べて高いため、この比率は今後も上昇が続くことが容易に推察される。見慣れない姿が視界をよぎり、聞き慣れない

言葉がドイツ語を掻き消す。キリスト教会がイスラム教モスクに取って代わる。故郷と祖国の喪失は、ドイツの週刊誌Der Spiegel (Nr. 16, 2018) をして「Ist das noch mein Land? 「これは今も私の国か？」と叫ばれる。ヨーロッパ先進国の現状もドイツに似ている。移民に限定すれば最も移民率が高い国はスウェーデンであり（18%）、英国とフランスはそれぞれ14.2%と12.6%である。

英国の詩人T.S.エリオットは、第二次世界大戦末期のラジオ講演において述べている、「ある共同体に他の民族が一定以上の量と速度で流入するとき、その共同体は崩壊する」。共同体には異邦人を受け容れる許容限度があることを示唆する発言である。大戦末期の知性が予言したことの正しさが、70年後の今欧米で証明されつつある。人間社会の許容力が理想としての価値と文化の多様化に耐え切れない。許容量を超えて急速に異物を摂取した人体は、異

物を体外に排出する反応を示す。2014年大会において優勝したドイツ代表に、ドイツ社会の衰退と病理を見る。「これは今も私の国か？」これは決してヘイトスピーチの類いの險悪と憎悪の吐き捨てではない、むしろ許容限度を超えて体内に異物を摂取した共同体の悲鳴ではないか。

我が国では、外国人労働者受け入れをめぐって国論が二分する。労働力人口減少という現実と経済成長維持という強迫観念との板挟みに日本は置かれている。確かに経済成長と社会保障制度を維持することは重要であろう。喫緊の課題であることも理解できる。しかし、それが日本の長期的混迷と結果的衰退を招くという犠牲を払ってまで断行しなければならぬ課題かどうか、日本の許容力ほどの程度なのかという問題と共に冷静に見極めることが肝要である。



2018年  
12月5日  
水曜日

## わからないうちをどうにかするの

長谷川 哲子 准教授 (日本語教育学)

日々の生活の中で分からないこと、理解できないことに出くわすことがある。個人的な例であるが、私の研究分野は第二言語としての日本語習得に関する分野である。その研究の中で、どうしてこういうように学習者は考えるのだろうか？とか、なぜ学習者はこうしないのだろうか？など、疑問は尽きない。仕事以外でも、なぜこんなところにこんなものが？とか、どうしてあの時あの人はあんなことを言ったのだろうか？など、とつさに理解できなかったり、考えても分からなかったりすることがある。

かつて分からないことを抱えていたとき、当時の同僚だった心理学の先生に教えてもらったことが一つある。それは「認知的複雑性」ということばである。物事の認知に際して多角的にとらえて評価することの度

合いを指すらしい。この認知的複雑性が高いと物事をより多角的に認識、把握して評価することができ。一方で、認知的複雑性が低いということは認知的経済性が高い、つまりより簡潔な認識や把握による評価を行うということになる。

この高低は単に善悪や是非と比例するものではないが、また最近になって分からないことがとみに増えてきたせいか、分からないこと、解せないことに対処する構えを意識するようになった。学生のみならずも分からないことにつづかることがよくあると思う。こんなときどうしたらいいか、とか、これでいいかどうか分からない、などなど、そんな相談やつぶやきを投げかけられることがある。そんなとき私はどう答えているだろうか。以前の私なら、先に述べたような認知的複雑性

の考え方にそって、分からない対象をめぐって、情報収集をして、知識を増やし、評価基準の軸を増やすのだと答えていただろう。このごろの私は、もう少し自分に都合のいい方法を答えているように思う。それは、そつとしておく、である。別の言葉で言えば、「いらわない」ということである。これは、テレビで料理番組を見ていたとき、そのときの講師が材料の焼き方を説明しながら使っていたことばである。火を通すときにちまちまさわったり裏返したくなったりするかもしれないが、しばらくがまんしていらわないこと、これが成功のこつ、というようなことだった。

この「いらわない」は、簡単そうに意外と難しいように思う。ことは単に料理に限らない。物事のみならず人物に対しても、分からない、理

解できないことをそのままにしておくのは案外難しい。分からないことには違和感や落ち着かない感じが伴う。しかし、そうした現実とともに居る、有るということは、分からないことを無理に解決する（もしくは効果的な処し方だと思おうようになった。そうしているうちに、どこかでのなにかとつながるかもしれないし、自分でも気づかないうちに新たな評価基準を備えるようになっていくかもしれない。こうした方法も実は結果的に認知的複雑性を高めることになっていいると思えるようになった。そつとしておくための時間はいとわしいものかもしれないが、そんな方法もあるということ考えた1年だった。

2018年  
12月18日  
火曜日

# 関学の思ひ出

●退任教授最終チャペル講話／河野 正道 教授（理論経済学）

今回が私にとって最終のチャペルトークであり、私の関学での学生時代の思い出を話すのが適当かと思えます。当時の関学では、単位がもらえる授業としての大学の公式的なゼミとは別に、学生が自主的に開いている非公式ゼミ（勉強会）があちこちにありました。自分の大学時代を振り返ってみると、この二つのタイプのゼミからかなりの影響を受けていることがわかります。よって、当時の関学でのゼミについて語らせていただきます。まずは大学の公式的なゼミについてお話しします。

当時は、1年生から4年生まで毎年、ゼミがありました。1年次は人文演習であり、これは今の基礎演習

に相当するもので、語学の先生、キリスト教の先生が担当しました。2年次のゼミは英語経済書講読演習であり、これ以後のゼミは専門の先生が担当します。1、2年次の学生は機械的に割り振りされ、学生側の希望も考慮されません。3、4年次が研究演習であり、それは今と同様に学生の希望が考慮されます。現在と異なる点は、使用されるテキストは日本経済史のゼミも含めてすべてのゼミで英語であったという点です。1年生の時の人文演習は実存主義哲学の文学作品をテキストにしており、ケルケゴールなどを七転八倒しながら読みました。苦しみましたがあまり理解できませんでした。ま

た、議論に積極的に参加できず、ゼミそのものにもあまり興味は持てませんでした。そのため2年次のゼミでも当初は積極的な学生ではありませんでした。2年の英語経済書講読演習の1回目の授業はゼミの方針を説明し、発表者順を決めただけで終わりました。2回目から本格的にゼミに入った（と思われる）のですが、私は予習しないまま、のんびりムードで出席しました。すると担当のK教授は、「予習して来なかった者は出て行け」と明瞭におっしゃいました。半分ぐらいが出て行ったでしょうか、私も出て行きました。だから私は3回目からは真面目に予習をしていきました。おかげで400

ページからなる英語のテキスト、Meyers著『*Elements of Modern Economics*』を年間通して読み終えることができました。また、経済学の面白さも、学問的な議論することの楽しさも分りました。確かに、K先生のこの指導方法は荒療治でした。先生自身も危険を背負い込むことも十分に予想されたはずですが、あえてその危険を冒されたのです。事実、かなり後になってある学生が授業の中で、自分を追い出したことにクレイムをつけました。K先生はかなり困ったことであろうと思えました。このとき、多くの学生は、予習してこなかった我々が悪かったのだ、と思っていまし

た。(ただし、ひそひそ話で言うだけの、物言わぬ大衆、でした。)

確かにこのような荒唐治は成功するとは限らないでしょう。今ならパワハラと言われて終わってしまいそうです。これはチャペルでの講話でありますから、言わせて頂きますが、このK先生は熱心なキリスト者であり、学内の祈祷会ではいつも大きな声で祈っておられたとか。公の場でも私的な場でも、常に神に祈っておられたそうです。その祈りに神は応答され、このK先生を自らの道具として用いられたのだと思います。

もう一つ、今日お集りの学生さんたちに言いたいことがあります。私がかここで語りたいゼミは大学の公的な授業としてのゼミのみではなく、むしろ学生同士が自主的に開くゼミのことであり、そちらの方が学生には影響力(教育力)がより大きいのではないかと思えます。この2年の英語経済書講読演習のゼミの予習のために、同じゼミの学生たちとサブ

ゼミ(予習会)をしました。英語の専門書や学術的な専門書を独力で読解するのは難しいので、友達同士で互いに教え合って予習しました。しかし、なかなか互いに相手を説得するのは難しく、議論が収束しないことも数多くありました。誰か優秀なリーダーがいれば勉強会は効果的になるはずですが。そんなときに運よく大学院生が指導するゼミに入れてもらいました。そのきっかけは以下の通りです。

Nさんという当時大学院修士1年生の人が指導する研究会がありました。このNさんは学部学生3人ほどと(当時、喫茶店がこの経済学部の地下にあり、そのテーブルで、決してよい環境とは言えない騒音の中で)で読書会をしていました。当時は熊谷尚夫著、『現代経済学入門』を読んでいた。それを私が横から、うらやましそうに見ていました。するとNさんが「君も入るか」と誘ってくれました。「はいはい、入ります。」と二つ返事で答えまし

た。このように誰でも受け入れる人でした。6人目であったか、の参加希望者が現れたとき、幹事役の学生は、少人数で仲良く親睦を兼ねてやっているのに、第一椅子が足りない、という理由で断ろうとしました。しかしNさんは、断る理由がない、と受け入れました。そのために、新しい場所を探してさまよい回り、自主的な研究会が非常に盛んであり、適当な教室はいつも満杯であったからです。

そのNさんのゼミでは、先にあげた熊谷の入門書から宮崎・伊東著『コンメンタール・ケインズ一般理論』、ヘンダーソン・クオント著『現代経済学』などの少し高度な専門書まで4年生まで続いて読んで行きました。この自主的なゼミと並行して公式的なゼミである研究演習Iが3年次から始まりました。研究演習は生田種雄教授が担当する経済成長理論のゼミを選びました。テキストは、経済学の専門雑誌に掲載された成長

理論に関する論文、つまり、原典を輪読する本格的なゼミでした。

Domar、Harrodのケインズ派の成長理論から始まり、Solowの新古典派の論文、"A Contribution to the Theory of Economic Growth"などの基本的な論文から複雑な成長理論の論文へと読み進めて行きました。ハロッド、ドーマーの理論では資本係数(資本÷生産量)と貯蓄率(貯蓄÷所得)で均整成長率が決まるということ、また、その成長経路が不安定(上あるいは下に少しでも乖離すれば元に戻らない)であることを知り、マクロ経済学の面白さを体験しました。

勉強とは一人では苦勞するものであり、適当な環境が必要です。私が大学院に進学し、研究を継続するようになったのは、公式、非公式なゼミを通じて、よい友人や先輩との交流が与えられた結果であることは間違いないはずです。■

2018年  
12月12日  
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／神崎 高明 教授（英語学）

# 関西学院大学と私

## 一 小・中学校の頃

私は一九五一（昭和二六年）年三月に兵庫県の西南部に位置する赤穂郡上郡町に生まれた。上郡は町の中央を清流千種川が流れ、山々に囲まれた盆地にある静かな町である。

私は小学校と中学校は地元の学校に行った。小学校は各学年で二クラスしかなかったが、中学になると、町内の各地域から生徒が集まり、田舎の町とは思えないほど大規模な中学であった。戦後のベビーブームの影響が田舎町にも押し寄せていたのである。私たちの学年で九クラス・四百五十人の生徒数であったが、一年上の学年は十クラス、二年上は、十一あるいは十二クラスであったかもしれない。中学でもよい先生に恵まれたのは、幸運であった。なかでも幸運だったのは、中学一年生のときに、M先生という英語の先生に初歩

から英語を教わったことだ。東京の有名女子大学出身という噂のある先生の発音は素晴らしく、正しい発音で英語を話し、読む訓練をしていた。聞いたことは、一生の宝物となった。

## 二 龍野高校と大学入試

自宅から歩いて三分の所に県立高校があるにも関わらず、私は龍野市にある県立龍野高校に入学した。龍野高校が西播磨地区で一番の進学校であったからである。高校でも多くのよい先生に出会ったが、一人挙げると、それは英語のD先生である。先生には英文法を徹底的に叩き込まれた。斎藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』を紹介してくれたのもD先生だった。後年、私が『熟語本位英和中辞典』の校訂に関わるとは、その時、夢にも思わなかった。高校三年の時、進学相談のため職員室にい

るD先生を訪ねた。私が国公立の英文科あるいは外国語大学に入って英語を喋るようになりたいと言うと、外大へ行くだけではだめだ。英語を喋りたければ、E S Sに入るよう勧められた。私は大学に入学後、E S Sに入ることを密かに決心した。

高校のクラスの生徒の大半は、第一希望は国公立大学に進学を希望していた。私も国公立を受験するつもりだった。ところが、その頃、全国の大学は学園紛争で混乱していた。一九六八年十二月、東大の安田講堂が全共闘に占拠され、翌年一月に東大の入試が中止になることが決定された。担任のI先生は、ホームルームの時間に私たちに「東大の入試は中止されたので、受験する国立大学のレベルをランクずつ下げるように」と伝えた。そしてI先生は、「国立大学を受けるものは、必ず力試し

に関学を受けるように」とも言った。当時、関関同立の中で関学だけが数学が受験科目に入っていたので、国立型の受験生は、力試しに関西学院大学を受けるものが、多かったのである。私も関学を受けることにした。

二月の初旬に関学の入試が始まった。経済学部が一目目にあつた。テレビニュースには機動隊とゲバ棒をもった全共闘の学生が小競り合いをしている場面が映し出されていた。こんな騒動が起こっているなかで文学部の入試を受けるのか、と思うと、私は少し心配になった。入試当日は甲東園からバスに乗ったが、上甲東園公民館前でバスを降ろされた。現在、学園花通りと呼ばれる、桜並木の長い一本道は、入試粉砕を叫んでデモ行進をする全共闘で一杯だった。大学のキャンパスは全共闘

によって封鎖されていたので、入試は市道の南にある中学部、高等部と体育館で行われた。私は暖房のない体育館で試験を受けた。二月の末に合格通知が家に届いた。

三月の初旬に国立大学を受験した。その大学も、全共闘の学生により封鎖されているので、受験場は大学のキャンパスではなく、近くの高校で試験を受けた。結果は不合格であった。私は関西学院大学に入学することにした。

### 三 関西学院大学の学部時代

三月の末に、私は大学の学生寮である啓明寮に入った。この寮は鉄筋コンクリート作りで見た目は近代的な寮だった。だが、戦前からの長い伝統を誇る寮であり、旧制高校の寮のような極めて蛮カラな寮であった。四月になっても五月になっても授業は始まらなかった。学生は自宅待機の状態であった。私の場合は、寮で待機であった。高校時代にESSに入ることを勧められていたもので、ESSに入りたいと思っていたところ、寮の先輩の中にKという名前のESS部員がいた。私はKさんの紹介でESSに入部した。

啓明寮は現在上ヶ原六番町に移っているが、当時は今の学生会館新館

の位置にあつたので私はキャンパス内で生活したと言ってもよい。そして、入学式もないまま、六月三十日に新学期が始まった。この頃になると、寮生活にも慣れ、寮とESSのボックスと文学部の三箇所を行き来する活気のある夢のような生活が四年間続いた。

啓明寮生は全部で七十名ほどであった。寮生の出身地も様々であり、北は東北の宮城県から南は鹿児島県に及んでいた。寮内では色々な方言が飛びかかった。寮生の中には、大学の体育会や文化総部など、スポーツや文化系のクラブに属するものが多かったが、学生運動をしているものもいた。若者の様々な価値観が衝突する場であった。まるで、国内留学をしたような気分であった。この寮生活を通して、人間の多様性を実感した。

六月三十日に新学期が始まることも、クラブ活動も再開された。当時のESSは部員が三百名もいて文化総部一の大きなクラブであった。毎日杯全国英語弁論大会での優勝回数も全国一を誇っており、全国レベルで活発な活動を続けていた。ESSは五つのセクション(スピーチ、ドラマ、ニュースペーパー、ディベート、ディスカッション)に分かれて

いた。私はディスカッション・セクションに入ることにした。ディスカッション・セクションは、英語で政治、経済、社会の問題を他大学のESSと英語で議論をするセッションであった。その練習は体育会なみの厳しさがあつた。

入部した最初、私はまったく英語が喋れなかったが、必死になって英語を勉強し、二、三か月もすると、かなり英語を喋れるようになった。おかげで英検の一級にも合格した。三年生の時に部長に選ばれ、ESSのリーダーとして充実した一年を過ごした。韓国の延世大学や米国のスタンフォード大学とも英語による討論会を行った。四年生の夏には、私は日米学生会議のメンバーに選ばれた。この会議は戦前からある、権威のある会議であった。ハーバード大学であったその一週間の会議は刺激的であった。ゲストスピーカーもハーバード大学のライシャワー教授(アジア研究、日本研究)、リースマン教授(社会学)、キッシンジャー教授(国際政治)、MITのサミュエルソン教授(経済学)など多彩であった。

ライシャワー教授は東アジアの安全保障が講演のテーマであった。当時、一九七二年七月時点ではまだベトナム戦争が泥沼化しており、戦争

はいつ終わるとも先が見えず、人々の間には厭世的な雰囲気が出ていた。そのような状況の中において、ライシャワー教授はベトナム戦争はあと一年以内に終結すると言い切つた。その講演会場にいただれも、そのことを信じられなかった。はたして、一年後、教授の予言通り、ベトナム戦争は終わった。

二年前の一九七〇年にノーベル経済学賞を取ったサミュエルソン教授は、日本の貿易摩擦の講演だった。当時、日本のGNPはようやく西ドイツを抜き、米国について二位になったばかりであった。まだ日本経済は弱小というのが大方の見方だった。そんな中、サミュエルソン教授は、十年後には日本のGNPは米国に追いつくであろうと大胆に予測をした。この予測そのものは当たらなかったが、その後の十年間の日本経済の躍進を見ると、一九七二年以降の十年間は経済的には、まさにJapan as No.1の時代であった。学生会議を通して、優れた学者の精緻な現状分析に基づく未来への予測の精度の高さに大きな衝撃を受けた。関西学院大学の四年間は多くのものを私に与えてくれた。

皆さんも、この四年間を有意義にお過ごしください。

2018年  
12月17日  
月曜日

●退任教授最終チャペル講話／林 宜嗣 教授（財政学・都市経済学）

# 関西学院と私 —生き方に影響を与えてくれた人—

経済と人間シリーズや学部長時代にこれまで幾度かチャペルで話をしてきました。講義や講演と違って、チャペルで話するのは少し緊張します。やはり、学生さんの記憶に残る話をしなければというプレッシャーがあったのだと思います。今日、とうとう最後の機会となりましたが、この緊張はなくならないままでした。今日も、やはり何か少しでもためになるメッセージを送りたいと思っていましたが、その思いは捨てて、今回は退職に際してということでですので、私個人のことをお話することにしました。

私の父親も関学の卒業生です。私はまだ小さい頃から、父は私に関学の話をし、セミをとりこのキャンパスに私を連れてきました。その頃から、私は関学に入りたいと思うようになりました。関西学院との長い関わりのおかげと、愛する母校をもつことができるすばらしさを教えてくれたのが父親でした。

1969年に関学経済学部に入学しました。そのための面接では、なぜ経済学部を志望するのかを聞かれましたが、明確な夢や計画を持っていたわけではありませんでした。私は現在、指定校やAO入試などで面接をしています。多くの高校生がしっかりとした将来像を持っているのには感心しています。

大学入学後は、ごく普通の学生生活を送っていました。大学の後半になって、私は会計士になろうと思

い、専門学校にも通いました。そして、まずは税理士資格を取ろうというところで、大学院に進学することを決めました。今は制度が変わりましたが、当時は、大学院で財政学の修士論文を提出すると、税理士試験の内、税法関係の試験3科目が免除になるからでした。ところが、大学院に進むと、大学院の勉強と会計士の勉強を両立させることは困難だとすぐに気づきました。

学部と大学院の指導教授であった柏井先生は、私に、「さあ、どうする？ 会計士の道に進むか、研究者になるか、によって、ゼミの指導の仕方を変えるのよ」と言ってくれました。先生が私の将来のことを考えて、そのようなたずねてくれなかったら、研究者としての林はなかったと思います。

しかし、研究をすれば自動的に大

学教員になれるわけではありせん。大学院を終えると、どこかの大学の就職先を探さなければなりません。柏井先生は、関学を退職された後、大学院卒業後に私を採用することを条件に、新幹線に乗って遠方で通勤してくださいました。先生はもう高齢でしたから体力的にも辛かっただろうと思います。最終的に私は関学に職を得ましたので、その大学にお世話になることはありませんでしたが、先生が就職先を確保してくださったことで、私は安心して研究を進めることができたと思っています。

このように、柏井先生には、研究者、教育者になるきっかけと勇気を与えていただくとともに、人を育てるうえで、気配りと優しさが大切であることを教わりました。

もう一人の恩師は、私が大学院の

後期課程に入ってから指導教授をしてくださった橋本徹先生です。橋本先生は政府や自治体の委員を数多く務め、とても忙しくしていました。そのため、先生の研究の手伝いをするようになりました。仕事の期限は決まっていますから、徹夜をして原稿を仕上げ、早朝に先生の自宅の郵便ポストに持って行ったことも何度もありました。

仕事は、自分の研究テーマでないものもありましたし、ダメ出しを出されたこともありましたが、「何でこんなしんどい目に会わなければならないのだろうか」と思ったこともありましたが、しかし、そのおかげで、私の研究領域は広がりましたし、研究は世の中の役に立つものではないといけない、ということも教えていただきました。このことは私のその後の研究に大きく影響しています。

また、先生は「30歳までに結婚したら破門だ」と弟子に言っていました。私は先生の言いつけを守らず27歳で結婚しましたが、幸い破門にはなりませんでしたが、先生の言いたかったことは、「彼女を作る前に、論文を作れ」ということだったのだらうと思いますので、結婚を認めたらうために研究には力を注ぎま

した。先生からは、研究とはそれほど厳しいものだとということを知りました。

私の生き方に影響を与えてくれた人は数多くいますが、最後に、私の教師としての生き方を教えてくれた人の話をします。それは学生さん、特にゼミ生でした。私は教師という職につくことは大学院に入学するまで考えたことはありませんでした。

先ほど話したように、大学院入学後に恩師の助言のおかげで研究者の道に進むことになりましたが、これは同時に大学の教員になるということでもありました。しかし、経済学部に就職してしばらくは、教員には向いていないのではないかと思う日が続きました。こうした気持ちを前向きにしてくれたのがゼミでした。

ゼミを担当した最初の頃は、テキストをゼミ生が報告し、私が解説するという形式で進めていました。その中で、ゼミで共同研究を本にまとめるという企画が持ち上がり、内容と目次をゼミ生が議論しました。しかし、なかなか考えがまとまりません。そこで、私が本の構成を考えて提案しました。すると、ほとんどの人が意見を出すことなく、賛成しました。すると、一人のゼミ生が、皆にこう言いました。「先生が提案し

たら、何の意見もなく賛成するのか」と。

私は学生のその一言から、「教師が機関車になってゼミを引っ張っていくのは、ゼミ生の成長のためにはならない」ということに気づきました。教育というのは、「教え」、「育む」、ということです。教えるだけでは学生は育たないのだと強く思いました。私にとって幸いだったのは、そう気づかされたのが、私自身が未熟な、教師になり立ての頃だったということです。私はそのとき、ゼミを進めながら自分自身も育っていけばよいのだ。そのためには失敗を恐れず、試行錯誤をしていこうと開き直りました。

このように思うことで、気持ちが楽になるとともに、教師という仕事を楽しくなりました。私の最後のゼミ生は31期生です。まだ試行錯誤から抜け出せることはできていないのですが、試行錯誤で良いのだという気持ちを持たせ、教師としての歩みを支えてくれたのがゼミ生でした。そのときから、私は教師になって本当に良かったと思うようになりました。

教育は教えることですが、皆さんが大学で大きく育つことができるかどうかは、皆さん一人ひとりの意

欲と取り組みにかかっています。教師は、学生が育つための環境を与え、成長を支える。そして学生は、その環境と支援を活かして成長する。それによって母校である関西学院を愛して卒業していく、そんな関西学院経済学部であって欲しいと思っています。

2018年  
12月11日  
火曜日

●退任教授最終チャペル講話／藤井 和夫 教授（外国経済史）

# 学生時代—チャペルと妄想

この春に、関西学院大学を退職します。教員として経済学部で三十八年間勤務しました。自分自身が同じ学部と大学院研究科を卒業しているので、ここには四十七年間ほど通ってきたことになりました。その間、大学には学部が増え、キャンパス内の建物もずいぶん建て替えられました。が、幸い経済学部は、場所も建物も変わっていないので、こうして古びたチャペルに立っていると、つい昔の学生時代を思い出してしまいます。

私は父がクリスマスチャンだった関係で、子どもの頃に教会の日曜学校に通っていたことがあります。記憶にある教会は、明るい場所です。いつも人がたくさんいました。ところが関西学院大学に入学してみると、そのチャペルは、入学直後のオリエンテーションの時期以外は、人も少なく、暗くて静かな場所でした。外部からは遮断され、冷房のない時代の夏の昼間でも比較的ひんやりしていて、寝るのにちょうどいい場所だなど思った記憶があります。

でも暗く、静かで涼しい場所であるにもかかわらず、チャペルでは眠れません。部屋が階段教室のようになっていて、座席に着くために人が移動するたびに床がギシギシ音を立てるため、椅子が固い木でできていて背もたれがほぼ垂直になっただけでも、眠れない理由は、チャペルだから当然のことなのです。

が、そこではいつも誰かがマイクに向かって話しているからです。ほそほそした声でも、誰かが聴衆の一人である自分に向かって話しかけてくると、私は眠れません。では熱心にチャペルでの講話に聞き入っていたのかというと、そんな記憶もあまりないのです。今振り返ると、不思議な体験をしていたことを思い出します。

私にとって学部のチャペルというのは、人の話を聴きながら、知らぬ間に、自分の考えていることを展開し反芻する、というより正確には、個人的な妄想に耽る場所になっていたのです。つまり、人の話を好きなように自分勝手に聞いている、はじめは話に引き込まれていても、いつの間にかそこから自分の考えていたことに話は繋がって行って、気づけば自分が普段考えていることをここでも頭の中でいじくり回している、そんな記憶が残っています。

そもそも大学生になって何よりもうれしかったのは、自分で考える対象を選べたことと、自分の好きなように勝手に考えてもよくなったことでした。すべてにわたって、このことについて考えよとか、こういう風に考えなさい、といわれることはほとんどなくなり、聞き方も自由、聞く話の選び方も自由。つまり、聞かなければならない話ではなく、自分で聴きたい話を聴けばいい。さらに、勝手に考えて、こうなんだと、自分で決めつけても、別に構わな



い。それは快感です。そんな「自分勝手」に目覚めたら、大学生活はとても楽しい。そんな風に感じてうれしくてたまりませんでした。

ただ、無意識に同意を求めて、自分の考えを他人に向かって話す時には、自分の勝手な考え方は、いつもそれでいいとか別に構わない、とはなりません。自分の考えを他人に理解してもらおう、相手に同意してもらおう、これはなかなか難しいものです。自分の考えそのものを、相手がわかるように、相手が同意するように変えていかなければならない。相手が理解しやすい話し方をしなければならない。相手が考えていることについても、相手が考えるようにこちらも考えていかなければならない。こんなことは当たり前のことなのですが、人と行う議論や会話の意味は、こうして自分の考えを洗練させ、相手の考えとのやりとりを通してより良いものに変えていく、あるいは共通の理解を他人と共有できるようになることでしょう。当時は、これがちよつと苦手でした。学生さんにディベートを推奨しながら

こんなことを白状するのは何ですが、人との会話は、いつも楽しいとは限りません。面倒くさいな、億劫だな、と感じた記憶が残っています。

チャペルでの体験は、それとは全く異なるものでした。話し手は自分に向かって話してくれているのです。聞いていてこちらは、相手の話をきっかけにあらぬ方向に自分の考えが拡がっていったら、いつの間にか勝手に自分自身の考えに耽っている、妄想を好きなように膨らませているのです。学生時代はチャペルの熱心な参加者ではありませんでしたが、そんな意味でチャペルが気に入っていました。講師の人たちには本当に申し訳ない話なのですが、ひどく「自分勝手」な聴き手として、経済学部でチャペルが好きでした。もちろんその際、その「自分勝手」が、話し手の話をきっかけにして実現する、ということは当時も感じていました。チャペルの時間は、自分が自由になるきっかけを与えてくれる、そう思いました。このチャペルは、そんな自由を許してくれる。そう信じています。

ただ、大学には講義や授業があります。これは勝手に違つて少し難儀です。何よりも、決められた内容を聞かなければならない。聞いて、理解して、記憶して、試験の間に答えなければならぬ。話し手によって、こちらは聞かせる意識も薄いまま、好き勝手なことを好きなように話すだけの人もいれば、このことについてはこう考えるべきで、当然こういう結論になる、と考え方を押しつけてくる人もいます。たまに、引き込まれるおもしろい話に出会って、話の流れに自分の考えも同調するのを感じられるような講義もありましたが、総じて人の話を聞きながら好き勝手に考えをめぐらしたい人間には、授業の「良き聴き手」になるのは至難の業でした。与えられる内容を素直に聞き取りながら自分の好きなように解釈するという能力もなかつたので、相性のいい偏つた話し手を選びたがる不熱心な学生に過ぎませんでした。

そんな私が教師になり、長い時間を母校で過ごしながら今になってつくづく反省していることがあります。それは、自分の授業の中で、この話を聞きなさい、これを理解しなさい、と言いつ過ぎたことです。一個の自分を全世界に対峙させて、いきなり突っかかってくるような思い上がった私の学生時代とは異なつて、今の若者は、身近な周りをよく見ていて、周りの声をよく聞いています。柔軟で素直で敏感な感性を持ち合わせています。だから彼らには、むしろ、人の話を聞きながら自分の勝手な妄想を膨らませよう、と呼びかけるべきでした。人の話は単なるきっかけにしておいて、自分自身の勝手なテーマ、勝手な解釈、それをもっと追求しよう、そう言うべきだったと思うのです。自分の考えなんか、小さなつまらぬものかもしれませんが、それが社会、世界、人生を知る一歩になるといふ以上に、そういう小さなものとしてこそ、大きな世界がわかってくる、そういう体験を学生時代にして欲しいのです。思えば、私のこのチャペルでの妄想が行き着いたのも、そんなことだったように思います。

## 1組 松枝教授

辻 菜摘	現代における映画館と未来への課題	松崎 寛詩	日本の企業率について
森田 梓	なぜ人は猫をかわいいと思うか	北原 咲	日本の国民的アイドル「嵐」を超えるジャンニーズは現れるのか
増本 創太	なぜ日本ではDJや音楽プロデューサーがあまり陽の目を浴びないのか	井山 圭斗	今後の銀行について
大木 智矢	服のトレンドはなぜサイクルするのか	楊 奇真	卓球はなぜ根暗なスポーツなのか
菊地 圭	体操は日本でメジャーなスポーツなのか	板舩 拓輝	なぜ日本で自転車競技（ロードレース）は流行らないのか
熊谷 翔太	台湾ブームはなぜ起こったのか	東山 弥加	人はなぜ花を贈るのか
★井伊 葵	ブリーマーケットにおいて物を高く売る・安く買うには	永井 亜理沙	なぜ電車内で化粧をしてはいけないのか？
井上 祐輝	色彩心理学：色がスポーツに与える影響	山本 拓海	東と西のお笑いの違いについて
垂井 優奈	なぜ野球部員はテレビへの出演が禁止されているのか	安富 千尋	山口県はなぜ知名度が低いのか
原田 魁	占いトレンド私たちは関連しあっているか	武友 瑞季	購買意欲に打ち勝つ
藤川 奈々	疲労回復「睡眠」	武部 凜	人によって感性や好みに違いがでるのはなぜか
渡邊 英祐	おむすびころりんの謎に迫る	日浦 航介	なぜ水球は日本でメジャーなスポーツにならないのか？
本間 里沙		仁木 亮太郎	日本でeスポーツは流行るのか



## 2組 森田教授

片岡 航己	渋滞の先頭には何があるのか？	伊井 綾美	ホームレスを減らすには
劉 婷	電気自動車の必要性—日本と中国の比較	小延 将大	ティール組織とは
玉田 華菜	なぜ日本では賞味期限が食品ロスを増やすのか	片浦 真歩	欲望は満たすべきなのか？
橋本 真裕	なぜ電車内で化粧をしてはいけないのか	堀田 有紀	お腹が鳴る—現代と過敏性腸症候群
井上 耀介	話すことへの苦手意識をなくすには？	★前崎 祐紀	関西人はなぜ「知らんけど」と言うのか
横川 優衣	日本はキャッシュレス社会になるのか	福島 彩乃	IoT家電の進化がもたらす未来の生活
関田 沙帆	高身長がコンプレックスになる理由	伊藤 一真	自分の声の不快感の正体
鶴田 敦也	キャッシュフリー経済に向けて	鶴崎 駿斗	自動車が環境を変える
久富 成平	E-sportsの理想的構造—E-sportsの分析と細分化	有村 颯太	コンビニ大手三社の経営戦略と少子高齢化
竹内 理紗	南海トラフ地震が起こる可能性について考える	片山 莉紗子	「集団行動主義」は悪なのか？
神野 大輝	なぜ人は依存するのか	許 顕齡	日本と中国の食品安全比較
中井 真衣	「会いに行けるアイドル」とは		
杉岡 梓	Instagramについて考える		
高 玉慧	安楽死の法制化について		
苅部 祥太郎	最近の若者は会話がへたくそ！？		
山本 寛人	広島東洋カープの成長の要因、経営戦略についての研究と考察		

### 3組 堀教授

松井 良太 累進消費税の導入の是非について  
 福永 剛己 累進消費税の導入の是非について  
 田畑 朋史 累進消費税の導入の是非について  
 藤岡 祐人 累進消費税の導入の是非について  
 渡邊 和貴 累進消費税の導入の是非について  
 辻井 拓真 累進消費税の導入の是非について  
 原 優真 累進消費税の導入の是非について  
 伊藤 智紀 累進消費税の導入の是非について  
 内田 祐仁 累進消費税の導入の是非について  
 遠藤 祐奈 累進消費税の導入の是非について  
 谷山 敬太郎 累進消費税の導入の是非について  
 吉川 隆紀 累進消費税の導入の是非について  
 八木 美咲 累進消費税の導入の是非について  
 小柳 直樹 累進消費税の導入の是非について  
 土岐 慧 累進消費税の導入の是非について  
 石山 夏祈 累進消費税の導入の是非について  
 李 暁溪 累進消費税の導入の是非について  
 齋木 大輔 累進消費税の導入の是非について

澤本 峻一 累進消費税の導入の是非について  
 保田 麻貴 累進消費税の導入の是非について  
 梶原 直哉 累進消費税の導入の是非について  
 田中 琢己 累進消費税の導入の是非について  
 ★天野 夏海 累進消費税の導入の是非について  
 劉 迎春 累進消費税の導入の是非について  
 住岡 加奈子 累進消費税の導入の是非について  
 大仁 竣介 累進消費税の導入の是非について  
 田中 吏矩 累進消費税の導入の是非について



### 4組 田村専任講師

小田 桃菜 スマホ依存症とは  
 安田 紘果 西宮市はどのようにして発展したのか  
 西原 混人 生き物の絶滅を防ぐために大事なこと  
 ★加藤 航紀 YouTuberの存在と将来性  
 大西 亮佑 平均年収と物価と生活の関係  
 伊藤 励 ゆるキャラによる経済効果とこれから  
 野本 明希 オリンピックのメダル数とGDPの相関性について  
 富松 大登 サッカー日本代表がワールドカップで優勝するためには  
 伊藤 拓哉 日本人の英語力を向上させるには - グローバル社会における日本人の英語力の現状 -  
 吉田 悠馬 野球産業の現状とこれから  
 田島 陸久 大学生はバイトしなければならないのか？  
 福原 楽 休眠預金の今後の使われ方はどうなっていくのか  
 前田 健一郎 スマホと学習の関係  
 上田 真帆 方言が人に与える効果について  
 上原 聖矢 日本の動物殺処分の現状とこれから

卜部 樹 読書の現状と打開策  
 王 茂廷 滴滴出行は永久に業務を停止する必要があるのか  
 濱中 優馬 サマータイムがもたらす影響とは  
 藤田 菜希 一人暮らし大学生の食事においてより経済的な選択  
 須賀 文香 自分に合った靴を選ぶには  
 李 峻旻 過激なコンテンツの拡散と基準の曖昧さ - ゲーム性の導入による改善 -  
 島袋 芽衣 米軍基地が沖縄県経済に与える効果について  
 宮藤 あとむ 現在の世界での食糧不足とその解決策  
 小高 優香 現代社会におけるナン婚  
 片野 武 クレジットカードの現状と展望について  
 佐野 有哉 就職に勝つ！  
 上野 暉 日本はカジノを合法化すべきである  
 磯竹 仁成 富の再分配的な政策は必要か

## 5組 厳准教授

王 子帥 中国の大気汚染問題について  
 谷口 沙穂 震災と経済—東日本震災から考える—  
 太田 優 待機児童問題と子育て  
 森本 優太 日本における外国人労働者受け入れについて  
 石田 安 東日本大震災による復興格差について  
 馬 望博 日本企業の外国人受け入れについて  
 西井 混太郎 日本におけるカジノ産業の課題  
 東 玲花 友好的な日韓関係について  
 喜多村 華子 労働市場における障害者雇用について  
 仲川 葵 SNSが人に及ぼす影響について  
 万 聡 日本企業の盛衰  
 安居 昇太郎 日本の持続可能エネルギー利用について  
 榎原 ゆい 高齢者社会における介護・福祉サービスの考察  
 安達 文哉 日本のインフラ設備の問題と対策  
 黒田 祐介 国際的な電子ゲーム見本市のゲーム市場並びに経済における役割  
 吉松 里深 1964年東京オリンピックと2020年東京オリンピック

中村 太以雅 AIによつての今後の変化とどうこれから生き残るか  
 鈴木 盛右 働き方変革と非正規雇用について  
 吉田 遥菜 日本の大学入試制度について、海外との比較を通して考える  
 木村 克寛 日本が目指すべき「保育」の在り方についての考察  
 市岡 拓也 AIによる働き方の変化  
 山室 実嗣 SNS使用がもたらす若い世代への影響  
 井阪 優衣 サマータイム制度導入の是非  
 ★泉 創和 外来テーマパークと日本の遊園地について  
 内田 萌恵 現代社会のペットの商品化  
 戸村 優希 仮想通貨とブロックチェーン  
 宇津宮 颯 有効な地域活性化のための必須要素について



## 6組 藤井和夫教授

東尾 洸介 スポーツビジネスと社会  
 沖本 京悟 新しい教育Unschoolingについて  
 李 銘嘉 子どもの貧困を解消するための対策方法  
 岩本 翔弥 タバコの恐怖  
 黒江 文音 SNSが及ぼす経済効果  
 間邪 健 マイナススポーツを普及させるには  
 北村 隼己 お宿パブルの経済影響 in Kyoto  
 賀 千尋 eスポーツをもっと日本で普及させるには  
 小野 祥暉 日本のブラック企業—原因と対策—  
 金田 耕太郎 投資の必要性  
 樺木 瑛人 日本におけるe-sports事情  
 ★染谷 凜太郎 新興国における経済格差—ASEAN 諸国—  
 森 悠太郎 LGBTビジネス市場  
 堀本 萌加 訪日外国人とメイドインジャパン—日本経済に与える経済効果—  
 中林 航希 東京五輪で湧く日本の裏側  
 新門 忠真 基礎演習で学んだことと個人発表について  
 平田 雄大 地方の人口減少と過疎化

坪井 杏世 出版業界と出版不況  
 古結 南帆 ユニコーン企業が日本で育たない理由  
 國友 悠希 2025年問題についてのレポート—経済に与える影響—  
 山田 聖哉 サマータイム導入の影響—EUの動向を例に—  
 大嶋 愛美 人生戦略—人生100年時代をどう生きるか—  
 堀越 淳一 日本企業衰退の実態と未来  
 後藤 雅治 キャッシュレス決済について  
 小林 歩夢 たばこによる経済効果と経済損失

学生氏名・論文タイトルの順に掲載しています。★印は優秀論文です。

## 7組 河野教授

太田 圭城	死刑による犯罪抑止力の「有用性」の観点から考えた場合、国家（日本）自身は死刑科権を有するのか。また、国家（日本）は罪人に死刑を科すその義務があるのか。
★熊谷 みのり	日本の英語教育の改善案
吉川 莉歩	LGBTの抱える困難
西谷 優人	子どものLGBT問題と解決策
吉田 梨絵	LGBTの抱える困難
宮丸 久実	消費税について
大島 拓矢	日本の英語教育
川畑 匠恵	憲法の視点からみる死刑制度の是非
金 載祐	日本の教育格差
松川 航大	死刑制度
平野 建	消費税の特徴と増税について
江崎 洸大	LGBT差別のまとめ
井谷 誠志	労働に関するLGBT問題とその解決策
出張 菜月	母親の権利

工藤 大陸	死刑制度の否定
田中 完征	消費税における他国との違い
小島 一哉	死刑制度の基準
西岡 菜月	グローバル・ギャグ・ルールが引き起こすもの
廣田 詩音	堕胎問題の法、中絶胎児利用
郝 屹	日本の無料塾開設の必要性
平井 大貴	セクシュアルマイノリティーへの差別をなくすために
小林 晃	日本と世界におけるLGBT、同性愛の現状と課題
築本 弥音	消費税増税の意図とその後の対策
東野 未来	出生前診断と胎児条項は障害を持つ人、又は胎児への差別と言えるか
富田 潤	日本の英語教育について



## 8組 利光教授

野々瀬 怜希	参加型スポーツイベントが地域にもたらす経済効果とその他の利点
関 拓真	日本のイベント文化がもたらす経済効果
張 恒博	日本における外国人労働者の実態と経済効果
美濃 未悠	音楽配信産業はパッケージメディアを減ぼすのか
佐藤 鈴花	ユニバーサル・スタジオ・ジャパンと東京ディズニーランドの戦略比較
藤本 浩太郎	都市型マラソンの経済波及効果と今後について
真鍋 基	しまなみ海道がもたらした経済効果～地方創生と地方活性化～
本城 桃菜	高校野球の歴史と経済効果
寺本 茉由	オリンピック期間後における宿泊施設の需要
久保田 奈桜	レジ袋・プラスチック製品廃止の取り組み
松尾 孝紘	EC市場（電子商品取引市場）の変遷と未来
森田 涼介	原子力発電所の稼働について～福井県の地元経済～
★吉村 知紘	第一屋製パン赤字決算の理由と今後の展開についての一考察

中田 茉佑	国民的アイドルグループ「嵐」が人気な理由ともたらされる経済効果
段 佑里	インバウンドと大阪の経済について
坂井 勇斗	ASEAN 主要国の経済成長とこれから
小川 晃平	ふるさと納税は地域を救えるのか～北海道夕張市の状況から見て～
竹崎 綾華	訪日外国人が与える大阪への経済効果
矢代 宗一郎	徳島の経済
中川 まどか	K-POPによる経済効果
華井 峻平	アニメの経済効果
吉村 温貴	テーマパークの経済効果
明石 龍星	自動車産業の経済～レンタカー・タクシー産業～
野口 優大	人口最大の国 中国の経済
山田 悠太	オリエントランドの経営戦略と経済効果～東京ディズニーリゾートから見る～
富澤 拓也	阪神間三路線の競争
池内 研二	USJの経済波及効果～地域経済への影響とインバウンド消費～

## 9組 舟木教授

早川 大貴 横浜 DeNA ベイスターズの大躍進～業績の向上が引き起こした成績上昇～  
 岸上 友哉 児童労働を減らすためにできる効果的な方法とは何か  
 芳井 美羽 日本の英語教育はどうなっていくのか  
 足立 菜々穂 日本のキャッシュレス化について  
 柏野 颯太 ファストファッションとその裏側  
 上田 加奈 フリーターの増加について  
 坂元 祐喜 日本の食品ロス  
 日高 圭亮 スマホによる影響  
 三島 準也 介護業界の現状と課題  
 東山 尚矢 待機児童問題  
 梁 逸鋒 家庭環境と子ども  
 山下 颯輝 臓器提供について  
 小川 美里 職場でのハラスメントについて～誰もが働きやすい環境に向けて～  
 金 祐佳 海洋ゴミ  
 山本 晃大 介護社会の問題について

林 優太 2020年東京オリンピックの経済効果と開催後の日本  
 大藪 和馬 たばこが与える影響およびたばこ社会について  
 瀧上 希 若年無業者数の増加を止めるには  
 中井 隆人 大学生の食生活について  
 佐藤 有都 現代の恋愛は社会にどのような影響を与えているか  
 山下 皓輝 外国人労働者受け入れについて  
 侯 譯程 日本の教育格差を低くすることによってメリットを生み出す  
 西脇 悠河 睡眠と運動とストレスの関係  
 ★前田 慶士郎 選挙における最適行動に関する考察  
 加藤 慎太郎 出生前診断と人工妊娠中絶  
 仲野 達也 コンビニエンスストアの現状



## 10組 大洞准教授

加嶋 美法 日本にカジノを導入すべきか否か  
 魚谷 海斗 センター試験の廃止について  
 西口 陽向 小学校英語教育からグローバル社会へ  
 小林 明香里 ふるさと納税が引き起こす問題  
 篠川 諒 電子書籍の普及に伴う漫画の未来  
 北本 岳 日本におけるカジノ解禁の是非  
 岡田 健 死刑制度によって人々の犯罪は抑止されるのか  
 山口 晟穂 日本の大学の入試制度について  
 ★酒井 大地 幸せを感じるには高い収入が必要である、という価値観が我々に与える影響とは  
 駒谷 壮一 ベシックインカムが人々の行動に与える影響、及びその是非について  
 清水 諒子 男性の育休制度利用  
 小山 晴南 監視社会  
 石原 弘規 電力自由化を成功させるには  
 南都 一哉 携帯会社における携帯料金の価格設定について  
 黒田 真太郎 働き方改革による長時間労働の是正について  
 佐藤 美乃里 届け出婚と事実婚が人々に与える影響の差異

齊藤 光汰 人工知能の導入は雇用にどのような影響を与えるのか  
 三村 瑠生 消費税制度から見た人間の本质  
 藤平 優衣 子育ての仕方とその影響  
 太田 凌汰 育児休業制度  
 元村 謙介 プロ野球を16球団にするという制度によって与える影響について  
 山田 愛華 チケットの不正転売について  
 生田 浩資 SNSが消費者行動にどのような影響があるのか  
 豊田 柚貴 チケット転売禁止の是非  
 車谷 美樹 日本の偏差値教育はなぜ確立したのか？  
 藤井 将司 義務教育の財政について  
 森重 裕貴 PTAの問題点

## 11組 山田准教授

田中 奈津美 不妊治療という選択：その選択は幸せか  
 後藤 優斗 日本は移民を受け入れるべきか：日本の考え方  
 ★瀧川 日向子 日本は安楽死を認めるべきか：安楽死を経験した者は何を思うのか  
 村山 僚梧 早期英語教育について：手遅れになる前に  
 程 超 死刑廃止  
 小堂 李成 日本国憲法と自衛隊：憲法9条で考える改憲論  
 三輪 真子 帰宅恐怖症について：家に帰ることのできない夫たち  
 城 竜太郎 最低賃金法は必要であるか  
 町井 友哉 東京ディズニーリゾートの経営戦略：これからも日本一のテーマパークであり続けることができるのか  
 小林 由弥 就職協定の廃止についての是非：変わる就職活動  
 叶居 暉 太陽光発電について：普及の影で増加する様々な問題  
 柴垣 匡義 日本は消費税増税をするべきか：将来の日本の社会と消費税との関係性から  
 出口 采果 女性の社会進出を多角的に考える：国際的なデータから漫画・ドラマまで

本願 史帆 男子ということ、女子ということ：男女差別のある社会  
 太田 梨香子 共産主義の実現は可能か  
 小西 聖也 拡大し続ける少子化：日本に与える大きな影響  
 田中 楓弥 私たちはAIとどうかかわっていくべきか：AIが将来人類に及ぼす影響を考える  
 嶋田 有子 幸福度と所得の関係  
 藤野 直人 安楽死の合法化：安楽死は日本社会にとってプラスとなるのか  
 山田 哲平 高齢ドライバーの増加：運転免許証の自主返納は解決策となるのか  
 宮原 義規 ビットコインの可能性：オモテの世界とウラの世界  
 河野 公太郎 仮想通貨の将来性  
 細田 朋裕 選択的夫婦別姓制度を導入すべきである  
 大山 萌 銃の二面性：銃は本当に必要なのか  
 前田 笑吾 なぜ選挙権年齢は引き下げられたのか：選挙権に対する考え方  
 中田 亜美 安楽死について



## 12組 秋吉准教授

中井 亮太 広告による宣伝効果を上げるためにはどのようなすべきか  
 渡部 舜 企業は消費者のニーズに応えることができるのか～観光業において考える～  
 片岡 典加 待機児童問題が深刻化した大きな原因は何か？  
 赤田 明日花 待機児童によって引き起こされる問題とその解決策  
 山田 紗莉 企業は消費者のニーズに応えることができるのか～観光業において～  
 土田 庸介 待機児童問題を解決するには  
 竹内 美優 よい宣伝とは何か  
 深津 里紗 方言はなぜ残り続けるのか？  
 宮城 日向 待機児童問題と解決策  
 林 彩也香 女性の再就職はしにくいのか  
 中倉 葉南 方言は完全に消滅するのか？  
 山崎 留奈 介護職員の不足をなくすことはできるのか？  
 岡本 真治 より良いCMをつくるには？  
 杉村 圭太 方言は完全に消滅するのか？

中川 公太 介護施設職員不足をなくすことはできるのか？  
 澁谷 夏菜 女性の再就職はしにくいのか？  
 越智 絢菜 企業は消費者のニーズに応えることが出ているのか～観光業において考える～  
 山本 天音 介護施設職員不足をなくすことはできるのか？  
 宮崎 俊希 介護職員不足をなくすことはできるのか？  
 小島 一仁 方言は完全に消滅するのか？  
 ★須磨 瑞 企業は消費者のニーズに応えることができるのか？～観光業において考える～  
 飯島 加寿史 女性の再就職は難しいのか？  
 島 彩夏 テレビ広告（CM）の成功法とはなにか  
 中村 彩人 賃金格差  
 橋本 陸 女性の再就職は本当に難しいのか？  
 乾 碩人 日本における待機児童の原因は何か？

## 13組 白井准教授

大平 茉凜	婚活における逆選択とその対策
多田 絵里加	企業がInstagramを宣伝に用いる理由
松尾 恵理	「ふじ」が有名な理由
土倉 太一	日本の観光業の将来について
★菊田 昇剛	企業の就活ルール遵守について：繰り返しゲームによる分析
コールマン 開	プロ野球FA制度のゲーム理論的分析
引野 颯大	「浮気」の合理性分析
蔵端 佑太	日本人の英語力向上に向けて
山下 翔太郎	ラーメン屋の成長戦略
岸本 弓果	飲食店の専門店化に関する考察
吉田 温乃	自転車走行時の違法行為を減らすためには

有内 和来	現代のお見合い結婚について
細谷 真央	いじめ問題の戦略的分析
福田 隆太	コンビニエンスストアの成長戦略
林 史奈	コンビニがオリジナル商品を販売する理由
大塚 俊吾	スマートフォンゲームの現状と解決策
津田 篤志	「きのこの山」が売上を伸ばすには
岡野 晶	期間限定パッケージに関する戦略的分析



## 14組 田教授

松本 陸	学校教育と塾に通う価値の比較
川本 歩夢	グローバル時代における日本の銀行の未来
白石 雄暉	観光業による地域経済の発展
常陰 有咲	インターネット通販の拡大による日本の宅配業界における労働問題～ヤマト運輸における人手不足の現状と解決策～
伊並 裕介	女性の社会進出問題
山中 将生	地産地消推進のこれから
佐伯 里紗	コンビニエンスストアの将来におけるあるべき姿
芦田 魁	今後の出版業界について
川田 希	スターバックスと顧客満足
西村 彩花	若者の新しいコミュニケーション能力
宮脇 智也	若者のテレビ離れの現状と原因について
花崎 由弥子	ユニクロのヒットの法則
小森 敦史	日本の保育
小倉 菜奈子	高齢者の孤独死問題について
山本 聖輝	総合商社とケーススタディを用いた中国における環境分野の事業開拓

伊田 亮太	日本の自動車メーカーの未来
韓 東憲	急変する中国と中国語を学ぶ必要性
畑中 翼	日本のスポーツビジネス
南川 和紀	現在の広告業界とその展望
高木 健太郎	IR法案でのカジノ誘致はどこにするべきなのか 成功する投資家と失敗する投資家との違い
★廣瀬 哲也	限定の有無による消費行動の変化
★影山 万佑子	日本におけるショッピングモール
遠田 響香	YouTubeは我々にいかなる影響を与えたのか
佐藤 美空	ファストファッションの流行～流行があたえた影響とは～
吉野 妃奈	



## 15組 國濱専任講師

青島 諒典	迷惑行為
堀尾 圭	「交渉術」を磨くには
金谷 陸	なぜひとは必要以上に買ってしまうのか
甲斐 創太	LINE は本当に日本の生活を支えているのか
木之下 将剛	カジノ法案とその経済効果
黒田 真乃介	東京オリンピックは成功するのか？
趙 月	貧困な子供に対する学校の塾
塩川 裕也	コミュニケーション能力
金森 悠季	ケチの経営戦略
★豊田 紘平	地域再生を自分の町を例にして考える
竹澤 千里	セーリングはメジャースポーツになることはできるのか？
竹嶋 清華	これからのライフ・ワーク・バランス～ヤフーの実践する働く環境づくり～
伊藤 充	アニメ産業中心の地域活性化は可能なのか

臺 裕貴	学歴社会から見る日本社会の現状
小紫 翔太	地域再生における訪日外国人観光客の重要性
川本 双葉	どのようにしてKKK（クー・クラックス・クラン）が形成されたのか
梅田 泰地	AIの参入による影響
華岡 陸	大学で得られる力 大学の魅力とは何か
橋 知里	途上国障害者の貧困削減～かれらはどう生計を営んでいるのか～
宮本 将行	留学は本当に必要なのか
山本 悠太	脱労働化とベーシックインカム
村下 あずさ	捕鯨はやめるべきか？
吉村 賢斗	メジャーリーグの経営法
西名 愛莉	災害復興と私たち
山田 雪乃	ジェンダーと女性の社会進出
間島 拓哉	ポツダム宣言について



## 16組 河野教授

刑部 萌香	なぜ日本人は「おせち料理」を食べるのか
新田 海帆	医学部不正入試問題について
平生 実優	食品ロス問題
仲山 幸一郎	睡眠
小林 宗平	アメリカの格差社会
★杉山 詩門	英国のEU 離脱における経済的影響
和泉 智也	就職協定廃止の是非について
松谷 直樹	日本でのeスポーツ
白尾谷 太河	IR 法案
戸田 龍太	Abema TV はなぜ人気であるのか
肥塚 日菜子	キャッシュレス決済～電子マネーの興隆～
濱場 厚希	現代の音楽業界
中村 太一	累進課税制度について考える～最適な課税制度とは～
山田 美緒	子供と朝食の関係性について
佐藤 環奈	ふるさと納税の問題点
藤原 有希	ごみの排出量を減らすには
中野 笑	児童虐待の現状

水口 大勢	自民党の憲法改正法案について
池上 博子	YouTube の人気と影響について一テレビとの比較一
坂本 隼汰	衝動買いするカラクリとその対策
藤原 廉	乃木坂 46 は AKB48 を越えているのか
星島 莉緒	レジ袋の有料化によるメリット・デメリット
大橋 叶典	デジタルデバイス（情報格差）によって生じる問題点
新居 瑞貴	大地震後の経済状況について
萩原 楓	日本におけるアメリカンフットボールの普及
大石 量子	Queen

## 17組 大高教授

森田 大智 資本主義経済の中で幸せになれるか？  
 山田 葉名 これからの社会を生きていくに当たって  
 植森 力 テーマパークと資本主義  
 山本 泰熙 日本企業と資本主義 - 歴史から解く日本  
 型現代資本主義 -  
 石島 和真 エネルギー源の変化による資本主義社会の変化  
 林 潤一郎 社会保障制度と貧富の差はどのような関係  
 があるのか？  
 都築 遼太郎 資本主義社会と世界大戦  
 友澤 祐太 スマートフォン向け無料ゲームアプリケー  
 ションが受け入れられたわけ  
 後藤 安友実 資本主義の限界 - 資本主義から次世代経  
 済システムへの移行 -  
 荻野 涉 スポーツと資本主義  
 中山 心 資本主義に代わる新しいシステムはないのか？  
 荻野 千竜 日本の農業は大規模化が可能なのか？  
 戸田 颯 AIは資本主義に終止符を打つのか？  
 村上 泰成 アメリカの若者が資本主義に反発する理由

中瀬 りえる 産業資本主義からデジタル資本主義  
 阪本 直輝 仮想通貨は将来、金融資本主義にどのよう  
 な影響を与えるか？  
 高見 奨磨 資本主義と音楽産業  
 辰巳 萌 格差社会と貧困  
 西澤 奈那 デジタル資本主義への移行  
 潮崎 敦 外国人労働者受け入れ拡大による日本の変  
 化と今後  
 米倉 沙紀 現代資本主義と消費税増税の関連性  
 ★藤崎 和希 アニメーション産業の終焉 - 資本主義の  
 文化がもたらす弊害 -  
 名方 領 資本主義における中学教師の残業時間について  
 岸部 桃子 幸福度から見る資本主義の問題点  
 塚本 海莉 資本主義と日本の雇用形態  
 陳 虹伊 お金 2.0 による経済システム  
 丸井 咲穂 ブラック企業について  
 上田 修平 音楽ストリーミングサービスとこれからの  
 音楽市場の変化



## 18組 利光教授

高田 涼平 フリーターと与える経済影響  
 崔 盛皓 学歴が将来の賃金に関係があるか  
 細川 葵月 IRが日本にもたらす経済効果～日本は本  
 当にカジノを開設すべきか～  
 村本 滉平 今回の消費税の増税に伴う経済効果  
 武田 琴美 ハロウィンが日本に与える経済効果  
 民田 悠華 日本における外国人労働者  
 井上 優衣 韓国外食産業市場と日経外食企業の進出  
 才村 友香 ふるさと納税による経済効果について  
 杉村 知子 日本のキャッシュレス化について  
 辻井 海聖 経済学と心理学の繋がり  
 山中 綾乃 日EU・EPAが日本と世界に与える影響  
 大前 亮汰 2020年東京オリンピックのインバウンド  
 需要について  
 福澤 力 Jリーグのプロサッカー選手の移籍市場と年俵  
 田中 樹里 スノーリゾートの活性化  
 川淵 力哉 台風21号による経済影響～関西国際空港  
 の被害～

★山下 隼人 大阪万博の経済効果について～万博成功への  
 課題について～  
 網代 卯郁 日本の貧困・経済格差  
 阪口 真唯 衣服の廃棄物問題  
 鈴木 海地 スポーツと与える経済的影響  
 濱田 真 環境問題とその対策が日本経済に与える影響  
 前田 大晟 プロ野球が地域に与える経済効果  
 河野 誠 外国人労働者が与える日本への影響  
 上林 一成 eスポーツ市場と関連ビジネス  
 谷手 伶央 パズル&ドラゴンズの流行を行動経済学の  
 視点から見てみる  
 東 誠大 インバウンド効果の重要性とその対策  
 崔 彰桓 水道事業の問題は改正水道法で解決できるのか  
 小野 英悟 「ブラック企業問題」の発生と今後の展望

## 19組 藤田教授

高橋 樹 地域活性化を促す地方型ロックフェスティバルの可能性  
小笠原 彩華 子供の貧困と幸福度にはどのような関係があるのか  
西川 真司 少子高齢化による労働力問題に解決策はあるのか  
金和 修平 成人年齢18歳引き下げによる日本への影響  
樽谷 隆太郎 カジノ・IRが与える影響とはいかなるものか  
★杉山 竜也 出雲市経済活性化：出雲市の現状とこれから  
森合 美波 コトバ遺産：広告コピーが残したもの  
齋藤 祐希 日本の農業はいかなる状況にあるのか  
宇津木 茉奈 2025年大阪万博：エキスポ70から学ぶ成功のカギとは  
岩見 龍汰 動物園マネジメントから見る経営のあり方とは  
中村 さくら なぜ宝塚歌劇は100年以上続いているのか  
内山 七海 殺処分：犬・猫の殺処分ゼロは叶うのか  
潘 浩飛 中国の不動産バブル

岸本 陸 トヨタはなぜ一流企業になれたのか  
李 チェリン SNSマーケティングが時代を変化させる  
浅井 雪菜 「メルカリ」の経済効果とそれに伴う消費者行動の変化  
松岡 真那 「スターバックス」はなぜ日本で人気なのか  
松本 あずさ 母子世帯の貧困  
何 宗憲 資本主義経済が日本に与える悪影響  
榮阪 勇樹 日本の子供の貧困について  
小池 竜矢 災害によって進化したコンビニ：駿河・南海トラフ地震に向けて  
板敷 みさと 男女の就労の格差はなくなるのか  
石上 伊織 災害と復興支援  
有村 雄輝 生活保護の抱える問題



## 20組 山鹿教授

岡崎 実由 若者の読書離れは本当か？  
福留 一樹 若者の読書離れは本当か？  
徳富 敦也 若者の読書離れは本当か？  
清水 麻衣 若者の読書離れは本当か？  
井之上 桃佳 若者の読書離れは本当か？  
上村 洸太 若者の読書離れは本当か？  
小田垣 舞 若者の読書離れは本当か？  
前田 直輝 若者の読書離れは本当か？  
大津 慶祐 若者の読書離れは本当か？  
田中 志歩 若者の読書離れは本当か？  
岡本 遼太 若者の読書離れは本当か？  
榎 慎太郎 若者の読書離れは本当か？  
塩谷 大稀 若者の読書離れは本当か？  
梁 梵旻 若者の読書離れは本当か？  
稲角 曇 若者の読書離れは本当か？  
佐藤 晴生 若者の読書離れは本当か？  
千代川 広夢 若者の読書離れは本当か？  
森 裕紀 若者の読書離れは本当か？

柳田 勇人 若者の読書離れは本当か  
★岩崎 大智 「若者の読書離れ」の原因と解決策  
原田 海世 若者の読書離れは本当か？  
中江 健介 若者の読書離れは本当か？  
王 憶宏 若者は本当に読書離れか？  
井上 真以美 若者の読書離れは本当か？  
林 美来 若者の読書離れは本当か？  
東平 三四朗 若者の読書離れは本当か？  
瀬川 大翔 若者の読書離れは本当か？  
矢田 開渡 若者の読書離れは本当か？

## 21組 増永教授

山田 太一	アメリカのディズニーランド
★伊藤 叶恵	アマゾンとイノベーション—挑戦、失敗を支えるアメリカ文化
中川 大河	ITから見るアメリカ—グーグルから探るアメリカの姿
楊 鴻偉	教育格差から見るアメリカ
小川 良太	貧困問題から見るアメリカ
林 志因	ファーストフードによるアメリカの健康問題
中村 晴太	テーマパークとアメリカ
吉岡 慎吾	スポーツがもたらすアメリカの経済成長
茨木 玖水	銃社会アメリカ—規制をめぐる市民の本音と政府の実態
田村 みらい	ディズニーランド—アメリカの産業が育てたテーマパーク
阪本 優香	大学スポーツからみるアメリカ
杉園 大樹	アメリカにおける経済と野球
野口 望々花	アメリカにおけるスポーツと経済
岡田 浩夢	全米ライフル協会と銃規制

大串 まい	農業から見るアメリカ
松下 宗平	IT企業とその制度から見たアメリカ
小杉 蓮	アメリカの医療問題
中川 駿	ネットワーク社会から見るアメリカ—アメリカの本質と意義
永瀬 直哉	ITからみるアメリカ—なぜAmazonは利用されるのか
常石 愛佳	ネットワーク犯罪とアメリカ
中野 太護	アメリカ型競技から探るアメリカ
堂下 翔生	スポーツから見たアメリカ—アメリカ国民の健康意識
土田 果穂	アメリカの貧困問題—貧困問題を解決するための政策
高谷 治輝	ネットワークビジネスから見たアメリカ
須山 莉帆	ディズニーランドからみるアメリカ
藤武 駆	銃に対するアメリカ人の考え
酒井 大志	アメフトがもたらすアメリカの経済成長



## 22組 神崎教授

朝倉 健太郎	日本人と食
越智 達志	詰め込み教育は否定されるべきか
藤川 奈々	日本人とファッション
川端 理沙	日本人と外国文化
岸下 結菜	日本人と建築
近藤 世莉奈	日本とアメリカの食生活
黒田 千夏	日本と外国の文化の違いについて
秋元 愛花	日本人とボランティア
鈴木 貴裕	日本は単一民族国家 多民族国家どちらに当てはまるか
荒田 素子	日本人と映画
金井 宏樹	日本人と韓国人
全 永敏	日本人とカラオケ
脇本 泰成	日本人とスポーツ
白濱 哲史	日本人と外国人のお金
丁 海成	日本人の迷惑文化
濱野 凌大	日本人の動物観
大文字 弘行	日本人と言葉

一山 僚汰	日本人の食生活の変化
小瀧 貴大	日本人の労働状況
黒田 和希	日本人とお金
宮田 梨咲子	日本人とグローバル社会
堀本 隆一	日本政府の景気判断と人々の実感
射場 直希	日本とアメリカの食文化の違い
★米澤 慧	日本と欧米—表情の読み取り方の違い—
延川 真穂	日本人とグローバル化時代の教育と人材育成
栗田 雛美	日本人と方言

## 23組 敵准教授

東條 陸	若年男女がそれぞれお互いに求める“魅力”とは一体何なのか？
橋井 晴香	睡眠不足
山本 誠馬	人口減少から考える過疎地域の町おこし
小川 大賀	部落差別の問題
★平本 航也	イルミネーションの歴史と経済効果
門岡 弘樹	TPPと日本
大門 弘明	スポーツ界とバワハラ
稲葉 涼太	日本スポーツ界におけるバワハラ問題について
大内 美裕	ファストファッションを研究する一服の力を社会の力にー
小笹 夏実	少子高齢化のメリット
坂井 葵	温暖化対策税の継続
前田 倅実	SDGsが日本の経済に与える経済効果
堂山 健太	なぜ日本では少子化が進むのか
崎山 璃子	商業広告と消費者の購買行動の関係性
山本 聖太	国際比較から考える日本の少子化
高橋 紅羽	多文化共生が与える影響

種 順	E-sportsの発展及びその影響
鶴来谷 萌	法律婚との再考日本の文化から見る同性婚
佐竹 一真	日本のアパレル市場の変化とファストファッションがもたらした影響
中道 優斗	バイオメカニクスから見る効率的な「歩行」
清水 悠太郎	日本における選挙の投票率について
井尻 愛	世界遺産登録がもつ自治体へのメリットについて
川崎 萌々香	関西地方での観光産業における一考察
岡田 祥輝	沖縄基地問題の一考察ー歴史と経済ー
★秦 梨枝夏	世界のベーシックインカム導入への一考察



## 24組 長谷川准教授

村上 明	広告がもたらす経済効果～広告を用いて売り上げを伸ばすにはどうすれば良いか～
那須 亮介	どうすればゴルフが上手くなるのか
近藤 ひかる	ゆるキャラと経済効果の関係とは
大西 雄貴	スマホ依存症
西 稜子	東京一極集中による人口減少
阪井 日向	FIFAワールドカップの経済効果
上中 佑介	日本におけるフェトレード普及の課題と解決ー日本がフェアトレード先進国に追いつくためにー
野村 寧浩	マルタン・マルジェラと民藝
町田 寛男	日本の道路混雑の現状と今後の解決策
中村 亜聖	マフィアと政治家
★武田 裕紀	日本の「食品ロス」問題～食料廃棄を削減するために～
中野 将希	高齢者による二輪車乗車時の事故の多さ
森山 桃花	少子化と日本社会
村尾 慶伸	バイク離れ

長谷川 愛里	飲食店の敵
竹田 啓悟	日本サッカークラブ売り上げ最大化のための最適解
菊川 和真	2025年問題が引き起こす年金問題にどのように対策すべきであろうか
有年 大祐	「大阪万博」誘致の是非について
本木 智裕	なぜ合気道は人気スポーツにならないのか
杉山 和輝	宗教の必要性
森鼻 咲希	被災地への継続的な支援方法～私たち個人ができることは何か～
折戸 はるか	先天性音楽機能不全について～音痴は治るのか～
伴野 花林	これからのらーめんとは？
出戸 彩夏	日本の食品ロス問題
天野 大輝	老朽化が進行している日本のインフラ
欠野 翔太	大阪万博の決定について

## 猪野 弘明ゼミⅡ

## 経済学士力

覚えているだろうか。募集時に挙げた本ゼミの目的は「経済学の理論と応用を勉強し、経済学的思考力を身につけた人材を輩出すること」「その証として卒論を書くこと」であった。そこで、経済学的なものの見方を実践して卒業論文を作成できたかという独自基準で、成績とは別にゼミ全体の経済学士力を測ることにしている。結果、この学年の経済学士力は38%であった。去年度の卒業生の値は45%であったので、微減となった。ただし、上記数字には途中で卒論作成を諦めてしまった者も含めている。辞める者の割合は去年度と比べ微増であったため、数値にさほどの変化はない。また、今年度の卒論のアイデアにはきちんとしたアカデミックなものが多かった。卒論を書くインセンティブの少ない現行制度下で、自身の研究を集大成させるよう頑張った学生は、真の「経済学士」である。最後に、下記の優秀論文「コメ自由化」は古いテーマながら、データを現在に更新したのみならず、需要要因の識別・減反下で市場データには現れない供給曲線の推定などに取り組んだ意義深い論文であり、本ゼミでは初の卒論満点をつけさせていただいた。「4時間の壁」の論文は次点であり、例年であれば優秀論文になる可能性も十分であったことも付記する。

## 卒業論文一覧

稲川 和希	航空産業の矛盾点
善生 凌一	仮想通貨に関する調査論文
細田 明裕	非合理的な人間行動の分析
小部 篤志	中長距離における新幹線と航空の競争ついて～4時間の壁の検証～
鵜鷹 祐熙	音楽配信市場におけるサブスクリプションの事例分析～メニュープライシングの観点から～
★石本 康輔	コメ輸入自由化の実証分析～減反政策の効果も含めて～

## 秋吉 史夫ゼミⅡ

## 「3期生のみなさんへ」

卒業おめでとうございます。3期生は24名でスタートしましたが、ほぼ全員が最後までゼミでの学習を続け、こうして卒業の日を迎えられたことをうれしく思います。

みなさんには授業だけでなくさまざまな課外活動にも取り組んでもらいましたが、しっかり頑張ってくれました。特にゼミ生全員が各チームに分かれて取り組んだビジネスアイデア・コンテストでは、小川君・木原君・梅本君・細見君のチームが最終審査に残るなど素晴らしい結果を残してくれました。残念ながら優勝には届きませんでしたが、ビジネスアイデア・コンテストへの挑戦はこれからも後輩のゼミ生に引き継がれていくと思います。

またゼミ合宿（滋賀近江八幡、京都大原）、他ゼミ・他大学との合同ゼミ、ゼミ縦コンは、私にとって思い出に残るイベントです。世話役を務めてくれたゼミ役員のみなさん（金丸君、苦木さん、中津君、小川君、梅本君、細見君）、参加して盛り上げてくれたみなさん、ありがとうございました。卒業論文では、企業の財務データを分析し、企業価値を推定する研究に取り組んでもらいました。どの論文も、みなさんの成長が感じられる良い論文に仕上がっていました。

では、さらに成長したみなさんに会えることを楽しみにしています。お元気で！

## 卒業論文一覧

鈴木 雄大	旭化成の企業価値評価（共著論文）
築山 拓哉	トヨタ自動車の企業価値評価（共著論文）
★橋本 尚哉	三井不動産の企業価値評価（共著論文）
小川 淳史	イオンの企業価値評価（共著論文）
木原 優樹	トヨタ自動車の企業価値評価（共著論文）
梅本 隆正	イオンの企業価値評価（共著論文）
新井 爽香	明治HDの企業価値評価（共著論文）
松本 将	ファーストリテイリングの企業価値分析（共著論文）
中津 開	ファーストリテイリングの企業価値分析（共著論文）
片木 美波	明治HDの企業価値評価（共著論文）
越知 洸音	明治HDの企業価値評価（共著論文）
山西 志歩	東宝の企業価値評価（共著論文）
山本 航	ブリヂストンの企業価値評価（共著論文）
相田 誠二	アシックスの企業価値評価（共著論文）
稲岡 良紀	アシックスの企業価値評価（共著論文）
苦木 瑚々呂	東宝の企業価値評価（共著論文）
矢田 拓末	ブリヂストンの企業価値評価（共著論文）
★竹原 央	三井不動産の企業価値評価（共著論文）
★伊藤 寛也	三井不動産の企業価値評価（共著論文）
★金丸 眞弘	三井不動産の企業価値評価（共著論文）
橋本 倅弥	旭化成の企業価値評価（共著論文）
細見 廉	イオンの企業価値評価（共著論文）
西 康征	三越伊勢丹HD企業価値算定（共著論文）

## 加藤 雅俊ゼミⅡ

### ゼミメンバー全員へのメッセージ

今年度卒業論文を執筆したのは1名でした。執筆したゼミメンバーには心から賛辞を贈りたい。同時に、それ以外の者を含め、ゼミメンバー全員の今後の活躍に大いに期待し、心からエールを贈りたい。

ところで、卒論執筆の価値はどれほどあるのだろうか。執筆することは本学では強制ではなく、卒業に必要な単位が揃えば卒業できる。単位数を揃えることだけを考えれば、卒論を執筆せず、同じ単位数を容易に修得できる他科目を履修する方が合理的であるかもしれない。

しかし、大学の学習において最も成長することができる機会が「研究＝卒論執筆」であり、この機会を放棄した者が多かったことは残念である。卒論執筆においては、先行研究サーベイをもとに、自ら問いを設定し、それに対して理論的・実証的な根拠を提示した上で何らかの答えを出していく。そこでは、“Analytical and problem-solving skill”が養われる。このような能力はすぐに見える形で役に立つ訳ではない。社会人となると、学生時代とは違った困難に直面し、様々なプレッシャーと格闘することになり、そういったときにこそ上述の能力が効果を発揮する。いずれ「学び直し」が必要になる。卒論を執筆した者もそうでない者も、小手先の知識やスキルに頼ることなく、自分の潜在的な能力を發揮し、成長するための学習（たとえば、読書やMBA等修士取得）を続けることを強くお勧めしたい。

### 卒業論文一覧

★堀井 将貴 合併はパフォーマンスを向上させるか一日本の金融業界に関する実証分析—

## 上村 敏之ゼミⅡ

### 上村ゼミ9期生に贈る言葉

今年1月の最後のゼミで、ゼミ生の皆さんには、2年半のゼミ生活を振り返り、言葉を1人ずついただきました。教員である私には、見えるところと、見えないところがあります。私には見えないところでも、皆さん1人ひとりが、ゼミについて楽しんでたこと、悩んでいたことを、皆さんの言葉から伺うことができました。

皆さんからは「コミュニティ」という言葉を多く聞きました。皆さんにとって、上村ゼミは「コミュニティ」であり、「居場所」だったのでしょうか。この「居場所」こそ、皆さんの大学での最大の収穫だと思います。

私からは「仕事上の友人と大学の友人は決定的に違う。大学の友人は仕事とは無縁だからこそ、つなげる価値が高い。しかし、そのようなコミュニティの持続には努力が必要だ」という話をしました。この真の意味は卒業してから分かると思います。

是非とも、貴重な上村ゼミというコミュニティを持続させてください。新年会ではお互いの成長を喜び合ひましょう。上村ゼミの「居場所」は、9期生だけのもものではありません。ぜひ、皆さんの「居場所」を、先輩と後輩を通じた縦の「居場所」に拡張し、豊かな人生を送ってください。

ご卒業おめでとうございます。

### 卒業論文一覧

★原元 淳也	航空祭が地方に与える経済効果に関する研究：ブルーインパルスに焦点を当てて
相原 克哉	交通と地域社会：交通まちづくりに焦点を置いて
田淵 絵菜	日本におけるペット市場：殺処分をなくすには
柿原 奈都子	ネットショッピング市場の今後について
大橋 七海	教育格差の広がりとその改善に向けて
中後 智貴	Jリーグをより活性化させるには
赤松 直哉	キャッシュレス経済推進による我が国の経済動向
鳥山 有香	日本のカフェ市場に関する研究
佐藤 陸	日本の航空産業の現状と展望
森脇 三知加	SNSの経済効果と地域活性化
宇都宮 優生	日本のゴルフ産業が発展するには
森田 隼斗	日本の少子高齢化の現状と展望
吉澤 英志	M & Aが日本に及ぼす影響
坂根 佳菜子	小規模飲食店の存続について
末廣 茜	映画がヒットすることで生み出される経済効果
橋本 尚吾	家庭環境と経済学
笹本 実	訪日外国人観光客による経済効果のための日本のおもてなし向上の研究
東 英輔	ワークシェアリングの社会影響に関する研究
水元 彩花	B級グルメと地域活性化についての研究
武田 巨永	企業運営における次世代型組織の導入について

## 國枝 卓真ゼミⅡ

## 國枝ゼミ2期生、絆は緩いが、みんな優秀でした

学術論文の評価は、idea, technique, expositionの3視点から行うことに決めている。卒業論文もこの3視点から評価したが、学部生のtechniqueは未熟なので、このウェイトは低くした。優秀論文の最終選考に残ったのは渋谷・菅論文、高木論文、藤原論文の3論文である。渋谷・菅論文は中国の「一帯一路」政策を論じたもので、報告書として見れば充実した内容であった。高木論文は、効率的市場仮説を日本の株式市場のデータを用いて検証したもので、完成度は非常に高かった。藤原論文は、日本経済におけるフィッシャー効果と流動性の罫について分析したもので、日本経済を金融的側面からよく説明していた。どれも優秀論文に値するものであるが、一つ選ばなければならぬ。本ゼミでは2年半、マクロ経済学の基本理論を学んできた。そこで、本ゼミで学んだマクロ経済理論に現実経済を照らし合わせながら分析を行った藤原論文を優秀論文として選出することにした。これら3論文以外についても面白い論文ばかりで、すべて卒業論文として充分合格点まで達していた。國枝ゼミ2期生の絆は緩かったが、みんなクールで優秀であった。卒業、おめでとう。

## 卒業論文一覧

高木 陽平	効率的市場仮説と投資家の収益
菅 貴央	中国一帯一路構想の展開と今後の日本の関わり
渋谷 航平	中国一帯一路構想の展開と今後の日本の関わり
安藤 壮哉	イオングループのプライベートブランド「トップバリュ」について
渡邊 航平	日本経済におけるふるさと納税の存在意義
衣川 寛優	天災による金融商品の価格変動
奥野 祥大	天災による金融商品の価格変動
守屋 諒一	「インバウンド・ツーリズム」と「医療サービス」の連携による「ウェルネスツーリズム」の考察
岡本 佳大	飲食店における喫煙環境の変化とその効果
下川 桃子	飲食店における喫煙環境の変化とその効果
谷山 右恭	飲食店における喫煙環境の変化とその効果
末田 健太郎	喫煙率とGDPについて
★藤原 將記	現在の日本におけるフィッシャー効果と流動性の罫の検証
鈴木 智之	日本版NCAA創設への課題

## 河野 正道ゼミⅡ

## 最後のゼミ生たちへ

私は24年間関学に勤務し、今年が最後の年である。したがって、君たちは、記憶に残る卒業生のはずである。

2年次後半の研究演習入門はミクロ経済学の入門書の輪読から始まった。研究演習Ⅰでは『マンキュー経済学』のマクロ編を輪読した。ミクロ、マクロと幅広く学習したのは、公務員試験に合格する程度の基礎力を獲得する、という目標を立てたからである。最終的に、卒業論文を提出したのは4人であった。最も熱心にゼミ活動に専念していたのは宮川光次郎君であった。彼は3年終了時に飛び級で大学院へ進学し、河野ゼミを離脱したが旧友の卒論のアドバイスのためにゼミに顔を出してくれた。沼本蔵君は、マクロ経済学の分野でアベノミクスと金融政策について論文を書いた。これには、大学院生として金融論を研究している宮川君のアドバイスがかなり生かされている。橋本菜青さんと梅谷咲さんは限界集落の活性化について共同研究した。谷萌子さんは、教育と経済格差の関係について書いた。ラグビー部員の中田耀一朗君は卒論への意欲は十分にあったが教職のための授業とゼミが重なったために卒論を諦めたのは残念であった。

皆さん、まずは健康、お元気で。

## 卒業論文一覧

★沼本 蔵	アベノミクスと金融政策
橋本 菜青	ストックビジネスで考える地域活性化
梅谷 咲	ストックビジネスで考える地域活性化
谷 萌子	教育が及ぼす将来格差



## 栗田 匡相ゼミⅡ

### My Endless Love to K5

K1 から K4 によって育まれてきたことを引き受け、そして K6 や K7 に出会ってくれた君たちだから、それぞれでやり方は違えど、人の心に活力を与える能力が君たち一人一人の中にしっかりと存在していることを僕はとてもよく知っています。それを私たちは愛とか希望とかと呼ぶのです。だから、たとえば世界から見捨てられたようにみえる人々に出会ったときに、君たちはそこに彼らの生きてきた人生のラインを必死に見極めようとしていました。アンカンソベ、チル、アンチラベ、タナで生きてきた貧しき人々は見知らぬ異国の若者との邂逅に心のざわめきを覚えていたはずで、世界のざわめきを聴き取る能力を得た人だけが正しく世界を作り直して行くことが出来ます。だから、そんな君たちが語る正しさを僕はとても信じています。君たちの正しさは君たちだけのものではないことを君たち自身がよく分かっているからです。いかに世界が絶望的に腐敗していても、K の意志を継いで、未だ見ぬ誰かに、この世界の様な場所で、愛と希望を届けてください。君たちはまぎれもなく生みだせる人です。君たちと出会えて僕は本当に幸せでした。愛を希望をありがとう。

### 卒業論文一覧

栗井 大貴	カンボジアにおける女性の特性が子どもの人的投資に与える影響
神原 明里	中国の農村から都市に移住する移民児童と都市出身者である児童の教育格差
黒石 健太朗	カンボジア農村における子どもの健康・栄養状態の決定要因～母親の特性に着目して～
牧野 愛	インドネシアにおける性格診断 (Big Five) ならび個人パフォーマンスとの関わり
加藤 要	カンボジア農村部における天候が農業へ与える影響の推定～確率的フロンティア分析を用いて～
岡 弘敏	関西中小企業における海外展開決定要因分析～組織管理スコアを用いて～
住吉 咲久良	マダガスカル農村における子どもの健康・栄養状態と空間的自己相関の検証
菅原 萌子	ケニア ニャンザ地域における女性の自律性が子どもの児童発達に与える影響
首藤 麻友	ボルボト政権時代が教育と家計の脆弱性に与える影響
河端 里咲	中小零細企業における企業家とネットワーク中心性がパフォーマンスに与える影響～インドネシアジョグジャカルタ近郊チュベル地域を事例に～
★菅野 裕介	カンボジアにおけるショックが子どもの健康・栄養状態に与える影響～出稼ぎに着目して～
岩田 結	ガンビアにおける学校環境と家庭内環境が子どもの成績に与える影響
松浦 颯	カンボジア農村におけるメディアの使用頻度が主観的幸福度に与える影響
中野 隆一郎	夫婦間のリスク選好・時間選好・損失回避の格差が主観的幸福に与える影響～マダガスカル農村におけるフィールド実験より～
酒井 菜緒	ケニアの HSNP 現金給付プログラムにおける子どもの教育のインパクト評価～女性の現金使用方法決定権に着目して～
村上 鈴佳	カンボジアにおける親の教育と家庭内暴力が子どもの教育に与える影響
上村 光	西アフリカ諸国におけるモバイルマネー普及が企業の固定資本投資に及ぼす影響～インフォーマルセクターを考慮した要因分析～
田中 雄太	カンボジア農村における母親の健康意識の要因分析

## 久保 真ゼミⅡ

### 栄えある (?) 久保ゼミ四期生の皆さんへ

21 名でスタートした四期生ですが、7 名が卒業論文を書き上げました。絶対数においても比率においてもこれまで一番低い数字で、特に、最終学年になってから卒論執筆を断念する方が多かったのが特徴です。2018 年度秋学期より在外研究に従事することとなり、ゼミ運営をまったく不十分にしかできなかったことが主因であり、卒論を断念してしまった方だけでなく無事卒論を書き上げた方に対しても、申し訳なく感じています。

実質 2 年間のゼミ指導でしたが、正直申し上げて、皆さんとのゼミの時間は楽しいものでした。遅刻や欠席、提出物の遅れなど、頻発しましたが——おそらくこれもこれまで一番です (笑) ——、教室でも合宿先でも、積極的な、しかし同時に多様な言動が見られ、ゼミらしいゼミだったように思います。最終的に卒論を書き上げた顔ぶれを思い浮かべてみても、良い意味で「自律的な」方たちばかりで、指導教員の至らなさを補ってくれました。ありがとうございます。

卒業後は (ひょっとして単位不足で留年する方がおいでになるかも知れませんが、「来年度以降は」と書くべきでしょうか)、これまで以上に、他者と積極的に関わり、本を読み、旅をして下さい。豊かで楽しい人生を、そしてできれば周りに良い影響を与えるような人生を送られんことを祈っています。

### 卒業論文一覧

本地 智大	選挙における「マイナス票」の是非——より多くの民意を反映するために何をすべきか
田熊 大幹	いかにして総人口減少に適応した電力供給を行うか
★中村 駿莉	人生 100 年時代到来——超長寿社会を豊かに生きる方法とは
長迫 孟	人工知能と労働の関わり——人工知能は人間の働き方にとどのように入り込んでくるのか?
城間 友樹	芸術と革命の関係性——1848 年革命期のパリとウィーンにおいて
北田 一樹	ビッグデータ時代における社会主義計画経済の再燃——社会主義経済計算論争再考
安達 陽香	スタジオジブリの今後——ジブリの核を残していくためには

## 古澄 英男ゼミⅡ

## 「ゼミ二期生の皆さんへ」

ご卒業おめでとうございます。去年もそうだったのですが、研究演習入門で初めて会ってから、あっという間に二年半が過ぎていったという感じです。

一番印象に残っているのは、みなさんと初めてゼミコンバをしたときのことです。自己紹介の代わりにここでは書くことができないことを始めたときに少し驚き、さらに全員がその要求に答えていったのはかなり驚きました（関係者以外には意味不明ですみません）。正直に言って一緒にやっているか不安になりましたが、ゼミを重ねていくうちに言いたいことを言い合える雰囲気となり、楽しく過ごすことができました。また、ゼミの運営では皆さんにいつも迷惑をかけてきましたが、半数近くの学生が卒業論文を提出しよく頑張ったと思います。

ゼミ二期生は男子ばかりで品のあるゼミではなかったかもしれませんが、さまざまな個性を持つ楽しいメンバーが集まったと思います。卒業後はそれぞれの道に進まれますが、新しい場所でも自分らしさを失うことなく活躍されることを願っています。

## 卒業論文一覧

荒川 陸	どのようにして強いチームは生まれるのか—帝京大学、関西学院大学から見えるもの—
新木 智博	カカオ産業が生き残るためには
高槻 亮太郎	地方銀行のこれから
木村 翔太	どのようにして強いチームは生まれるのか—帝京大学、関西学院大学から見えるもの—
井上 亮	自分なりの少子化対策論
★山本 航希	化学業界の株価と為替レートの関係
竹尾 勘汰	企業の社会的責任の企業価値向上に及ぼす肯定的な影響
松永 雄太	地方銀行のこれから

## 桑原 秀史ゼミⅡ

## 経済政策の奥深さを求めて 桑原秀史ゼミ

私たちのゼミは、日本経済と経済政策をテーマに、合同ゼミを始めとする諸目標をもって、活発に勉強し、友達同志の交流を図ることに努めた。情報メディア教育センターを利用しての統計や計量分析のデータ処理の実習は、今後、有用かつ実践的な技術となることでしょう。情報センターでの学習から始まり、世界とアジア経済の動向、中国経済とマーケティング、流通と産業組織の研究、公益事業の企業戦略と競争政策、今後の社会保障のあり方、企業経営のケース・スタディなどを取り上げ、充実したゼミ生活であった。

とくにブランド・マーケティングの市場調査をめぐる勉強は、関心の深い、実践的なものであった。合同ゼミナール、課題レポートの提出など、多くの有意義な時間をもつことができた。なかでも、京都河原町での発表、洛中でのディベート、烏丸東洞院通りでの夏季合宿、建仁寺などは、思い出深いものでしょう。阿弥陀堂、奥の院など連なる堂塔の建築美が山あい映え、貞観のころからの日本の伝統の美しさで経済政策のあり方について、語ったことを思い浮かべるであろう。

将来、ゼミナール諸君が、大きく羽ばたくことを祈って、「高啓」の詩をおくりたい。

「春風 江上（こうじょう）の路 覚えず 君が家に到る」

## 卒業論文一覧

青木 千紗	キャッシュレス社会と日本
松崎 晴子	人生におけるお金の意義
★中谷 壮吾	今後の携帯料金について
岸下 大斗	日本のキャッシュレス社会の実現に向けて
岩本 紗月	日本における ICT 教育の展望
宮村 梨花	責任ある投資は日本で実現可能か
橋本 夏葵	外国人労働者、移民を受け入れる日本のあり方
輪嶋 純樹	日本中央競馬会の経済効果と今後の課題
松原 亜莉紗	同一労働同一賃金によって誰が一番得をし、誰が一番損をするのか
文達 彩花	現代の結婚式の傾向と婚礼業界
上田 実穂	相続税対策と生命保険
奥田 健吾	インバウンド観光戦略
山本 祐樹	日本の製造業が今後アジア・世界でどう生きていくのか—中国・ASEAN 地域と日本—
松井 健祐	積立の投資信託は安全なのか
藤井 彩夏	損害保険業界の今後の成長性
瀧口 悟史	LCC の事業展開とその影響
甲斐 結衣	マクドナルドの顧客調査とマーケティングについて

## 新海 哲哉ゼミⅡ

### 「慶応大学との合同ゼミ開始の第2期生 卒業おめでとう。」

2回生の研究演習入門では6名でスタートし、3回生で2人が去りましたが、第2回の慶応義塾大学商学部 大野由香子ゼミ、関学経済学部 猪野弘明ゼミとの第2回合同ゼミを2018年1月8日に京都のトラベラーズインの貸し会議室で開催し、1つのグループ研究報告を行いました。報告グループ論文タイトルは「UBERとタクシー ～余剰分析と動学モデル分析を用いて～」班の各メンバーは、11月の学内インゼミ大会後も、ゼミとサブゼミに加え、それ以外の時間外に集まって、努力しましたね。12月はじめ合同ゼミの直前までは一抹の不安を抱えながら見ていましたが、慶応大との合同ゼミをやり切ったときの充実感を忘れないでください。4回生は、公務員採用試験、就職活動のさなか1名の仲間がゼミを去りました。しかし、慶応義塾大学商学部大野由香子ゼミ、関学経済学部 猪野弘明ゼミとの第3回合同ゼミを2018年12月8日に金沢のTKP金沢新幹線会議室にも参加し、ホテル兼六荘で卒論指導もそこそこに、残った諸君は頑張って、卒論を仕上げました。中にはモデル分析で苦戦する人もいましたが、何とか全員が卒論を書きました。忙しい日々でしたが、諸君の大学でのしんどかったけれど、懐かしい思い出になってくれると信じます。お疲れ様。ご卒業おめでとうございます。諸君の卒業後のご活躍を祈念します。

#### 卒業論文一覧

井面 雄硫	システムインテグレーター業界の多重下請け構造について
濱崎 圭太	最低賃金の労働市場・経済への影響
★串部 泰行	企業規模間による特許出願の意思決定の違いに関する理論的考察

## 小林 伸生ゼミⅡ

### 我がゼミ前半生の末っ子たちへ

小林ゼミ12期生との2年半は、本当に色々なことがありました。私自身も初めての経験も少なからずありました。

2016年夏の結成時は、27名でスタートしました。その後、様々な理由でゼミ活動を離れる学生があり、最後までゼミ活動を成し遂げたのは17名と、歴代の学年の中でも最も少ない人数でした。しかしその分、深い付き合いができたのではないかと思います。幾度となく研究やディベート準備の進捗に対して叱咤激励したり、ゼミ運営の在り方について、腹を割って相談させてもらったりしました。最後まで、卒業論文の中間発表段階では少なからず不安でしたが、最終的な成果物は概して水準が高く、歴代で見てもかなり良い出来栄えのものが多数ありました。皆の頑張りには敬意を表します。

私の研究期間の関係で、2年間ゼミ募集を止めたため、皆には在学中に後輩を見てもらえなかったこと、お詫びします。12期生はいわば、私のゼミ指導生活の前半生の中の、可愛い末っ子です。

来春から再び、新ゼミ生を募集します。新たな後輩が得られた時には是非、上ヶ原に様子を見に来てください。小林ゼミの縦のつながりの強さを、これからもお互いに楽しもうではありませんか。また会いましょう！

#### 卒業論文一覧

山崎 優花	商業化による空港の黒字化～稼ぐことのできる空港にするには～
目出慎之介	阪神タイガースの収益モデルについて
★鈴木 優也	日本の製造業における多角化についての実証分析（共同論文）
重政 沙樹	若年世代の家計行動 将来不安と貯蓄率
高松 夏希	結婚の意思決定に関する一考察
奥河 泰知	都道府県別学力調査から見る中学生学力の要因分析～大阪都構想による大阪の諸問題解決～（共同論文）
松本 知也	育ち方が後の所得に与える影響について
渡邊 俊介	多項ロジットモデルを用いた土地利用選択の要因分析～自然条件に着目して～（共同論文）
浦井 結香	起業後進国日本における女性の起業活動
備本 将	多項ロジットモデルを用いた土地利用選択の要因分析～自然条件に着目して～（共同論文）
大園 雄一	日本のアパレル産業に関する一考察
石津 咲椋	企業のIT投資に関する一考察
★永田 和穂	日本の製造業における多角化についての実証分析（共同論文）
松瀬 清香	わが国のNPO法人分布に関する経済分析
平野 任菜	都道府県別学力調査から見る中学生学力の要因分析～大阪都構想による大阪の諸問題解決～（共同論文）
溝上 唯	農業の危機と第6次産業
★島田 七帆	日本の製造業における多角化についての実証分析（共同論文）

## 田中 敦ゼミⅡ

### 最高の仲間!! 最高の先生!!!

大学2年の秋から始まったゼミ活動。今振り返ると、たなあつゼミに入ることを決めた自分に盛大な拍手を送りたいなと思います! Tゼミメンバー、出会った当初は「おとなしい」イメージでしたが、今となっては、個性豊かなメンバーの集まりだったなと思います。『勉強も遊びも全力で行う!』、このゼミのモットーに恥じぬほど、何事にも全力で取り組んだTゼミでした!

思い出深いのが、東京研修とグループ研究です。東京研修では、2日間を使い、金融の中心である日本銀行と東京証券取引所を見学させていただきました。社会人になっても滅多に訪れることはできない場所に訪問させていただき、一生の思い出ができたと感じております。そのほかにも、国会にまでお邪魔させていただき感激でした! 夜はもちろんお酒を飲み交わし、勉強も遊びも全力で楽しんだ旅行でした!

グループ研究では、1年間グループで論文作成を行いました。先生の優しくも厳しい指導のもと、どの班も最終的には論文を完成させたことは今となっては良き思い出です! たなあつゼミでの経験すべてが私たちの思い出であり、社会人になるのに大切なことを学ばせていただいたと思います。

田中先生! 本当にありがとうございました! またみんなでお酒を飲み交わしましょう!!!

### 卒業論文一覧

岡野 玲那	アジア通貨危機を経てアジア共通通貨導入の可能性
川合 輝尚	同上 (共同研究)
松尾 英里香	同上 (共同研究)
本間 春樹	キャッシュレス社会の実現において地域金融機関が果たすべき役割とは
石本 麻奈	同上 (共同研究)
吉田 菜央人	同上 (共同研究)
筒井 佐紀	異次元緩和の限界
津村 梨沙	異業種の銀行業参入の対抗策としてのメガバンクのオープンAPIの有用性
水井 菜穂	同上 (共同研究)
永田 健悟	規制により生じるインセンティブを考慮した新たな銀行監督アプローチの検討
芦北 夏輝	マイクロファイナンス導入による日本起業環境への効果
生田 涼子	同上 (共同研究)
小島 柊人	同上 (共同研究)
松村 志穂	現状のキャッシュレス政策の限界と今後の展望
山田 涼子	同上 (共同研究)
谷口 勝哉	現行政策から考える日本銀行の独立性の必要性
岡本 和	低格付社債市場の問題点と今後の展望
越智 星翔	内部統制報告義務下のベンチャー企業の株式公開
横島 みのり	社会保障不信時代における投資の有用性
吉田 隼樹	日本におけるキャッシュレス推進政策の有効性
★堤 健登	異次元緩和の有効性～交易条件と日本経済
呉 偉	人民元の国際化にむけて

## 高林 喜久生ゼミⅡ

### 証拠を押さえて

みなさん方は高林ゼミの22期生になります。ふだんはおっとりしていても「やるときはきつとやる!」という潜在能力の高さを見せてくれました。

とくに3回生のとき、4大学対抗ゼミ(6月、同志社大学会場)や5大学7ゼミ合同ゼミ(9月、関学会場)で見せたがんばりは目を見張るものでした。後者は当番校としてホストゼミもつとめました。ゼミ伝統(?)の「超短期集中型」ですが、最後の集中力はすごいものでありました。その中で「勉強することも面白い」ということをわかってもらえたでしょうか。共同論文も「甲子園の経済効果」、「なぜ大阪の地価は名古屋に負けたか」、「スポーツの経済分析-関学体育会のアンケート調査から-」とユニークなものでした。

卒論のテーマは以下の通りで、ちょっと財政学のゼミとは思えません。ただし、独自のデータ分析を織り込むことを卒論作成の基本条件としました。社会に出ても「証拠を押さえて議論する」という姿勢は持ち続けてほしいと思います。

本当にこの2年半の間、いろんなことがありました。甲子園球場に、みんなで繰り出したことも楽しい思い出です。5年後、10年後にさらに成長した姿でお目にかかることを楽しみにしています。

### 卒業論文一覧

佐多 美貴	美意識と経済・歴史・社会 (共同論文)
真鍋 綾子	美意識と経済・歴史・社会 (共同論文)
上島 賢也	日本酒の未来 (共同論文)
園田 聖剛	美意識と経済・歴史・社会 (共同論文)
田中 雄介	ゴルフの再興
福田 孝行	所得階層の固定化-奨学金の必要性-
北島 克紀	統合型リゾート施設(1R)推進法案とその経済効果
★安木 廉	救急医療の現状と課題-住民・医療供給者それぞれの目線からの現状分析-
矢野 翔大	コンビニはなぜ日本で根付いたか
井上 啓太郎	日本酒の未来 (共同論文)
村田 有希	笑いビジネスの可能性
佐藤 天斗	日本ラグビーの成長-2019年ラグビーW杯の経済効果を含めて-
緒方 沙也香	米と食文化

## 田 禾ゼミⅡ

### 中国で会いましょう

本学で初めてのゼミ生はこのクラスの皆さんです。これは縁ですね。複雑な政治状況、数が多い民族、不透明な政策が混ざっている中国の地域文化を研究する皆さんは本当に苦労しました。特に中国語がほとんど分からないにもかかわらず、最新の「一帯一路」の方針で指導される中国の現在の事情を、人口、金融、環境、企業改革、伝統文化保護と宣伝など、それぞれの角度から分析、研究発表を行い、一生懸命論文を完成する姿はとても感動的です。中には最後の論文提出ができなかった方もいましたが、このゼミで「中国」に対して、今までなかったほど関心を持つことができ、今後の仕事にもきっとプラスになると思います。

ゼミ旅行は実現できなかったですが、いつか中国で会いましょう！

### 卒業論文一覧

關橋 佳毅	中国「深圳」が迎える今日～経済特区指定を踏まえて～
山田 大嵩	中国人口政策史とこれから
木内 海斗	中国のHIV蔓延と日本への影響
中間 莉咲	中国との関わりからみた日本の医療
★表 隆太郎	中国の環境問題と原子力発電所
大松 求実子	中国キャッシュレス社会の実態
城 文佳	日中関係に関する中国への投資

## 田畑 顕ゼミⅡ

### 田畑ゼミ第3期生へ

皆さんは私が関西学院大学から送り出す3回目の卒業生となります。同志社大学のゼミとのインゼミ活動(ディベート、論文報告)で何か活躍したかといわれると微妙なところですが、インゼミ後の懇親会ではどのゼミより元気よく目立っていた印象があります。個性豊かな面々がそろい、勉強以外の場でも、楽しい時間を過ごすことができました。また基礎演習からの付き合いのメンバーもおり、口うるさい指導教官からの攻撃も、適当にかわし、どうにかゼミ論文、卒業論文を仕上げた皆さんに拍手を送りたいと思います。ゼミ論文、卒業論文ともに、自然とリーダーを務める人が出て来てくれて、それをサポートしてくれる人もいて、とてもありがたかったです。果たして皆さんのお役に立てたのか心許ない気持ちではあるのですが、ゼミで学んだことが今後の皆さんの人生に多少でも役立つ機会があればいいかと願っております。皆さんとの交流を通じて、教員として多くのことを学ばせていただきました。この場を借りてお礼を述べたいと思います。今後の皆さんの活躍を期待しています。

### 卒業論文一覧

帰山 ちなみ	幼児教育無償化政策に関する考察
合田 弘幸	幼児教育無償化政策に関する考察
北原 佳奈	幼児教育無償化政策に関する考察
原田 愛	幼児教育無償化政策に関する考察
牟禮 瑞黄	幼児教育無償化政策に関する考察
西窪 大樹	積立方式移行に関する考察
★中土井 健	積立方式移行に関する考察
真田 瞳	幼児教育無償化政策に関する考察
酒井 康隆	幼児教育無償化政策に関する考察
鈴木 響太	積立方式移行に関する考察
村岸 桃佳	幼児教育無償化政策に関する考察

## 幻の中川 慎二ゼミⅡ

## 統合政策とシティズンシップ教育

20年ぶりに卒業論文を目指した研究演習を学部で持ちました。関学経済学部では最初で最後の研究演習です。幻の1回生になりました。テーマは「統合政策とシティズンシップ教育」で、研究演習入門以来「移民の背景のある」住民のシティズンシップについて議論してきました。入門では東京合宿1泊2日を実施し、東京駅から新大久保までチームに分かれて歩きました。ツーリズムへの関心から始まり、もし日本語ができなければ、観光客がどういうところで困難を感じるのかを実感することを目的に、自由に移動しながら、駅などの多言語表示、多言語の看板のほか、一言語での表示などにも注意しました。

研究演習Ⅱでは、Ⅰに引き続いて「ヨーロッパの統合政策とシティズンシップ教育」について学んだあと、日本における共生と市民権について議論しました。日本の外国籍住民、在日外国人についての文献も加えて講読し、それらの問題群から卒論テーマが選ばれ、スポーツ労働移民、移民2・3世である「外国人」（2重国籍）スポーツ選手、日本語支援を必要とする子どもたちが研究対象となりました。おりしも入管法改正法案が国会を通過し、移民政策をめぐって議論する材料が豊富にあった時期なので、さらに研究テーマを掘さげるチャンスでありました。社会人サッカーや部活で水泳を続けてきたスポーツウーマンとスポーツマンが取り組んだテーマが二つ。それに、上ヶ原小学校にヒアリングに行き、取り組んだ日本語サポートを必要とする子供たちについての論文の3篇。加えて、元ゼミ生で聴講生の荻野大斗さんが「移民受け入れ」に取り組まれました。論文は、取り組んだことのやりがいも成果もありますが、それ以上でもそれ以下でもありません。今後はそれぞれの道で私がみなさんとの議論で常に論点としたマイノリティのことを忘れず活躍してください。

## 卒業論文一覧

- |        |  |
|--------|--|
| 丑本 加子  | スポーツ労働移民の実情—途上国からつかむ夢とその裏—               |
| ★藤原 佑輔 | エジプト選手ドイツ代表引退のインパクト—移民の背景を持つスポーツ選手の事例から— |
| 梅田 大樹  | 小学校における日本語教育について                         |

## 豊原 法彦ゼミⅡ

## データ分析を生かすために

このゼミでは、まずEXCELやRを用いた最小二乗法などの分析を実際に行うスキルを獲得してもらいました。その後各自の関心あるデータを用い、事前の想定と得られた結果を比較しながら、データや計算結果の読み方、モデルの改善方法について学びました。そして調べたものをまとめてプレゼンし、それに対してオーディエンスがコメントするというトレーニングも行いました。さらに数式を簡単に計算できるMapleを用いて、理論モデルの分析のためにコンピュータソフトがどのように役立っているかを体験しました。

次にインゼミ大会では「東京オリンピックの経済効果」について発表するためにネットでデータを集めて、レジュメを完成させました。あわせてプロセス管理も学びました。

最後に卒業論文では、各自が選んだテーマについて各学期それぞれ2回のプレゼンを行い、質疑応答によって論文の内容が深まりました。

身の回りでは10年前に想像できなかったことがAI化を通じて進行しており、これまでの勤と経験が見える化されることで便利になるとともにその背後では厳密な統計分析が行われています。これから生まれる産業について思いを巡らし、「何を」「どうする」のか、そして「その目的は何なのか」をしっかりとらえて意思決定するためにゼミで学んだスキルを存分に発揮してください。

## 卒業論文一覧

- |         |                                   |
|---------|-----------------------------------|
| 山下 力也   | AI・ビッグデータの動向と今後                   |
| 岩田 怜    | 通信業界の今後と教育に与える影響について              |
| 筒井 遥平   | AIの発展と将来像                         |
| 小林 朋樹   | トヨタ自動車のこれまでと今後の展望について             |
| 池田 直斗   | 日本の農業の課題とこれから                     |
| ★山下 真理子 | 日本におけるエネルギーのベストミックスとは             |
| 前田 脩介   | 睡眠～睡眠不足の悪影響～                      |
| 橋爪 勇飛   | 日本サッカーの今後                         |
| 長尾 一輝   | なぜ若者の地域離れが止まらないのか～あるべき神戸市のこれからの姿～ |
| 山田 亮介   | スニーカー市場調査レポート                     |
| 田島 優樹   | 二輪業界の動向と今後の展開                     |

## 野村 宗訓ゼミⅡ

### アナログ時計の発想

デジタル化が進む中で、あえてアナログ時計にこだわっています。スマホが時計という人が多くなっていますが、常に時間を視覚的に意識しているのでしょうか。これまでの経験でも、授業やサークルに参加する時、バイトに行く時、就活をしている時、常に時間を考えて動いていたと思います。とりわけ、高いチケット代を支払って購入した飛行機を利用する旅行では、いつも遅れないように注意していたはずですが、今では過去のことですが、私はレポートの締切りに関して、うるさいほど「バンクチュアリティ!」を連発させてもらいました。

言うまでもなく時間は貯めることも戻すこともできないので、その価値は貴重です。「お金は借りれるけど、時間は借りれないから、休み中に海外旅行に行っとけば…」というアドバイスをしてきました。これからは自由に使える時間が制約されます。でも1日の仕事、週末の過ごし方にメリハリをつけられれば、少ない時間で、有意義に過ごせます。友人や家族と時間を共有することに、ありがたさを感じるようになります。スマートウォッチが普及している中でも、残り時間を逆算して行動することで、満足度の高い生活を送ってほしいと願っています。

### 卒業論文一覧

能勢 広真	クラウドが社会にもたらす変化
上本 拓海	リニア新幹線の現状と展開
南條 夕莉子	GNHとインフラ
酒井 ひかり	超音速旅客機の実現への課題
日下部 兼士	日本における最適な電力供給の提案 再生可能エネルギーとスマートコミュニティの形成
島村 航	物流業界の改革 一モーダルシフトの観点ー
奥山 聖也	脱原発と今後の再エネ普及 風力発電・地熱発電のポテンシャル
奥田 佳也	関西3空港の棲み分けとこれから 関西経済のさらなる発展に向けて
生田 智士	駐車場カーシェアリングの活用とその展望
丸本 健介	再生医療 課題と今後の展望
貞吉 朋治	核融合の可能性
藤田 真季	日本の空港運営 ー民営化、一括運営ー
松田 恵莉	水素社会の実現に向けた必要性
川崎 姫奈	マイレージ制度からみる近年の航空産業
谷川 純哉	トヨタ生産方式による生産性向上 ー自動車製造業から他業種への応用にも着目してー
豊嶋 謙士	リニア中央新幹線の実現を考える
久保田 大輝	アパレルメーカーのワールドがこれから生き残るために
松下 侑里香	再生医療研究と関西経済の成長 ー神戸医療産業都市を核とした発展ー
柴野 真由子	電力自由化の現状と今後の展望 ーバイオマス発電と海洋温度差発電の可能性ー
中島 櫻子	成田空港C滑走路の建設はなぜ遅れたのか
白井 達也	観光立国実現に向けて ー交通による観光促進ー
平田 惟	社会的インフラストラクチャーな「暗号」
奥村 晋也	水素経済社会への道のり
玉田 愛実	日本の人口減少に伴う地域格差の改善に向けて ー訪日外国人を誘致するための地方公共交通の利用方法提案ー
高木 伸弥	日本の高速道路の歴史と変遷、および建設当時の背景 ー現代の高速道路の問題点とはー
原田 直宜	今後の都市間輸送の担い手は? ー新幹線・飛行機の比較を中心としてー
★高瀬 可奈	Status and Relationships of Transportation in ASEAN and Regional Disparities: From the Perspective of Indonesia
加藤 雄太	5000人の人間模様とブランディング
柴野 智子	神戸市の戦略から見る、日本における水ビジネスの可能性について
原谷 大地	通信事業の現状と今後の展望

## 西村 智ゼミⅡ

### 8期生の皆さんへ

2年半のゼミ生活、お疲れ様でした。ここに名前がある皆さんは、2年次の課題(書評と春合宿)、3年次の課題(先行研究レポート12本、インゼミにて研究報告、論文執筆)、4年次の課題(夏休み課題、卒論執筆)をすべてクリアされました。他の勉強、部活、バイト等がある中、よく頑張りましたね。チェックする方も頑張りました(笑)。2年半の間に、3名が辞めてしまいましたのでモチベーションが下がらないか心配しましたが、杞憂に終わりました。4年生後半にはすっかり仲良くなり、皆でディベート合宿など最後まで楽しんでくれました。

さて、悔いのない学生生活を送ることはできましたか?新しいことに挑戦したり何かに打ち込んだりしましたか?結果が伴えばベターですがまずは挑戦が大切。一步踏み出さなければ何も始まりません。「やってしまった後悔はだんだん小さくなる。やらなかった後悔はだんだん大きくなる。」は林真理子さんの言葉。私の最近のお気に入りのフレーズです。若い皆さんは残された時間がたっぷりあるのであまり共感しないかな。でも、若いうちしかできないこともあります。これからの人生、思いっきり楽しめますように。

### 卒業論文一覧

嘉本 和貴	個人主義が結婚意欲に与える影響について
土井 龍	体育会所属が就職活動に与える影響
松本 和馬	体育会所属が就職活動に与える影響
中尾 光志	女性の就労がもたらす少子化への影響
笹井 涼太郎	女性の就労がもたらす少子化への影響
塩田 智大	男女で働き方が異なるプロスペクト理論
山中 龍弥	同人誌即売会の行動経済学
高尾 花菜子	女性の就労がもたらす少子化への影響
★金正 奈々	音楽を聞くことによる非合理的な選択
★矢島 優里	音楽を聞くことによる非合理的な選択
福山 夏鈴	北欧の社会保障と幸福度の関係について
高橋 航太	無形資産投資が生産性に与える影響 ー人的資本形成の視点からー
北垣 香奈	北欧の社会保障と幸福度の関係について
開地 史高	個人主義が結婚意欲に与える影響について
飯川 辰吾	時間制限が人のリスクに対する態度に与える影響について
中川 翔太	女性の就労がもたらす少子化への影響

## 東田 啓作ゼミⅡ

## グループ研究の記憶

ゼミ生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。この学年もいろいろなことがありました。特に3回生の時のグループ研究のことが思い出されます。当初はなかなかテーマが絞り切れずに回り道をしたグループもありました。奄美大島まで何回もアンケート調査に出かけたグループもありました。どのグループも、自分たちで調査の計画から実行まですべて行った行動力には驚かされました。明確で面白い結果が出るかどうか分からないことに対して、好奇心を失うことなく時間をつき込めたことは、皆さんの成長にとって大事なプロセスだったのではないかと思います。最後にはどのグループもクオリティの高い研究を仕上げることができました。本当に素晴らしいことです。

4回生のときも、卒業論文に取り組む人、3回生のグループ研究をさらに発展させようとした人、それぞれのペースで研究に向き合ってくれました。2年半を通して、僕自身が教えてもらうこともたくさんありましたが、ゼミをより良いものにしていくためにたくさん協力してもらいました。どうもありがとうございました。行動力のある人がたくさんいるので、これからもどんどん自分の力で飛躍していってくれることと思います。皆さんのご活躍を心からお祈りしております。

## 卒業論文一覧

龍 茉莉衣	なぜテレビを見る若者が減ってきているのか—その背景とインターネットテレビの共存に関する考察—
張 詩謠	アリババグループについて
謝 霖	日本の高齢者の元気の秘訣
國谷 幸世	「はてなの茶碗」から見る当時の経済と落語の魅力についての考察
孫 慶志	人工知能(AI)に関する発展、影響
★吉田 拓海	経済と経済学の基礎Aの価格
西田 晴信	大学生の東京オリンピックのボランティアに対する姿勢の実証分析—参加意思の決定要因と受取意思額の評価要因—
冬頭 海斗	海外における日本漫画文化の受容—フランスにおける受容を例として—

## 林 宜嗣ゼミⅡ

## 卒業おめでとう。そして、ほんとうにありがとう。

関西学院大学における教員生活で最後のゼミ生を送り出すことになった。というより、私と一緒に卒業である。31期生のゼミ活動は共同研究で始まり、初めての個人研究である卒業論文作成で終わった。ほんとうにあつという間の2年半だったような気がする。2年数ヶ月前にまだ幼さを残してゼミに入ってきた若者が、ゼミでの報告、討論会などを経て大きく成長し、卒業の日を迎えることになったのはとても嬉しい。

もちろん、就職活動も含めて本当に忙しく、大変な2年半であったことと思う。最後まで一緒にゼミ生活を過ごせなかった人がいたことから、この期間がゼミ生にとって山あり谷であったことは容易に想像がつく。しかし、だからこそゼミ生活は楽しく、有意義だったのだろうし、共同研究やイベントを通じて培われた友情は、きっと卒業後も消えることはないと思う。人生において精神的に最も成長する時期にともに過ごすことができたのは幸せなことであり、ゼミ生に感謝しなくてはならない。

研究以外にもさまざまな思い出がある。ゼミ旅行、合宿、学祭での模擬店出店、コンパ等々。あげればきりがなほほどにさまざまなイベントを楽しませてくれたのも皆さんのおかげである。でも何より楽しく、僕にとって癒しの時間となったのは教室でのゼミの時間であったように思う。ほんとうにありがとう。

## 卒業論文一覧

太閤 浩章	肥満の決定要因分析
★阪上 洸太郎	転校生と共感力
杉山 孝輝	高校ラグビーにおける勝利決定要因分析
竹下 航	一般学生と体育会学生の就職活動における相違点—体育会学生は本当に就職活動に強いのか—
菊池 康平	パチスロ台「ジャグラーシリーズ」において、負けないための立ち回り
長澤 征久	幸福度の構造分析—都道府県データを用いて—
村山 早紀	うつ病発生の要因分析
渡 真衣子	児童虐待の要因分析—都道府県別データを用いて—
田中 瑞希	イメージの尼崎と本当の尼崎
青木 菜々	犯罪要因分析
田中 美希	日本に有料トイレはできるか
西迫 佑惟	「女子会」の持つ力について
明日 結奈	西条祭りの屋台保存における課題
矢野 映未里	ブランド力の数値化
野口 満理奈	若者における早期離職の要因分析
田尾 菜摘	大学生における「学業成績」と「生活活動」の関連性—学業成績のカギを握る要素とは?—
松山 理夏	後発医薬品の普及に影響を与える要因分析
藤岡 直輝	軽減税率導入による税収ロスとC効率性の低下について—家計支出から見る消費税負担と国際比較—
佐伯 玲洋	日本でEsportsの普及を促進するためには
岸本 真由	若者の転出要因分析—なぜ若者は都会へ転出するのか—



## 藤井 和夫ゼミⅡ

### ゼミを振り返って

卒業おめでとう。

僕も皆さんとは同期の大学卒業になります。2年半のゼミで、皆さん個人の能力や可能性を感じることができたのは、僕にとって楽しい経験でした。これからはそれぞれの道で楽しく生きていきましょう。

今の厳しい世の中、keep learning は不可欠です。その時に、自らを信じて持っている能力を存分に発揮するとともに、自分の殻を破って人とつながり、ともに動くことで生まれる成果と充実感を、ぜひ改めて実感して欲しいと願っています。

### 卒業論文一覧

鈴木 勝久	日本の地方公共交通—少子高齢社会での地方公共交通の在り方を問う—
山本 陽介	外国人技能実習制度を分析する—韓国の外国人労働者受け入れ制度と比較—
井出 もも子	愛されるキャラクターの秘密とは
堀田 実菜	観光立国へ向けて
山口 夏未	幸福論
新 大樹	ASEAN と中所得国の罅
三原 晴希	日本のバラエティ番組の「笑い」について
坂口 健仁	小規模店舗のデジタル生存戦略—消費者リレーションシップの観点から—
上村 夏々世	アジアにおけるスラムの実態と脱却への光
中見 早希	企業価値を高める戦略的 CSR の必要性
吉田 莉夏	東日本大震災がマクロ経済に与えた影響
田岡 奈那子	日本の働き方
★衣斐 健太	日本国内の子どもに対する貧困対策の改善案
北野 杏莉朱	テーマパーク戦略—TDRとUSJの成功の鍵—

## 藤井 英次ゼミⅡ

### 「評価」というもの

提出された卒業論文を評価する。この教員側からの評価が一般的な意味での卒業論文の評価ということになる。しかし、執筆者本人にとってより重要なもう一つの評価がある。

長く骨の折れる作業を経て自ら卒業論文を完成させた人は、それを是非誰かに読んで欲しいと感じるものだ。産みの苦しみを経て抱く我が子への愛情といえば大袈裟だろうか。作曲家が苦勞して作りあげた曲、アニメーターが気の遠くなるような作業を重ねて世に送り出す作品等、何かを生み出す作業は本来非常に骨の折れるものだ。しかし、だからこそ自ら仕上げたものには愛着が生まれる。反対にこんな卒業論文には何の愛着もない、誰にも見てほしくないと感じるのであれば、それはそれで研究の質を正直且つ端的に物語っている。

U2の“Yahweh”という曲にこんな件がある。

Yahweh, Yahweh  
Always pain before a child is born  
Yahweh, Yahweh  
Still, I' m waiting for the dawn

卒業後も様々な形で「評価」というものに遭遇し、ともすれば他者からの評価に一喜一憂しがちだと思います。しかし、時折立ち止まって自分自身の偽らざる直観に尋ねてみることも大切です。卒業研究を通じて学んだことはあなたを裏切りません。

卒業、心よりおめでとう。

### 卒業論文一覧

★仕名野 理菜	消費税の所得に対する逆進性と軽減税率
渡邊 悟志	民主化されたミャンマー経済の展望 ～投資先としての可能性を考察する～

## 前田 高志ゼミⅡ

### どこまで行っても明日(あす)がある

四国合宿から始まった皆さんとの2年半は私にとって至福の日々でした。皆さんとともに学び過ごせたことを心より感謝しています。9期生の皆さんは勉強にもイベントにもすべてに全力で取り組んでくれました。兵庫自治学会や関西広域連合協議会の発表会、関西大学・同志社大学との合同研究報告会、兵庫観光まちづくり研究会、議員インターンシップなどでの皆さんの活躍を私は誇りに思っています。京都や岡山での合宿、懇親会なども楽しい思い出です。4回生になってからは就職活動や公務員試験受験で皆さん大変でしたが、そうしたなかで全員が立派な卒業論文を書いてくれました。

皆さんの人生はまだ始まったばかりです。ゼミでこんなに頑張ってくれた皆さんですからこれからも大丈夫、前途洋々です。辛いしんどいことも少なくないと思いますが、自分のやるべきことを誠実にやっていたら、必ずどこかで見てくれる人がいます。そのことを信じて頑張ってください。

「今日がだめなら明日(あした)にしましょ、明日がだめなら明後日(あさって)にしましょ、明後日がだめなら明々後日(しあさって)にしましょ、どこまで行っても明日(あす)がある。」(未来を信ずる歌)

皆さんの人生の幸多きことを。

### 卒業論文一覧

安岡 蘭奈	経済社会面からみた化粧の諸相に関する研究
南 秀太	スポーツによる地域経済の活性化
石井 雄一郎	産官学連携におけるそれぞれの役割
★田村 知之	日本の労働時間と労働生産性そして働き方改革 国際比較による日本の労働政策の見直し
杉山 陽子	ゆるキャラがもたらす経済効果
前田 晴香	コト消費による地域活性化
相良 菜々美	信用金庫における地域密着型金融の展望
足立 明謙	「食」で地域活性化するためには B級ご当地グルメの視点から
速水 優輔	不動産を有効活用したまちづくり
中西 叶	中小企業政策の課題と展望
田中 伊吹	交通インフラ整備を実現するためには
藤尾 郁花	人口減少社会におけるA1導入が雇用に与える影響
廣瀬 晴菜	ふるさと納税による地域活性化～ふるさと納税は地域によってどのような役割を担っているのか～
有田 琴美	東京一極集中が日本にもたらす影響について
岩田 篤紀	劇場に客が集まる理由：兵庫県の劇場を事例に
野田 希	コンパクトシティを有効的に実現するためには
井筒 裕香	無電柱化による効果と課題
橋口 裕香	マンションを軸とした幸せなまちづくり
長尾 康平	プロスポーツチームによる経済効果と地域活性化 広島東洋カープの事例を元に
橋本 啓嗣	A1による労働者の負担軽減と失業の矛盾について
前垣内 達哉	晩婚化の要因とその解消～なぜ晩婚化は進むのか～
大西 史記	厳しい財政状況下に見るPPPの新たな潮流

## 本郷 亮ゼミⅡ

### 狭き門より入れ

五期生の皆さん、卒業おめでとう！端的に言えば「パリピ」、この一語によって特徴づけられる、非常に賑やかで仲の良い学年でした。初めは仰天し、うろたえましたが、次第に私自身も多くを学び、今ではその積極面を評価しています。そのような学年だからこそ、門出にあたり、次の聖句を贈ります。「狭き門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見出す者は少ない」(マタイ伝：第7章13-14節)。

人生は大小のチャレンジ・コンテストの繰り返しです。そしてチャレンジとは、敢えて「狭き門から入る」という選択である場合が多い。それができるのは、周囲に惑わされず、自分の頭で冷静に物事を判断する反骨精神、リスクを負って勝負する胆力、をもつ者ではありませんか？ いざという時には、恐れず「狭き門」を選択できる人物になってください。

最後に、(研Ⅱの正規履修生ではないが)わがゼミ生である6名の氏名・論文名をここに記す。枝松雄一「限界費用ゼロ社会の観点から見た「音楽」の在り方：音楽の商業的価値はなくなるか」、高階誠「開拓史時代の北海道」、中村甫「結婚の経済学」、藤本亜弓「CM」、松田優大「トヨタ自動車にみる日本の自動車産業」、山之口優「ブランディングがもたらす企業成長への影響」。

### 卒業論文一覧

原田 拓実	奈良県が東京オリンピックの経済効果を最大化するために必要なもの
野島 瑠恵	たばこ税の値上げと影響
川崎 健太郎	昨今の喫煙者・非喫煙者をとりまく喫煙事情
★石川 毅一	『経済録』第五巻食貨と『経済録拾遺』における太宰春台の経済思想について
畠山 星	動画共有サービスと動画広告市場：変わりゆく「テレビ」
大西 愛梨	日本酒とマーケティング
藤岡 観月	近江商人の経済倫理と宗教的背景
宇野 夏菜子	アイドルの経済効果について：モーニング娘。やAKB48が起こしたアイドル旋風
上松 溪太	ソビエト連邦の行政的命今経済と現代資本主義
松尾 尚樹	eスポーツの日本における現状と今後の発展
森本 凌太郎	フリークライミングの大衆化・スポーツ化による展望
三好 亮輔	藤原氏がなぜ栄え続けたのか
土谷 和	江戸期の経済状況：とりわけ武士の家計事情について
神之田 航	サッカー日本代表の課題とワールドカップ・ベスト8への展望
田上 航	ビワイチはプラスかマイナスか：自分自身も体感して
石田 弥子	経済が化粧品業界に与える影響
仲村 惇	人工知能による仕事代替の可能性とその影響

## 村田 治ゼミⅡ

### ダブルチャレンジ

今年卒業のゼミ生は、いつものように個性的な学生が多く「多士済々」の感が強い印象を持っています。大学時代に副専攻プログラムや海外経験をした学生も多く、また、体育会の学生もたくさんおり、それぞれが充実した学生生活を過ごしたのではと思います。ゼミでの勉学にも打ち込み、文字通り、ダブルチャレンジ、あるいは「文武両道」を体現してくれました。二年半、ゼミ生個々人にはいろんなことがあったと思います。

これからは、仕事の関係で会える機会が少なくなると思いますが、ゼミでの友人は一生の宝物と思い大切にしてください。ゼミの仲間を大切に、決して諦めることなく自分の目標に向かって進んでいってください。AIの発達の社会への影響は5年もしたら顕在化してくると予想されます。そのためにも、社会に出てからも目の前の仕事だけでなく、10年ぐらいのスパンでテーマを選んで勉強を続けて欲しいと思います。卒業後は大学時代以上に、ダブルチャレンジが重要となります。20年後、この中から、日本を代表する経営者や革新者が出ることを心から期待しています。

### 卒業論文一覧

間宮 真里奈	日本の奨学金制度 — 所得連動返還型奨学金制度の導入に伴って—
柴山 侑果	日本の外国人労働者の実態と課題
八木 誠実	地方創生における一般化及び定義に関して
佐藤 大祐	企業の過剰貯蓄問題について
岡田 莉奈	都市部の空き家の有効活用による社会課題の解決と経済効果
清水 香	なぜ豪州の観光客数は少ないのか
中田 ひとみ	ディズニーリゾートによる日本の経済効果
長澤 幸大	リーガ・エスパニョーラの経済効果から見るJリーグの未来
奥村 南実	タイプラスワンとして期待されるCLM諸国での日系企業進出・経営成果に関する要因分析
★半井 翔汰	人工知能の影響に伴う日本における雇用環境の未来
岩山 昂生	投資信託の活用
竹中 彩花	農業の現状と今後 — 6次産業化を目指して—
吉岡 力良	IR導入による経済波及効果 — 関西経済の復活に向けて—
平井 香葉子	これからの住居選択行動 — 持ち家率低下と賃貸住宅台頭の視点から考える—
向嶋 舞	40年後の年金
松井 理己	NCAAの経済効果 — 経済波及効果から考える日本版NCAAについて—
渡邊 未来	訪日外国人観光客による観光業への経済効果

## 宮脇 幸治ゼミⅡ

### 2018年度のゼミ総括

ゼミ四回生の林君、卒業おめでとうございます。社会に出てからも、卒業論文制作の過程で得た経験を生かす機会があれば願っています。これからの活躍に期待しています。

ゼミ三回生および二回生の皆さん、もう少し統計学に興味を持って学んで欲しいと思います。言うまでもなく、卒業論文制作にあたり統計学の知識が必要になります。また、統計学も経済学と同じくらい、社会に出てから役に立つと思います。数式に惑わされず、その背後の考え方を理解するようにすると良いかもしれません。

### 卒業論文一覧

林 友裕 西宮市の時間貸し駐車場 TIMES に関する分析

## 山鹿 久木ゼミⅡ

## 卒業おめでとうございます。

卒業研究に向けて、秋学期を中心に、テーマ決めから分析、報告を行いました。ある程度の長さの文章としてまとめるために、どう進めれば良いのかわからず、なかなか進まなかったと思います。これまで、いかに何事にも関心がなかったかということがわかったり、自分の意見を文章にまとめられなかったり、人に考えをうまく伝えられなかったりといろいろ自分のことに気づいたと思います。社会にでも、とくに何も変えなければ今のまま歳をとっていきます。マイペースでいいですので、少しずつ成長してってください。

## 卒業論文一覧

南部 直樹	東京一極集中の変遷と現状
飯阪 直也	eスポーツについて
豊田 克己	銀行の歴史や成り立ち
田津原 雄太	無電柱化の推進に向けた施策に関する考察
大前 智裕	BCP(事業継続計画)の必要性
中本 大智	少子高齢化社会に向けて、エンターテインメント業界で生き残るためには、何をすれば良いか
★榎 優大	日本のアウトソーシング発展について
赤毛 貴哉	新幹線から見る経済変動
牧野 文昌	京都市の景観制作における歴史と問題点

## 安岡 匡也ゼミⅡ

## ご卒業おめでとうございます。

今年で第4期のゼミ生を送り出すこととなりました。大学に勤めてもう13年、私も40歳の厄年になってしまいました。年々、学生さんとの年齢差を感じるようになってきました。

ただいま、在外研究中でゼミ生には十分な論文指導ができたかと言えば？マークがつく部分もあったかと思います。勉強は今後も続きます。今後お会いした時に論文指導ではありませんが、引き続きディスカッションしましょう。

ゼミでは合同ゼミでの研究報告そして卒業論文、さらに今回のゼミでは新しい試みとして、経済学思考を身につけるためのボードゲームであったり、フィールドワークに出かけたりと様々やりました。それらの経験は全てこれからの生活に生きてくるはずですよ。

今後もみなさんのご活躍を期待しておりますが、どうか心身のご健康をまずご優先してお過ごしください。元気があれば何でもできます。元気であり続けるためには、自分の好きなことをやるとか、こちらに来てグチを吐くとか色々あると思います。

しばらく在外研究中で中断していたゼミ募集は再び始まります。来年度は第5期生となります。ぜひ、OB・OGのみならずには後輩の指導にご協力頂ければと思います。また気軽に研究室にご訪問ください。

## 卒業論文一覧

三好 功祐	「働き方改革」の有効性について
谷内 敏生	障害年金制度の現状とそれに対する取り組み
橋本 健司	今日の日本における待機児童問題と保育士不足の現状
吉岡 孝将	衰弱死者の発生から考えられる生活保護制度の問題点
高田 直幸	日本の少子化の原因と対策—共働きしやすい環境を作る—
★松田 達也	日本における子どもの貧困問題に関する問題と対策について
道上 大	日本の介護難民問題について
川野 晃汰	イスラム金融について
神谷 佳	日本の待機児童問題と対策について
佐村木 晴輝	「食」を通じた子どもの居場所づくりの可能性
木村 光汰	ハラスメントに悩める日本社会
関 日向子	日本の大学教育

# 懸賞論文の選考について

経済学部では、1985年から研究演習Ⅰ・Ⅱの在籍者を対象として、懸賞論文を募集している。本年度は、個人執筆論文部門に6本、共同執筆論文部門に9本の応募があった。応募点数は例年に比べて多い。いずれも意欲的に取り組まれた論文であった。選考委員会の審査と教授会の議を経て以下の論文に賞を与えることになった。

## 経済学部懸賞論文受賞者と論文名

### 入賞

#### <個人執筆論文部門>

石本 康輔（猪野弘明ゼミ）

「コメ輸入自由化の実証分析—減反政策の効果も含めて—」

#### <共同執筆論文部門>

荒井友里・岩谷桃佳・小出将宏・竹島梨紗・中島宇将（栗田匡相ゼミ）

「セネガル漁村における漁業保険の需要—保険理解度が与える加入意思への影響—」

### 佳作

酒井菜緒（栗田匡相ゼミ）

「ケニアのHSNP現金給付プログラムにおける子どもの教育のインパクト評価—女性の現金使用方法決定権に着目して—」

阿部優志・岩崎桃子・魚谷航平・寺川楓・平山励（栗田匡相ゼミ）

「セネガル農村における夫婦間の共同行動が女性の自律性、家庭内交渉能力に与える影響」

### <講評>

学部学生の学術論文として優れた水準に達しているという理由から、個人執筆論文1編と共同執筆論文1編の2論文が受賞した。

1つ目の論文「コメ輸入自由化の実証分析—減反政策の効果も含めて—」は、先行研究を踏まえたうえで、日本のコメ市場における輸入自由化の社会的余剰の影響を、関税と減反撤廃の効果について理論・実証分析を行ったものである。生産量調整を供給要因に限定識別し、需要曲線をOLS推定する標準的スタイルを継承する。供給曲線は費用積み上げ計算と生産関数推定から導出するなど、理論と整合する実証面での工夫をこらしている。本研究は、問題意識の明確さ、論理的整合性等の点で高く評価された。

2つ目の論文「セネガル漁村における漁業保険の需要—保険理解度が与える加入意思への影響—」は、ミレニアム開発目標に準じて、セネガルの零細漁民の収入や生活の安定を目的とし、天候インデックス保険・損害保険の2つの漁業保険を疑似作成し、介入実験を行ったものである。現地調査によって得たデータをもとに、保険の個別レクチャーによって保険理解度を上げる有効性を検証し、提言している。本研究は、アンケート設計から実施、分析に至るまで意欲的な研究である。分析手法の適切さ、興味深い推察結果等が高く評価された。

なお本年度は入賞した論文に次ぐ優れた上記の2編に佳作を授与する。前者は「ケニアのHSNP現金給付プログラムにおける子どもの教育のインパクト評価—女性の現金使用方法決定権に着目して—」であり、ジェンダー平等の実現を意図して、現金使用決定を女性が有する場合等の教育支出に及ぼす影響等を検証している。後者は「セネガル農村における夫婦間の共同行動が女性の自律性、家庭内交渉能力に与える影響」であり、セネガル農村における女性の自律性、交渉力の決定要因を、独自の調査票を用いて、差分法と主成分分析等の手法で検証したものである。ともに入賞作に比べて遜色のない論文である。

（懸賞論文選考委員会委員長 桑原秀史）



①ようやく本誌の2冊目の編集を終え、ホッとしている。AIとかMe too運動の話題など、2018年度のトピックになるかと思っただが、時代の流れが早すぎて私の感覚の方が追いついていない。私ぐらいの年齢に達すると、温泉、旅行、コンサート、グルメの話題で溢れている雑誌を眺め、実行に移したいと思うが、そんな時間的余裕などめったにない。なので、NHKの『チョコちゃんに叱られる』を観ながらケラケラ笑っている。チョコちゃんみたいなツッコミが入れられたら、どんなに面白いだろう。あんな風になりたい。(T.F)

②今、日本の金融業界は、少子高齢化、超低金利という逆境に苦しんでいます。しかし、若い人々の柔軟な発想とAIの進歩が結びつくことで、日本の金融が復活する可能性は十分あるのではないかと感じています。

学生ページでは、個性豊かな学生が

#### Publisher

前田 高志 (経済学部長)

#### Chief Editor

藤田 友尚

#### Editors

秋吉 史夫

岡田 敏裕

巖 廷美

國濱 剛

#### Managing Editor/Staff

植田 幸利 (経済学部事務長)

土田 系

岸 美樹

発行/関西学院大学経済学部

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町 1-155

TEL. 0798-54-6204

©2019 All rights reserved.

集う関学経済学部の「魅力」を発信しています。記事の執筆・編集を担当していただいたエコゼミ委員のみなさん、編集に携わっていただいた事務室の方々、そして取材に協力していただいた先生方・学生のみなさんにこの場を借りて御礼申し上げます。(秋吉)

③今回は世界のMe Too運動について特集が生まれ、私自身韓国のMe Too運動について調べるようになった。男女の差はあっても、男女の間の差別は大幅軽減されていると考えながらもまたはそう思い込みながら生きてきたかも知れない。しかし、韓国のみならず世界を見渡すと性暴力に苦しむ女性たちがたくさんいることに気づかざるを得ない。もちろん、社会的弱者は女性に限らずいろんな場面で様々な形で現れるものである。なので、Me Too運動をきっかけに被害者の女性という立場に立ち返ってみることで、未来の潜在的な加害者と被害者を減らすことができるかもしれない。(巖)

④今号の特集に拙稿を寄せましたが、読みやすい文章を書く難しさを改めて感じました。普段から論文を執筆しているため、ものを書く頻度はそれなりに高いものの、研究論文では数式や図を多用することに加えて想定する読者が同じ分野の専門家と、勝手が違うために今回の寄稿には時間がかかりました。これを機に、文章力の向上のためにも、読書量を増やしていければと思います。また、普段何気なく読んでいる新聞や小説の文章も推敲が重ねられた結果だと思うと、今後はもう少し時間をかけて触れていきたいですね。(國濱)

⑤「エコノフォーラム21(第25号)」の完成おめでとうございます。本誌は執筆・編集等を教員と学生が分担しており、いわゆる「広報誌」とは違った内容となっている。特にエコゼミ委員会が編集を担当する「ゼミ紹介」では、先生方の意外な一面を垣間見ることができ、2年生秋学期からの研究演習入門のゼミを決める際にも活用されている。現在のような情報が氾濫する時代にあって、信頼できる情報を見極める

チカラは重要だ。そうして集めた情報をもとに、描いたゴールに近づけるような力を身に付けてほしい。(土田)

⑥エコノフォーラム21第25号発刊に寄せて、ご協力いただきました皆様様に心よりお礼申し上げます。そして、学生ページの作成に取り組んでくれたエコゼミ委員のみなさん、お疲れさまでした。学業、部活動、サークル活動、旅行や留学など、大学生の時にしかできないことがたくさんあります。そのことに学生時代に気づいていれば、今の自分とはまた違った自分がいたのかもしれない…と仕事を通して思う毎日です(経済学部生ならエコゼミ委員会に入っていたかも?)。みなさんの大学生活が輝いたものでありますよう、心より願っています。(岸)